640
13

0000305000

0000305-000

６４０－１３

支那読本

後藤朝太郎・著

立命館出版部

昭和８

AAB

8. 6. 9

後藤朝太郎著

支那讀本

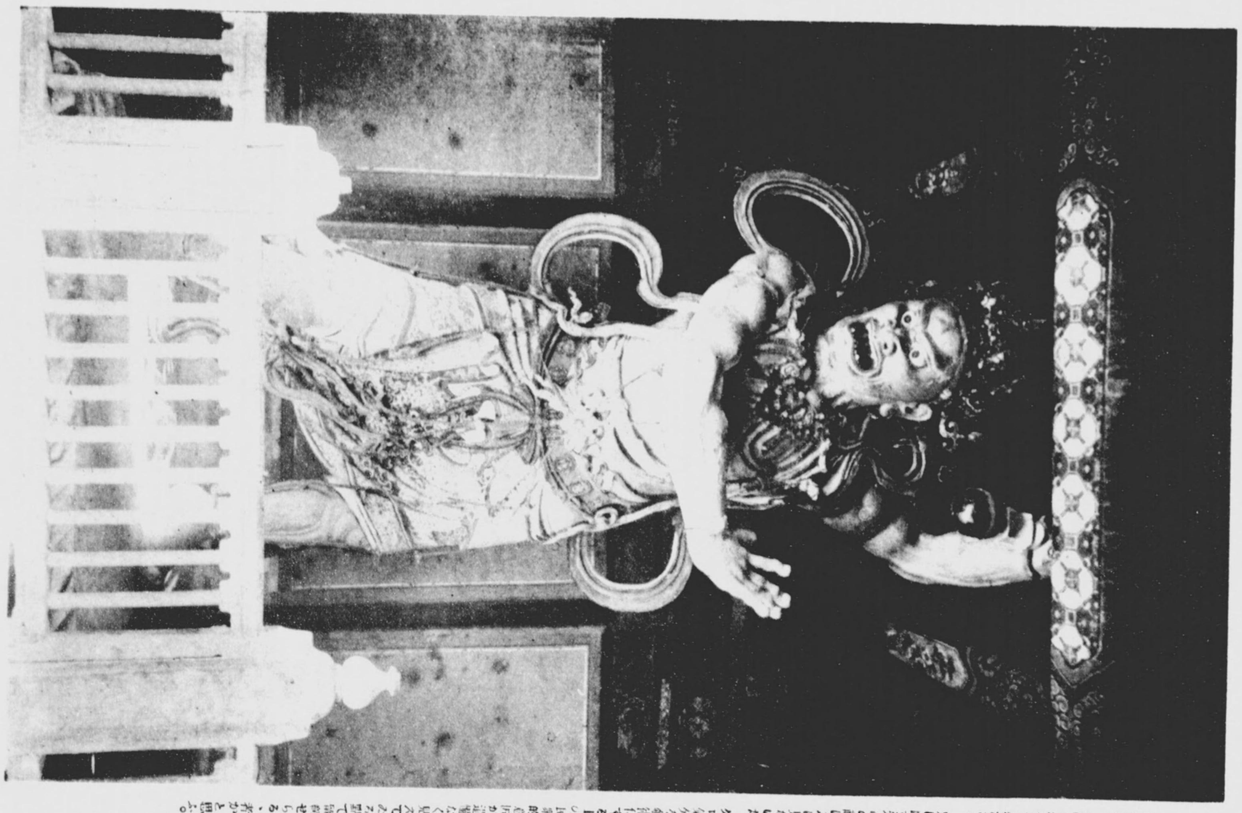
後藤朝太郎著

支那讀本

立命館出版部

江南の農家に戯るゝ兒童

長江方面の田舍と限らず總べて水村山廓は、公安局だの、警察だのの必要を見ないくらゐ平和で、田家の門前にも、その地方色を示す童男童女の三三五五嬉々として遊んでゐる場面が見らるゝ。そのムクムクと着込んだ子供の支那服にはさゝ、日本製の織物の使はれてゐるのを見ることがある。



北平城ヒエロスクリフに見る山門の仁王

の仏れた城は、ユの城よれ以前に興亡を繰り返した遼金元明清の歴史を見つめてきたのである。この門の上の東西の高台は、遼の時代に建てられたものであるから、若しこれが正面に置かれていたとすれば、この門の建築年代は遼代まで遡ることもあり得るであろう。この城の最高の高台に見られる、赤い壁の高い建物は、清の乾隆帝が建てた「雨花閣」である。この閣の内部には、ヒエロスクリフ（香山）が、その名勝の景観を一望に収めることが出来る。

清、乾隆皇帝の寵愛を鍾めた土耳其の美人シヤンフエイ(香妃)の畫像

伊太利亞の畫人で、乾隆帝の側近く禁裏に入り、洋畫を支那畫に應用し、一新機軸を出したものにランシニ(郎世寧)その人のあることは歴史に有名な話である。馬に牛、白羊、狗など萬牲の描寫に至つては殊に稀有の名畫を殘してゐる。郎世寧の筆、香妃像は支那繪畫史に興味を有つもの、常に話題に出るところのもの、皇帝が同妃の爲めに特に建て與へた土耳其風品といふは今尚武英殿の後方にそのまゝ殘つて居る。妃の全身毛孔からは芳香が發散してゐたとも云はれ、又そは腋香ならんかとも傳へられてゐる。昨今この名畫も何造りせられ米國へ借獄の擔保になどと物騒な風評も立てられてゐる。

北平紫禁城ペイハイ(北海)漪瀾亭の廻廊

支那王者の庭園として、北海、中海、南海や離宮昆明池のあるうち、ペイハイ遠帆樓下のこの廻廊はかりは建築美術美の粋を集めたものさながら萬壽山の長廊と好一對の觀と稱し得らるゝものであらう。蓮池を隔て、五龍亭九龍壁を眺め得べく、老樹の水汀游士吟客の歩を停めさせてゐる。近時冬はスケート並の集まり來る者多く、スポーツマンの人氣を集いてゐる。

640-13.

支那讀本の序

支那讀本の任務は、支那全局面の大自然と、その全土に現はれた萬般の社會現象を判り易く網羅することに在る。大陸の山川、地理、風土民情、風俗習慣あらゆる方面に亘つての支那常識は、從來とても、日本の各方面にかなり力説せられ、研究もせられてゐた。が今日聯盟脫退の止むに止まれぬ重大時期に際會しては、層一層支那大陸に就いての御互の認識を深め、尙念には念を入れて十分に之を檢討し得るだけの用意がなくてはならぬ。

世界の耳目は東亞の天地に集中せられ、太平洋上暗雲低迷を見ると云ふ急迫した時局を見るか、どうかは別問題としても、東亞の指導者を以て任ずる國民は、その職業の如何に拘らず、又その頭の新舊如何を問はず支那大陸の事物に多大の關心を持つてゐなくては一人前でないやうな氣持ちがして來た。こゝには時局が焦眉の急を告げて來た爲に、支那常識が重要性を帶びて來たと云ふのではなく、元來高所大所から見てお隣の支那のことは、一身同體の感じを禁じ得ないのである。之を對支政策だとか、對支外交だとか、對支と云へる語を使つて相手國呼ばはりをすると云つた他人行儀扱ひをすることすら、どうかと思はれる位である。昨今東亞のモンロー主義の提唱されてゐるに鑑みて見ても、

東亞に國をなすお隣同志が蝸牛角上の論議に日を費やしてゐるべきではない。一日も早く東洋の福祉平和の樂土境を建設すべきである。その道程に考の行違ひ、感情の蟠まりのあつたにしたところで、やがては兄弟墻にせめぐことを止め、何としても眼界をひろめ、遠い見透しをきかせ、大國民の態度で以てどこまでも更に一層深い支那の認識を持たなくては嘘である。

聯盟諸國の東亞に對する容喙は、それ〳〵そのちがつた歷史と認識のない民族的見解から、机上の一般論をこねてゐるに過ぎず、從つて著しく東亞の實相に卽してゐないものが多い。苟しくも將來の運命を東亞モンロー主義におかんと決意するものは、何としても順序として支那全局面の大自然と又その萬般にわたる社會現象、民族の動きについての眞の理解を持たなくては始まらぬ。前途にどう云ふ事があらうと、ともかくも、日本は東亞の盟主として、東洋平和の確保、東洋文化の指導者となつてゐる。その亞細亞諸民族の福利を增進して行かうとする期待の大なれば大なるだけ、お隣の支那と云ふ國とその民族性を今一段と眞劍に研究してその理解を十分に徹底させておくの必要がある。この讀本の生れ出たのはこゝにその第一義があると信ずるのである。

支那四億幾千萬の住民は、夏、殷、周の三代から春秋戰國、秦の統一、兩漢の時代へと、その傳說時代から歷史時代にかけて、制度文物は、住民の生活、音樂、美術工藝、娛樂、文學、衞生、本草、

長命術、とあらゆる人間生活の重要な部分を學び得てよく味ひ、之を悉く卒業して仕舞つてゐる。

ユダヤ滅び、エジプト亡び、アッシリヤ、バビロンも無く、歷史が示す內容と充實した固有の文明を保持し、自己の民族的進展を續け來たれる古民族としては、恐らく支那民族の外にないであらう。世界人口の五分の一を包有し、世界の文明諸民族が兎角に之に關心を向け、經濟に、資源に、外交に、文化にと、それぞれその立場から銳意、之が調査に、探檢に、或はその實際方面の玩味、試練にと力を致してゐる。そのうちでも遠方の歐米などよりかも、日本とロシアは殊に之に深い關心を持つてゐる。日本は、云ふ迄もなく、古來千有餘年の間、文化的接觸から、一にも支那、二にも支那と、之に師事することに努めてゐた時代もあつた。その爲めに古代文化については文字や書物、美術工藝等の上から、支那文化をあがめてゐた者が多かつた。從つて古代支那の方面については、今尙漢學者や、又その系統の人々の努力によつて、文章を通じてのその或る方面が多分に採り入れられてゐる。けれ共それは支那の筆の上に記載された文化の姿が主なものであつて、現實のそれと離れた事物が多かつた。支那は何時の時代でも、その記載されない、生きた、赤裸々の世相と、その內容を多分に有してゐるところであるから、眞の支那の姿を見ようとするには、古今の別なく、常に大支那の心臟の動きによつて察せらるゝ、熱あり又血あるからだを檢討して見るの必要がある。從來の漢籍方面による支那の打診は、この點に於て、その眞相を摑む上に、半ば以上物

足りない氣持ちがあつた。各時代の歷史、世相を見るにしても、第一その時代の衣食住の卑近なところすら薩張り突き留められてゐなかつた。昔しは何を主食物としてたべてゐたか、めしは日に何度食べてゐたか、又不斷、居室にゐるときは坐つてゐたか、衣服は如何に仕立てられてゐたかなどと云つた方面のその邊の具體的な事項となると全く考慮に置かれて居らなかつた。唯その史上に見らるゝ金殿玉樓の消息だとか、上流貴族の麗しい宮女生活だとか云ふことにのみ眩惑せられ、多數生民大衆の朝夕の生活狀態のことや、その生活費と云つた地味な實際方面のことになるといふと、觸れる事を避け、却つて、そのやうな方面のことを云々するは、學者、歷史家の恥でもあるが如くに考へられてゐた。かゝる見解の下に取り扱はれた東洋歷史だの、漢文だの云ふものは、支那の本當の姿を知る上に甚だ緣の遠い古玩的のものとなつてゐたわけである。

支那民族の血の通つてゐる本當の姿を見て行かうとするには第一、「山川風物の背景についての具體的な理解、それに次いで大陸的の認識を土臺として、更にその住民の人間としての生活振り、生きた民族的動きの方面を見なくては嘘である。」殊に歷代の帝王が內心重く見て居た所の保境安民の根本策と之を卜すべき日常生活の內容、推移、わけてもその經濟方面の機微について、最もよく洞察し之を突き止めて行かなければ、本當の赤裸々な支那民族性を認識する事は出來ない。「この點については獨り歷史地理と云はず、文學藝術と云はず、資源の方面、軍事の方面、政治の方面、どの方面を見るにしても民族性の理解が根本である。無論これ迄にしても、全然人種の違つた白人あたりとは異なり、そのお隣同士の有する共通の氣持には幾多の懷かしみがあり、君臣父子の五倫の道を始め日常茶飯事の末に至るまで、特に研究、穿鑿をしなくとも、相互に判つてゐる事柄が相當にある。中には熱心な研究者、趣味家の間で知られ紹介されて、特殊の人々、例へば禪僧の事は山寺に傳へられてゐると云つた風な事實は澤山ある。唱文に、料理に、動植物本草にとそれぞれの方面を漁つて見るとかなり出て來る。さう云つた日支文化交涉史上には穿鑿すればするほど隨分見出される。併し國利民福を圖り、生活の進展と氣持をなだらかにさせる爲めには更に一歩を進め、支那世相の一般風習、生活內容の事にまでも範圍を擴げなくてはならぬ。今や時代は進み、支那は日本と同樣、同體と考へられることになつた。日本人は一人でも多く、殆んど常識的に、國內の事情と同樣之に關心を持たなければ、時々刻々この時代相から取り殘されるの觀があるに至つた。新聞によつて、又雜誌によつて多少の支那の姿は察せられぬでもないが、併しそれは單なる軍事、外交、政治の一局部に限られてゐるか、さもなくば、唯支那を惡く思はせるグロ的な暗黑面の曝露記事が多い。公平無私にしてその有るが儘の姿を、あらゆる方面に亘り、その專門に片寄らず、又簡潔に失せず、さりとて支那一流の勝手放題な云ひ分にも加擔せず、穩健にして所謂中庸をとり、双方に厚き同情と周到な注意力とを以て、之を記述せんとすることは、事容易なる如くにして、實は容易でない。日本は帝國主義で行く國であり、支

那は民本主義の國である。近來の支那が帝國打倒の聲を大にして居り乍ら自ら幾分帝國主義にかぶれ來たつた事は明かに認めらるゝ所である。けれども大體の上から尚兩者の間に白と黒ほどの劃然たる區別が存してゐることは認められる。

本書はその立場の違つた双方の國情とその民族性を頭におき、比較的少い頁數の中に、あるが儘の支那の姿を細大洩らさず盛り込む事に力めた。その讀本の體裁を取つたにしては、あまりにも、物語り的な描寫法を加味し過ぎたところもあるが、そは肩の凝らぬやう、その解しにくい種々相を一般國民に平易に受け入れて貰はんが爲めの心配りから出たものである。若し夫れ本書の内容に不備の點、補足し度き點などの發見さるゝ時は著者は、漸を追ひ、改版の際、隨時隨所に加筆し完全を期し度く考へて居るのである。

昭和癸酉八年三月十三日

上海から江南の旅に出かけるに際して

後藤朝太郎石農しるす

支那讀本目次

一 緒言……一
一 支那の見方……一
二 支那經濟生活の特徴……六
△二 支那衣服の特徴……六
三 支那めしの特徴……一〇
△四 支那住宅の特徴……一四
五 抜からぬ經濟思想……一八
△六 國家統制を超越せる民衆生活……二三
三 支那の歴史地理……二七
七 民族としての史上の歩み方……二七

八　支那の大陸地理……三三
九　三峽の地理……三七
十　四川に入りて……四二
十一　四川萬縣重慶を中心として……四八
十二　長江の終點を煬帝の大運河……五四
四　支那の交通文化……六〇
十三　飛行機と鐵路……六〇
十四　支那都鄙に見る路面……六六
十五　路上の轎子と山西の自動車道……六九
十六　支那宿と茶亭……七二
十七　水鄉の民船筏の風情……七四
十八　碼頭の稅關と飛脚……八〇
五　支那の資源と勤勞……八四
十九　資源を抱いてあせらず……八四
二十　農產物と藥草……八八
二十一　勞銀に見る底力……九二
二十二　資源よりも勞役……九五
六　支那農村生活……九九
二十三　蘇州田舍の娘……九九
二十四　江南農夫の風情……一〇二
二十五　農村生活の娛樂……一〇五
二十六　田舍の共產氣分……一〇七
二十七　水鄉の舟行……一〇九
七　支那都城と山間僻地……一一五
二十八　都住ひの內容……一一五
二十九　城門の警備……一二一
三十　都城に見る公安局……一二六

三十一　大　上　海……一二七
三十二　南京と北京……一三三
三十三　武漢と福州廣東……一三六
三十四　山間の穴居村……一四一
三十五　山中の風俗……一四四
三十六　田舍生活の强み……一四八

八　支那土豪と細民……一五一

三十七　支那の富豪とは……一五一
三十八　上海のハードン(哈同)……一五七
三十九　富者の祠堂……一六一
四十　下層民の生活相……一六四
四十一　細民生活の內容……一六六
四十二　教育無用の細民心理……一七〇

九　支那宗教と學藝……一七四

四十三　宗教氣分の大觀……一七四
四十四　孔夫子の聖廟……一七六
四十五　佛教藝術と禪僧……一八〇
四十六　支那に見る俗間信仰……一八四
四十七　支那に見る回回教徒……一八八
四十八　耶蘇宣教師……一九二
四十九　支那の學術藝文……一九五
五十　支那の文獻……一九八
五十一　支那の工藝美術……二〇二
五十二　翰墨の味……二〇五

十　支那の娛樂と家庭……二一〇

五十三　支那路傍の手品……二一〇

五十四　輕業師姜先生……二一六
五十五　人氣を呼ぶ芝居の一二……二一〇
五十六　家庭生活の挿話……二一三
五十七　家の字の生ひ立に見る豚……二一七

十一　支那世相の表裏……二二一

五十八　ミエンツ(面子)の問題……二二一
五十九　茶館に行はれる民衆裁判……二二二
六十　支那商人に見る裏の手……二二五
六十一　阿片を運ぶ靈柩車……二三七
六十二　どうにもならぬ侵入者……二四一
六十三　潜行的な努力振り……二四五

十二　支那軍閥と政客……二四八

六十四　文弱を蘇生せしむるには……二五五

六十五　武備ある者は文備あり……二五七
六十六　支那の戰爭は商取引の變形のみ……二六一
六十七　共產軍と政客……二六五
六十八　南京政府と政局……二六九

十三　支那の社交と外交……二七五

六十九　支那に見る對話術……二七五
七十　社交性の禮讃……二七八
七十一　支那料理に見る社交……二八〇
七十二　阿片に見る無我の境地……二八四
七十三　芝居と賭博の社交振り……二八七
七十四　外交は輿論なり……二九二
七十五　笑つて答へず心自ら閑なり……二九七
七十六　日支の外交は語學から……二九九

十四　結　び……三〇四
七十七　日滿支三國住民の天職……三〇四
附　記……三〇九

支那讀本

後藤、朝太郎著

一、緒言

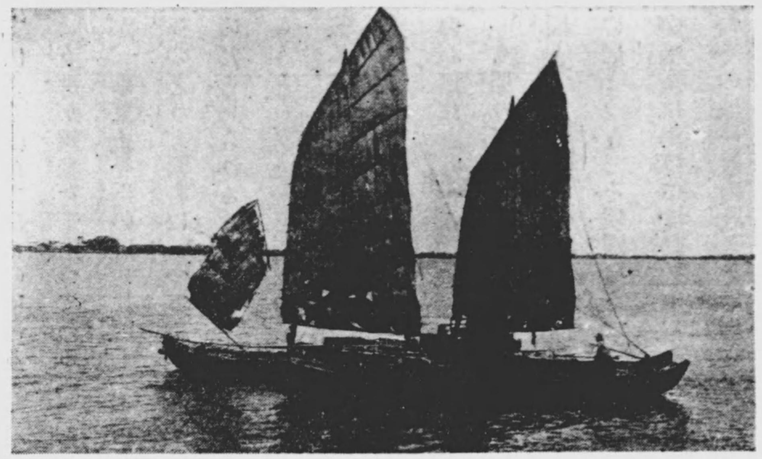
一、支那の見方

支那の國土は見る人に依つて如何樣にも見られる。一般人の見方のうちにも、新舊兩樣があつて、新しく見る人は支那最近の政治上の動き、外交上の曲折、又上海、廣東邊りのモダン式の流行などを事々しく神經質に感じて、その方面からのみ支那を斷定しようとする。又古い見方をする人は、現在の支那の動きなどに關係なく、唯書物や詩文の上からのみ之を美化して夢の如き考へ方をする。そして、實際の支那の心臟を突き留めようなどとはしないのである。

かやうに支那に對する一般人の觀察は色々あるが、これは東亞の大局の上から又世界國際場裡に於

ける支那の立場の上からも見なくてはならぬ。何としても人類幸福の增進、平和招來の上からも局面を常に重大視しなくてはならぬ事は云ふを待たぬ。又日本現在の對內策にしても支那大局の動きに依つてかなり影響を受けてゐる。こは歐米方面に對する關係と同じ程度に、否それ以上に重壓を感じてゐる。併し乍ら支那は如何に日本から、又東亞、否世界の大局から見て重大視せらるべきであつても之を外面から見た觀察のみでは、その機微に觸れた心臟の動きを打診する譯には行かぬ。眞の支那の機微の動きは之を外から見ると同時に、その內部に這入つて支那自體の如何なるものであるかをよく檢討し、よく味ひ、又之を充分に理解してかゝらなくてはならぬ。かう云つた點は、從來等閑に附せられがちであつたところである。支那といへば、直ちに政治外交の方面の事のみを論評し、それで能事了れりとなし、その更に這入つた內部の生活文化の方面の事は殆ど考へられてゐなかつた傾があるし。

支那はその國情が必ずしも、その政治外交と同じ步調で進んでゐるものでなく、むしろその內部の四億萬民衆の思々に進みつゝある幸福平和なる生活が第一に期待されてゐる。ところが、やゝもすれば、その住民の生活と政治外交の動きとは全然その層を異にし、その間方向の行き違つてゐる場合が多い。そは政客外交屋等が民意と一致しないからくりを操つてゐるに依る者である。從つて政治は政治、生活は生活と云つたやうな二重の社會相がこゝに現れることになる。本來ならば、政治と人民の生活とはピツタリ行つて合一狀態になるべきであるが、支那の國情はこれ迄の慣例から見ても、どうもさうは行つてゐない。人民自身はその永年味つた體驗から、殊に水深火熱の苦しみから、その施政振りに顏をふり向けもせず全然之に無關心の氣持で馬耳東風視してゐたり、又爲政者の方からも住民の生活など眼中に置かうとせず、體裁のよい主義宣傳や金看板の文字にのみ凝り、その間、眞に民意を尊重してやつて行かうと云ふ誠意を示してゐない場合もある。その爲め支那は國情そのものが著しく國家としての體裁をなさないことになる。殊にその領土のあまりに廣きに失してゐる所から長鞭馬腹に及ばずと云つた憾みもあり、邊隨分遠距離の地方、邊省では領土でありながら、中央政府の睨みが利かず、又利かないからと云つて如何とも仕樣のないところがかなりある。こは三千年の歷史あつて以來常に繰り返されてゐる事實であつて、爲政者も人民も共にその邊の事情とそれに對するやり



長江の下流を帆かくろ民船ののどけき

方はよく心得てゐるのである。

支那が國家を形造つてゐるか、ゐないかの論は常に國際外交舞臺で喧しく論ぜられてゐる所であるが、事實上今迄の歴史に照し、又現狀に當て嵌めて見ると、その主權と人民と領土の三者の合法的關係のどうも緊密に行つてゐない點がある。その行つてゐない所に實は支那の支那たる所が存してゐるのだと見られる。國として緊密に固つてゐない丈、それ丈、個々の人民自身には世界無比の政府に賴らうとしない堅忍不拔の底力が養はれて居る。如何なる安價な生活法であらうと樂しんで之を營むと云ふ特徴が養はるゝに至つた。この點は到底國家三要素の完備してゐる他の國々あたりの遠く及ぶところでないのである。此處に支那の動きを見る見方として最も留意すべき眼目が置かれなくてはならぬわけだと考へる。

支那の國情は上に述べた如く一種特別の色彩で發達して來てゐるため、各省各地の住民たちは國を國とも思つてもゐず、人間到る處青山ありと云つた風情でゐる。その我が國土に居ようと、また他國に居ようと、その別なく、住めば都と云つた氣持でどこにゐても悠々自適、そして出來得る限り、わが職業にかけては勤勉に、そして出來得る限りの貯蓄をなし、甚だしきは所得の給料の全額の上にまだその他一般の收入をも殘らず預金すると云つた位に營々孜々と努力してゐる。そのため、自分の國土から乘出し、國境を超越して、いづれの外國に行かうと、その住居地の周圍環境をわが故郷の如

く見、土地に親しみを持ち親から子に、子から孫にと三代、四代、五代と其處に世襲的の根據を据えると云ふ程の者もある。山東、浙江、福建、廣東の各地にはかうした考への下に赤道直下に、或は日本、滿洲、各方面に、延び行く者がその跡を絶たない。民族分布の上から云へば、印度洋以東、南洋から日本、シベリヤの廣大な地域にかけ、又大洋を渡つて米に歐にとその恐るべき精力的進出の實を擧げてゐる。この事は此處に喋々を俟たないところである。かゝる偉大なる民族的進出の一大盛況は、日本人としてもよくよく冷靜な態度で之を見且つ味つて見なくてはならぬ。思ふに支那民族のかかる海外進展は移民政策とか、殖民論とかの學理や講義によつて思ひついたものでなく、むしろ、國狀そのものが止むなく此處へ導いて來たものである。それにしてもそのよく四海兄弟の氣持を延長していづれの國土へも延び行き、行つた先をすべて我が天地となし、地所を安く買收し、ゴム園を開き或は錫山に鑛業を起し、或はまた海産物の一手販賣を開始し、船を動かして一纏めに之を自國の港へと運び入れるなど、その間の努力と、用意周到なる經濟的進展ぶりは、如何に支那の現狀に對してとやかくと批評を試みる者も、この海外進展振りの、名を去り實に就く堅實さには多大の關心を持たないではゐる譯には行かない。

浙江松江の田舍に見る農夫の袴姿

二、支那經濟生活の特徴

二、支那衣服の特徴

「支那經濟生活の特徴は、見えを張りたがる一般人のそれから見ると、考へさせられる節々が多い。特に手近な衣食住、又日常の一擧一動を見ても、大陸的に悠々と構へ、その何もしてゐないやうに見えてゐるうちに要領よく考へてやつてゐる。そのすること、爲すことの全部を經濟生活の圈内に編み込んでゐると云ふやり方だけは支那の人のよくやり來たつた長所であると考へられる。

第一、支那の衣食住は、半面にゆとりがあり、餘りのあるところのあるやうに出來てゐるものが多いやうに見えてゐる。しかし内容は何れもその簡易生活を主眼としてゐるのである」。そ

の考への現はれ方が著しく日本と異つてゐる爲、何事も不思議に思はれることのみ多く目につく。衣服の始末にした所でさうである。支那ではその仕立方の關係もあらうが、一つの纏つた衣裳、そはマーコワール（馬褂兒）（羽織のこと）にしろ、パオツ（袍子）（袷せの上衣）にしろ、又クーヅ（褲子）（ズボン）にしろ、之が汚れたときは、之をほどいたり、仕立直したりすることは、先づない。夏著の衣裳の外は、洗濯に出すことすら殆んどない。その古びたら、古びたなり、その儘で、古著屋の手に渡すのである。すると、それが下層階級の人々に買はれて行く。其處で又著古るされたり、破れて來たりすれば、一段又下の細民、苦力達が之を只に近い値で買ひ求め行く。無論寸法の大きいのを、小さく縮める位のことはあらうけれども、一々手縫ひや、ミシンの縫ひ絲を解き、洗ひ張りに出したり、仕立直しをさせたりといふ習慣は見ない。夏の單衣をざぶつと、丸洗ひにしたりする位が精々のところで、解くやうなことは全くないと云つてよい。それ故、新しい衣裳にしろ、古著にしろ、之を買ひ求める方から云へばまことに世話のない話である。「高ければ値切り、氣に入らなければ買はない丈の話で、至極簡單なわけである。かやうにして一枚の衣裳が、上流から下層へと段々苦力乞食のところまで流れ行く」。若し衣裳にして心あらば、之にお前はどんな人に著られて來たかねと尋ねて見たくなるくらゐのものである。それから古著屋街の店頭では、店のものが、客を呼び呼び大聲して、そのせり上げて行く言葉の節廻しも面白く、褒めたり、引つ張つたり、揭げ上げたりなどして、糶つてゐる

様子を見るのも興味が深い。隨分その一枚のものが破れた襤褸になつてしまふまで幾人幾十人となく變つた人の肌身にお勤めをする。その最後の棄てる所まで一枚の衣裳が勤めて行く。そのどこまでも根よく著ふるされて行くところは支那の民族性にぴつたり合つてゐるところだと評される。

支那服はハイカラな人でない限り、シユタオ（手套）（手袋のこと）など用ふる必要のない位本來長袖に仕立てられ、長ければ著る時、折り返しておくが、しかしその仕立ての長い程身分のよい人だと見られてゐる傾がある。舞臺に出る役者の長袖、又昔し漢魏時代に舞妓あたりの著てゐたものは、特別に長く、「長袖能く舞ふ」、と云はれてゐる位に袖が長く仕立てられてゐる。短かくては迚も踊れたものでない。袖だけは手の先、更に二尺餘も筒袖が延びてゐて、そのぶらん〳〵振りながら、舞臺に現れて來る所は、客を笑はせるほど呑氣に見える。又山寺の禪僧などの著てゐる墨染めの繻衣も、袖がほとんど地面にすれ〳〵になるくらゐ長い。尼姑の法衣も同じ樣に又長袖に仕立てられてゐる。法衣のこの仕立方は惡事をなさせない爲の仕掛けか、如何か解らぬが、その理由は兎も角として、いかにも現代離れのした長袖振りである。かう云つた例外もあるにはあるが、普通の世間では段々近代式に袖丈は短かくなりつゝある。併し手套を必要としない程度の丈を有し、左右兩手は眞冬にあつては拱いてゐるものが多い。尙兒女の衣裳は、美しい物は花旗（ホワチ）と稱し、紅綠藍黃取々りに模樣が入つてゐて、その冬物は綿を入れてむくむくした物があり、袖口には小い鈴などをつけた可愛いいものもある。併しその特徴としてはズボンの後方が半月形に抉り拔かれ、便利な樣に出來てゐる。見た所下から風邪を引きさうにも思はれるが、初夏の頃から段々慣らされてゐるので、寒中と雖も、平氣で出してゐる。一般大衆の支那服は木綿の靑衣であつて、こは丈夫一方に出來てゐる。南方では夏季にシヤーブ（夏布）と稱し、白く晒された麻で仕立てられた單衣が用ひられ、又ユンサ（雲紗）（雲南出來の絹に果實の汁にて染め出した柄の現はされたもの）なども用ひられてゐる。

支那服の相場は大衆向で、安きは一二圓より、又四五圓くらゐより、或は十圓以上、五十圓以上、百圓以上と、そのラッコの毛皮でもつけたのならば、上は際限なく天井なしである。下もまた實は際限がない。夏は涼しく冬は毛皮の裏つき、綿入れなど色々あつて暖いこと限りなく、スチーム、ストーヴの備へが無くとも、結構ぽか〳〵する丈の用意がちやんと出來てゐる。尙支那服の特徴としては、その人の好みもあることであるが、大體男女共に單にその色を選ぶに止め、柄模樣、圖案などにつき神經質的にこだはるものは少ない。戶外に遠望した時の色の感じ丈を見て、室內で差向つた時の柄模樣などの事は氣に留めようとしない。こは一つには、趣味の違ひからでもあるが、又一つには住宅內の部屋の窓の小さく、薄暗いために自然、柄模樣を問題にする事の少いためでもあらう。支那の仕立屋はチヨンイーチ（成衣局）といつてゐるが、普通の店の體裁をなし、その衣服の仕立賃は格段に安い。ミシンを用ふる家庭は少く、多くは手縫ひでこつ〳〵根よく勵んでゐる。

三、支那めしの特徴

支那の食事はその費用の點から云つてピンからキリ迄ある。先づ苦力細民の手合ひは、家に茶椀、箸も持たず路次の横町あたりへ出かけ、露店の前で安く暖かいものを選り食ひしてゐたりするものがある。波止場の苦力達は大道に車座を作つて、食卓一つ置くでなし、蒜を手掴みし丼の味噌等つけ、つけ、洗面器に盛られた飯を掻き込んでゐたりすると云つた食事振りを見せてゐる。茶は大椀になみなみとついでがぶ飲みをし、夏の炎天百四五十度の暑さのときは少なく共、五升六升をぐい飲みしてゐる。澤山あふるほど日射病には罹らない譯である。

その一等安上りの飯の食ひ方は、北支那では、大の饅頭一つを一日掛かりで捏り捏り食べてゐるあのやり方であらう。山東泰山に稼ぐ輻夫の手合はかごを擔ぎ擔ぎ、

袴すがたで腹ごしらへしてゐる蘇州城外の百姓

手に、一尺五六寸大の扁平なのを捏り取り、さもうまさうに頬張つてゐるのを見る。又南方ではミエン（麵）の安いのやツーウエー（粢飯）（こわめし）の握つたのを求めて腹ごしらへをしてゐるのを見る。一食のめしは、五錢、十錢とかけなくとも、十分に腹を膨らせることが出來る。最小限度の飯は支那の社會では實に惠まれた方法がついてゐる。「ことに蒜を多く用ふれば用ふる程、黴菌を殺し、冬は身體を溫め、價は安いし、いくらもかゝらないで。だから一擧三德の食料となつてゐるわけである。」人によつてはその香氣の高いのを嫌ふ者もあるが、人の事なんか氣に留めず、お互樣だと許り、生でむしや〳〵頬張つてゐる。

中流の家庭あたりの食事は相當その品數もあり、材料も整つて居り、一家團欒の形で食べてゐるがその調理方法と云ひ、又食卓と云ひ、如何にも無雜作のやうであるが要領を得てゐる。鍋釜の用意は少く、しかもあれだけの複雜な物を作り上げる。又その食器や料理の道具は無雜作なのが多い。料理に女が關係してゐない丈に、どことなく大ざつぱな所があり、その味ひ、その實質には相當な複雜味と營養價値の多いものが用ひられてゐる。いくら山海の珍味でも、支那料理では四冷盆の外は冷えたものは食べないといふ習慣があり、熱い方はいくらあつても、口中舌の先が燒けるほどであつても、構はない。食事は料理が主であつて、飯は添へ物の觀があり、それだけに料理の量が多くまた種類も豐かである。家庭料理としては、比較的皿數は少いけれ共、それでも五六種類の程度が普通と見られ

てゐる。材料の費用は、割合に野菜、肉、貝類などその地方色の窺はるゝ物が用ひられてゐて安くつき、八仙卓であると一卓に四人平均で座につくのが定まりである。宴會のときは丸の大卓が運び來られ、これには八人をおきまりとするが、之に尙一人二人加はつても差支ない。中央に出された丼を啄き合ふ丈のことである。從つて食器の數も少くて濟み、その點も手がかゝらず經濟である。宴會のときの料理は、材料もよし、皿數も增し、人數は八人一卓のきまりだが、主賓を上座に、主人は末座に、客に先づ酒を薦め主人自ら乾杯しその運ばれた料理に箸をつけ、同時に客に言葉をかけて箸をつけて貰ふ。支那の料理は始めから經濟的であり、社交的であるとの考から出來てゐるので、食事中はつとめて談笑朗かに、從つて暇もかゝる。それを默つていたゞいたり急いで早くいたゞいたりする事は禮でない。宴會にはゆつくりと長夜の宴を張ることもあり、其の間又社交の美德が十二分に發揮される。

支那の食事は、上流家庭になればなるほど贅澤な料理もどつさり出るが、元來精力をつけるとか延命長壽を期するとか、その方面にかけてのことが遺憾なく出來てゐるため、上流富豪の宴席には、料理の種類、品目その苦心などが結晶した形で現れてゐる。大都會は別であるが、田舍の奥地では可なりの規模で家庭料理又は宴會の料理が作られても、その割に金がかゝらない、殊に料理屋の料理はその部屋飾りだとか、男ボーイの衣裳などには殆んど金がかけられてゐないために、全くの材料費と

調理丈の費用で以て濟むわけである。此の點から見ると、客の方でも喰べた丈の材料費を拂はされてゐる樣な譯だから、思つたよりも安上りである。上海、北平などの贅澤な料理店になると、料理以外の附隨した經費を持たされ之を支拂はなくてはならぬ關係上、どうしたつて實際の二倍にも、三倍にもつくわけにある。元來經濟的に出來てゐる支那の調理法は、鯉の料理にしたつてさうであるが、その肉を使ひ、腸を使ひ、骨を使ふ、と云つた三段の方法までである。之が注意深い料理番の手を經て何れもおいしく賞味せられてゐる。宴席料理などでは、その席の金を支拂つた客の自宅へさして、その餘つた丈の料理は、すべて運搬させると云ふ習慣もあり、其の邊の細かい考へには、慣れない者は聊か驚かされるくらゐである。

近來大都會では、洋食よりか、何と云つても、支那食の方が客の心を惹きつける力の强く、次第に之が今は世界的勢力を持つに至つた。歐米の天地にも翼を延ばされ、チャプスイ（雜炊）の名によつて周く知れわたつた。日本ではやゝもすると、宴會料理の支那食のみを目して、之が支那めしの常態でゞもあるかの如く誤解してゐる者もあるが、支那の家庭では思つたより簡單にすましてゐる。一日の食事は地方によつて、三度の所があり。又四度又は五度の處もある。禪寺の精進料理では、一日五回、そのうち二回が粥で、三回が乾飯（普通の飯）である。

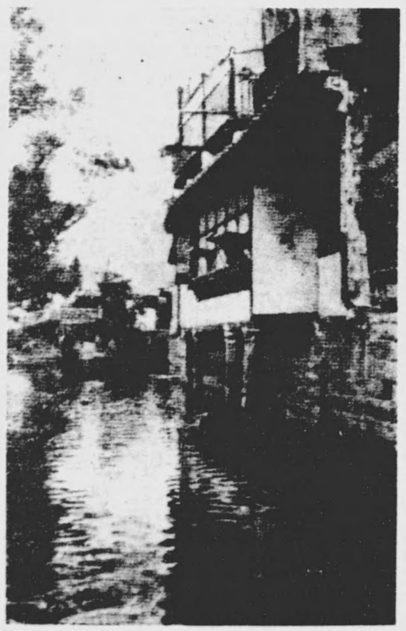
勿論肉類、卵、なんかも用ひられず、その名の示す如く本當のスーツアイ（素菜）なのである。古

い漬物のなつ葉を油でいためて出す料理は、筍、椎茸、豆、油葉などよりも禪味があつて面白い。飯は南方の米の産地は云ふ迄もなく、全國大半に白米が用ひられてゐるが粘りけのないぽろ〳〵したのが多い。といふのは、料理の粘つこいため、飯の焚き方をかへ、熱湯に磨いだ米を落すと云つたさらりとした焚き方で以て粘りを少くしてゐる。又シーファン（稀飯）と稱し、お粥を用ふる者が相當に多い。奥地では餅粟をお粥にしたり、又唐黍の飯をたいたり、高粱の團子を作つたり、色々あつて決して一樣でない。何れにしても、めしそのものに餘り金をかけないのが主眼で、料理の方に重きが置かれてゐる。支那街では何の商賣が一番多いと云つたつて、飯屋ぐらゐ多いものはなく、軒に高く包辨酒席、隨意小酌（一膳めし屋）の文字の多いのを見ても此の間の消息が物語らるゝのである。

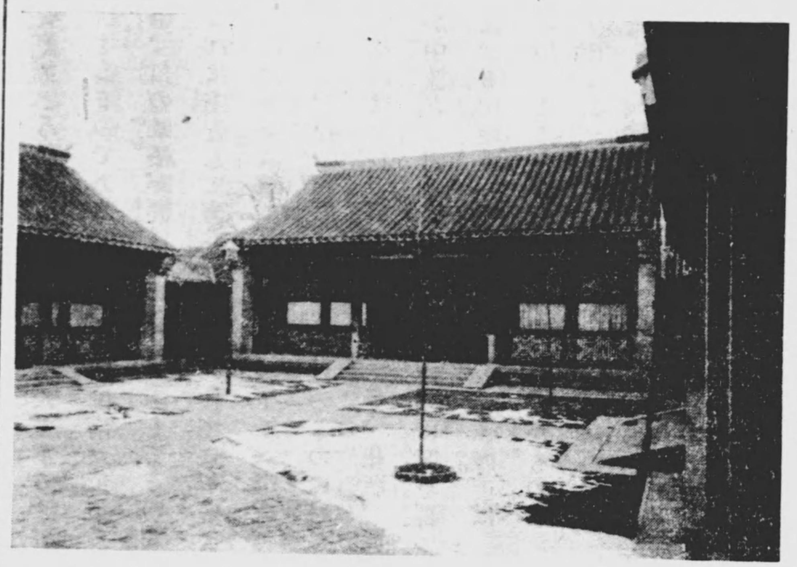
四、支那住宅の特徴

支那住宅については、これに又獨特の經濟生活の面目が窺はれる。上海あたりの二間まぐちの門内に、三家族も五家族も雜居して居るやうなところのあるのは、例外として、普通一家族の住つてゐる家にしてもが相當な多人數を包有してゐる。しかも其のうちのもの〳〵起臥はかなり詰め込み主義で、隨分無理をして居る樣子も見える。甚しきは、寢臺の代りに、食卓を二つ三つ竝べ之に當てゝゐる者もあつたり、商賣あたりでは、主人番頭の外は、夏場、土間に叓蓙、むしろを敷き、薄い蒲團にくるまりごろ寢してゐる者もあつたりする。寢臺に寢られる者は一家の中でも結構な身分の方だと見られてゐるのである。併し一般には南支であると、すべて夫々四本柱の寢臺が當てがはれ、之に年が年中、白の蚊帳が纏はれてゐる。そしてその側にはお定りのマードン（馬桶）（便器）が置かれてゐる。これは主として南方江南地方の住宅について見らるゝところであるが、北方では、寢臺の代りに、居間にはカン（炕）と云つてヲンドル（溫突）式の間溫めのついてゐるのが多い。南北共に居室は割に簡單で、たゞ起臥に便ずるだけのものに過ぎない。これには掛物、寫眞、神樣、姿見、花瓶、置時計、卓、椅子、と云つたお定りの物が飾られてあるのが中流どころの樣子であつて、特に客を喜ばせるに足りる美術品があるといふ譯ではない。まことにそこはさつぱりしたものなのである。婦人部屋はいくらか鞄だの、鏡臺だの、洗面器だの、調度類なども多く集められてゐるが、子供のある家は相當この外に玩具などが見當たる。

このやうな風で、支那住宅の部屋は概し



浙江カーシン（嘉興）運河沿ひの住宅



北平皇城根に見る上流家庭の住宅内部

てさつぱりしてゐる。壁は厚く、天井は高く、庭らしき庭は上流でなくては見られないと云つたわけであるから、全體から云つてその住居振りは頗る簡單である。時には軒傾き、屋根の破れた空屋に、何人か一家族許りの者が居て、洩れ入る月影を眺め乍ら、風流な食事をしてゐる細民なんかも見る。元來無頓著性に富んだ支那住民のことであるから、他の衣食と同じくその住居の方にしても割に經濟的に行つてゐるものと見られる。全國的に住宅の新しく建築されてゐるのを見る所は、南京上海邊りは別として、餘り多くは見ない。大抵古く時代のついたその重苦しい土廊建築の内に起臥をくり返してゐるのである。

「衣、食、住、の概略は斯様な狀態であるから、之を一口に云へば、支那の人は著のみ著の儘主義で一向不自由を感せず、側に如何なる醜い物があらうと、臭い

物があらうと、お構ひはなく、たゞ我が經濟生活を全うして行けばよいと云つた風に自分丈でけろりとしてゐる。田園自ら樂しみあり、と云つた悟りの天地を開いて澄ましてゐる」。動亂の際、夏の炎天下に、疲れた苦力が晝寢してゐるところを見るに、どこか高壁の蔭にでも場所を見つけて寢たら好さうに思はるゝのである。ところがさうでなく、わざ〳〵あの危なかしく、又ざわついてゐる鐵條網の下にちぐり込み、此處を樂土と許りぐう〳〵高鼾で寢込んでゐるのである。迂かり手を延したり膝を立てたりすると、針金で怪我をするだらうなどと、側から心配される位だけれ共、當の本人の寢顏は憎らしいくらゐ天下太平の延びやかなところを見せてゐる。すべてがこの調子である。併し、流石に兵亂の時局になると、田舍の方で不安を感じてゐる小百姓達が、全財産をまとめ、一輪車に山と積み前に女房と老婆、孩供の二三人など、よくバランスを取つて左右兩翼に載せ、自分で車の心棒を押し押し、畦道を辿り、上海の租界安全地帶へと急ぎ集つて來る。かう云つた勞働者、小作人などの避難振りに窺はるゝ品物はいくらもない。車上の荷物といふ荷物は、夜具に洗面器その外がらくた物であるる。これら一家眷族のすべてが慕して行ける樣子を想像して見たゞけでも、如何にその簡易生活の極致を發揮してゐるかゞ解る。中流家庭にしたところで、普通の家では、前にも云つた通り、まことにさつぱりとしたもので、壁に紅聯を掲げて纔にその氣持を漾はせてゐる位の程度である。いつ何んな時、兵亂が始つても、身體一つで逃げ出すならよいと云つた心構へをしてゐる樣に思はれる。紫檀、

黒檀の家具、唐三彩や、宋窯の青磁、明の萬歴の赤繪など～いふ貴い燒物を持ち合して居るならば、これ等は早目に荷送りをしていつなん時でも持ち出せると云つた鹽梅に用意してゐる。かう云つた國情が何時とはなく、各地方民の經濟生活を一段と身輕く簡便ならしめてゐるものだと察せられる。いくら家具や、衣裳は少くても、其の割に、翡翠だとか、孔雀石だとか、玉器だとか、また寶石の飾り物類は存外ポケットの中に色々と秘藏してゐる。よく寶玉などの話が出ると、身の廻り、あちこちのポケットの中から吃驚させる様な物を出して來る。綠濃き美しい玉蟲の這入つた琥珀の飾り物なんかも取り出して見せてくれたりする。その小さくて携帯に便であり、いつなん時でも金に換へられると云つた物は割に調法がられ、又その足も早いので喜ばれてゐる。

五、拔からぬ經濟思想

「支那に見る經濟生活の運用はこれ等の衣食住の方面許りでなく、更に進んでは、如何にして各々がその經濟活動を試み、いかにしてその手を延ばすべきかにあるのであつてこの點に心を碎いてゐるその目的には各人がミエンツ（面子）を重んじ、その日常生活に於ける體面に關することは特に細心の注意を拂ふことに習慣づけられてゐる。從つて互に人の顏を潰すことをしないやうに戒しめてゐる。殊に商賣人の間では商業道德を重んじ、一度でもそのよくない品物を納付して相手の感情をそこなふ如き事があつては、一大事とばかりかなり努めてゐるが、其の使の者に向つて、次のやうな事を云ふ。

「君の店は、年來信用してゐるのだから、まさか疵物だ、それ故、若しも燒物店から、約束の茶椀を二十人前の、いか物は入れてないだらう。忙しいので今は一々改めないが」と一言止めをさして置き、あとでゆつくり品だけ届けて呉れることがあつたとする。その場合に普通ならば、一々その包みを解きよく調べてから受け取るのであるが、其の使の者に向つて、次のやうな事を云ふ。

「君の店は、年來信用してゐるのだから、まさか疵物だ、いか物は入れてないだらう。忙しいので今は一々改めないが」と一言止めをさして置き、あとでゆつくり品物を改めて見る。すると果してよく皆注意されてゐるものばかりである。この式の遣り方は、信用のある支那人同志の間でよく理解されてゐることである。ところがつい信用されてゐるからと云つて、疵物をわざと、一つくらゐ交せて置き、恐らく解ることあるまいと、云つたやうなインチキ（隱的）なんか、古き看板に對してもやられない。又品物の値段などでも値切る時には、店の方でや

軍隊の休みに老父の家業を手傳ふ兵士

やもすると、お氣に召さなければ、他の店へ行つてお買ひ下さつたらよいでせう、の一言で片付けられて仕舞ふことすらある。だから支那の商店街には

眞不二價

童叟無欺

と云へる聯の文字をよく見るが、こはつまり老舗で正札に懸値なし、子供であらうと、紳士であらうと欺すやうな事はしてゐませぬ。と云ふ堅い商業道徳の決意を述べてゐる句である。斯う云つた心持はつまり商店其の者の信用を益々厚くする所以であるが、又絶對に信用のある藥店、呉服店、紙店などには自分のよく知つてゐる者にさう云つた堅いものがあるのである。

尙又田舍を旅してゐるとき、渡し場に來ることがある。乘つてからその船頭にいくらかと解賃を聞いて見るところが、首を振つて云はない。お心まかせなのかと聞いて見ると、いやお拂ひになるに及ばぬのです、と云ふ。他の乘つてゐる客に聞いて見ると、こゝは義渡です、だから只なんですと云ふ。成る程と頷かれ、呉越同舟の客と共に對岸に着くなりさつさと、テクツて行つたことがある。この話は浙江省の田舍、錢塘江畔、南星橋から西興に渡る渡し場の體驗談であるが、かなり河幅の廣いあの場所で、黒煙を吐いてゐる曳船に曳かれひかれて行く小舟は幾艘もゐるのであるが、今以て一向に渡し賃を取らうとしない。又その對岸の田舍をシャオシン(紹興)まで行く道中に、半道に一個所ぐらゐづゝ茶亭が設けられてある。例の涼亭と云はれてゐるものであるが、之に憩ひ、茶代を置かうとするといらないと云ふ。こは杭州の綢緞業組合の施設にかゝる義亭なのだから、金はいらないのだと云つて居た。かう云つた義渡や義亭があちこちにあつて、一向に貪らうとしない。本來〇〇義塾など云ふのも、金を取らないで教へるのが原則であるべきだが、日本では普通の學校よりも、餘計に高く取つてゐる處もそこいらにある。

支那經濟生活の方面は、その隱れた所に、隨分面白い事實が藏されてゐて、それが闇々裡に力強い慣習を形造つてゐる。その方面は違ふが、寺詣での善男善女たちと一緒に名のある禪寺にお參りして見ると、かけ離れのした山寺であると思はるゝところにさへ、此處にはまた恐ろしい變つたことを體驗したのであつた。と云ふのは、その寺の大雄寶殿の神前に供へられた例の二重三重に段々と重なつてゐる虹形のあの堂々たる蠟燭立てに持つて行つて參詣者の一人一人がわざ〳〵手向けた大の紅蠟である。その火のついたまゝ立てられた所を見て取つて、場所もあらうに、その參詣人の三拜九拜してゐる前も構はず、つら憎くゝも、機敏に寺僧が一本宛拔き取つてゐるのである。そして神火を吹き消し、小指の長爪で以て流れた蠟の跡を直し直し、そばに用意された箱の中へとニコニコ並べ納めてゐるところを見せつけられるのである。又他の寺でも、山門前の蠟燭屋とうまく連絡が取れてゐて、參

詣者の門を出る頃までには、大抵その蠟燭は函のまゝもとの店へ戻つて來るのだと云ふことを聞いたのである。かうした寺男のする仕事は果たして如何な考へなのであらう。餘り疑つてもいけないだらう。けれ共、圓座の側に捨てられてある蠟燭店の屋號の這入つた黄色い包み紙などを拾ひ、紅蠟を、鹽梅よく包み納めてゐるところなど見ると大抵解るのである。これは西湖湖畔の上天竺禪寺で、また江蘇太湖の石公山の禪寺あたりで體驗した事實談なのである。山寺の中ですら、これ程までうまく山僧などのやつてゐるところを一々檢討して考へて見ると、支那では商人は固より、僧侶であらうが、聖人君子であらうが、そのすべて信仰は信仰、經濟は經濟だ、とその邊の使ひ分けは決して迂かりしては居られない。そこに微妙な動きがあり、經濟生活の用意周到なところが窺はれるのである。

今更云ふまでもなく、そのよく考へられた經濟生活を細かく實際に適用してゐる所であるから、支那の人のすること爲すことは、總體にさはりがよく又柔か味があつてぎこちない所がない。何處までも溫容身に迫るものがある。見た顏附き、態度と其の平常の心掛けとすること、爲すことの間には大變な複雜味のある。これに思ひ至るといふと、益々支那の經濟生活の奥く深いことが考へさせられるのである。

六、國家統制を超越せる民衆生活

民衆を喜ばせる輕業師

尙社交方面に於ける經濟生活の要領は、我が宅へ客を招く如き場合、きつと食後は麻雀をして遊ぶ娛樂に這入る。無論こは賭博の意味ではなく、歌カルタを取るくらゐな輕い遊びと見られてゐるのであるが、その客に對する禮を盡す氣持ちがそこに現はれる。その一勝一敗のあつたあと、どゞのつまりは客をして最後の勝を得させるやうに仕向けられる。そは單なる勝ち敗けの意味ではなく必ず客に對するお土產の心持ちで、千兩、二千兩といふ現金を持たせて歸らせるやうにする。それについて暗々裡に客の方ではその邊の氣持は了解されてゐるし、又こは當然過ぎるくらゐ社交上の秘訣ともなつてゐる。併し客の方でも、まさかにそれを取り放しにする譯に行かない。ほとぼりのさめぬ內に、自宅へ返禮の意味で、その人を招く

ことになつてゐる。招かれた客は、又お定りの通りいくらか、その遊戯の結果、獲物があつて、送り歸されるに決まつてゐる。固よりその間、その人の身分、勢力、或は政治上の經緯などから恐ろしい一大事が、その部屋で突發するやうな事もないではないが、その邊の餘談秘事は此處には預かつておき、兎も角、普通の禮として、御つき合ひのしるしに多少の事をするのが、人情の常とされてゐる。

支那の人は、生れ乍らにして經濟生活の權化とも云はるゝ位、その道にかけて先天的の素質、長所を有してゐる。しかしそれがため、昨今の新しい經濟組織の統制ある活動に照らし、同じ歩調が取れるか、どうかの問題はあまり考へられてゐないのである。あの全國的に不便と見られてゐる流通貨幣制度の、不統一に陷つてゐる現實の問題ですらも、容易に之を十進法の統制ある組織に改めることが出來ず、一圓の大洋が一圓二三十錢の小洋に相當したり。二百七八十枚から三百四五十枚の銅貨が一圓の大洋に相當したりする。それも日々の相場が狂ひ、やれ時局の切迫の、やれ河の水が出たの、と云つて猫の眼の變る如くに變つてゐる。

國家統制の上からいふと、これ程、不便を通り越した馬鹿氣た話はないのであるが、しかしこの幣制改革のことは、誰れ人も之を如何ともする事が出來ない狀態にある。その不統一の狀態を利用して金儲けをしてゐる商人もどつさりあれば、また兩替屋をやつて夫で生活の全部が營まれてゐると云つた者がどれ位あるか判らない。經濟生活の弱點短所とも云ふべきものは、この貨幣の不統一にあるのであるけれ共、その災を轉じて福となし、それで結構生活をしてゐるものがいくらゐるか判らぬと云ふに至つては、尚更手の附けやうもない。外國人からは、その不統一がひどく非難されてゐるが、支那の人、自らは之を利用して金儲けをしてゐるといふ譯なのである。其處に支那獨特の經濟生活の面目が躍つてゐる。歐米の國々や、日本の建前から、善であり、正である、とのみ考をきめられてゐる事實が、この通り、支那には一向に行はれてゐない。又行はれる見込みも立たないのである。況んや支那全國の銀建てを改めて、金建てにしたり、幣制を金貨本位制にするなどいふことは種々な困難な事情もあつて殆んど望みのない事と見られてゐる。それ故支那內部に於ける經濟生活の全局面は、外から見て之に勝手な批評を試て見たり、熱を吹きかけて見たりした所で、容易に支那實體の眞相には觸れない。又ピントの合つた見方とはなり得ないのである。たとひピント丈は合はさうとした所で、レンズにこちらの思ふ樣に映つて來ないのである。結局、阿片問題のそれと同じ樣に、支那經濟生活の將來は、支那四億萬の民衆それ自身が自覺し、自分で方向轉換を現實にやつて來るやうになるのを待つの外ない。その間、政府の力だとか、聯盟の雲行きだとか、日本の有力者の議論だとか、對支政策だとか云ふものがその效力をあらはす如く見える事があつても、それ等は單にたゞ南京政府の當路者の耳や目に屆くかも知れぬと云ふくらゐのものである。果してその神經の中樞たる民衆一般の心境にまで屆くか、否かは問題である。況んや政府要路の大官などと別個の行き方をしてゐる、四億

萬人の經濟生活の實體にふれるところ迄には其處にかなりの距離があるのである。事實行き違つてゐるもののみ多く、結局糠に釘、暖簾に腕押し、百年の河清と云つた所へ落ちつくのではあるまいか。これと云ふのも、この支那の經濟生活の立て方が歐米や日本のそれと全然違つた三千年來の、國家統制を超越した、別個の天地に別個の發達、方向を取つて來たがためであつて、そこのところは最早や議論を許さない。事實が何よりも雄辯に物語つてゐる。〝唯々支那經濟生活の長所といふものは、支那四億萬の民衆自身が、國家統制とか云ふものを離れて、別に建てゝゐると云ふ譯だから、其處に觀察點の中心を置いて支那流の見方をするの外ないと云ふことにあるのである。」

三、支那の歴史地理

七、民族としての史上の歩み方

「世界の民族中、白人と相並んでその數に於て斷然他民族を壓してゐる者は、支那民族であらう。支那民族はその支那を活動舞臺としてゐるばかりでなく、赤道方面に、又歐米各地にと、到る處に、その天地を延長し、眼中、人無きが如く、思ふ通りの經濟發展をなしてゐる。その本國がいくら不統一狀態に陷つてゐようと、そんなことは氣に留めもせず、國內國外に、經濟發展を遂げることのみ唯一の目標となしてゐる。古來歷史の上では、幾度かその匈奴、蒙古族や、シベリヤ滿洲のツングース（通古斯族）などいふ外民族のために征服されたことはあつたけれ共、未だ嘗て文化的に外から征服せられたことはなく、文物、制度、言語、文字、すべて却つてその文化の點では低き征服者を壓倒してゐるかの觀がある。つまり支那民族はいつも負けてその實は勝つと云つた特殊な底力を現はしてゐるのである。

この不思議な底力を有する支那民族の起りについては西洋の學者は、或は西方黃河の上流、又はア

蒙古路へ向ふ北平城外の駱駝隊

ラピヤ方面、中央アジア方面から來たなど云ふ者もあり、その天文星座を始め上代文化の見方からして、こは元來西域より學んだものだなど云つてゐるものもある。フランスのテリアン、ル、ラクウペリーの西方起元説が出て以來、之を信ずる者が多くなつた。中には又文字の上から、風の字はアフリカの海岸、地中海に見る帆船の形から思ひついて出來たものではないか、などと説いたり、或は舊約全書にあるノアの洪水に關する傳説をかつぎ來たつて、支那の船の字が舟に八、口とある三要素のあることから説をなし、ノアの大洪水に、八人の弟子が船に乘つて東へ避難したといふことのあるのは、圖らずも、この船の字の上に殘つてゐる要素でそれがわかるなどと説き出してゐるものもある。かくの如くして、さも西方起源説を裏書してゐる者もある。或は又子丑寅卯等の十二支のあるをアラビア方面の獸環圖説に結びつけ、これも亦支那固有のものに非ずなどと云つたり、種々な説を設けて、支那民族並びにその古代文化が、

支那獨特のものに非ずして、外來のものであると云ふことを力説せんとするものがある。

併し第一に風の字のことであるが、これはもともと少しもその字源の姿が帆の形をなして居らず、又船の字は、後世の製作であつてその古代に見えてゐるものは舟の形に過ぎぬ。八口などは見えてゐない。又文化方面では固よりギリシャ方面から、又ペルシャ、アラビア、小アジア、印度と各方面から借りて來たものも勿論あるであらう。周末のあたりから戰國時代、漢代を通じて、かなり色々のものが這入つて來てゐる。併しその支那人種や、支那文化の根本が、傳來物であると云ふ風に無雜作に考へることはどうかと思ふ。黄河の上流の如き山國、高原地帶で、絶壁の多き地方、生存するに頗る不便な沙漠に近い地方などにその起源を求めんとする事は、常識の上から考へて見ても受け取りにくいことである。支那上古史に見えてゐる穴居野處の狀態は、今でも尙山西省や、河南省に、ざらに見出され、必ずしも之を上代生活の原始形式だと見るを要しない。その材木を使ふ必要もなく、又雨の殆ど降ることの少ない地方でもあるからして、乾燥し切つた山の麓を掘り穿ち、その中に寢臺などを掘り殘し、窓口を開けて、都合のよいやうに作つてゐるその住居振りは、現に目のあたりいくらでも見ることが出來る。今では大きい旅館までもが穴居その儘の姿で營まれてゐるのである。又上代には神農氏だの、燧人氏だの云へる人名が知られてゐるが、これ等は何れも農業の時代とか、火食する事を覺え

た時代とか云つたことを指したものと見られるであらう。又有巢氏などいふのは木の枝の上に住んでゐた人間のやうに云はれてゐるが、必ずしも鳥の如くに考へなくともよからう。尤も南洋の毒蛇、猛獣のゐるところでは、樹上に住まふ未開の民も見出される。又文字を發明した人として倉契と云へる人名が見えてゐるが、これは書契を創造した時代を擬人化してかやうに呼んだものだと見られる。卽ち文字が上古の社會人によつて創造せられた時代をかく指したものであると見られる。

斯やうに上代の傳說をば、成るべく具體化して現實の生活に引き直して考へる時には、今日の片田舍の住民の生活は或る程度まで原始人のそれと近寄つてゐる事實が考へさせられるのである。上代の支那の國情は、地方地方に、個々別々の小國があり、謂はゞ地方の豪族として、その界隈に勢力を張つてゐたもの、その居所が卽ち國と稱せられて居つたものと云へる。こはその國の王が一定の地域に、武器を備へて自ら守つてゐたとの意味で出來てゐる「或」の字を見ても直ぐ解るのである。この「或」と云へる字は、後に輪廓の口が加へられ、國の字となつてゐる。元來「口は」國土で「戈」を以てその一定の範圍が守られてゐた事がこの造字法によつて物語られてゐるのである。その一定の範圍とは、狹い意味の領土であつて、つまりその勢力範圍を示したものと見られる。支那全體が國と稱せられるに至つたのは、ずつと後の事である。群雄割據時代の夫々の國は、燕にしろ、趙にしろ、魏にしろ、楚にしろ、皆この意味に於いての國なのである。山東方面も齊の國、魯の國などと分れてゐた。其れ故に古代に於ける支那の天下は數多の國々に別れ、周が統一してゐたことがあつたり、秦の始皇の統一があつたり、漢の高祖の君臨を見たことがあつたりした。けれども大體は小國に分裂して國と國との對立のことがあり、その間、國際關係、外交問題が入釜しかつた。蘇秦張儀などの合從連衡の十字運動に飛躍してゐた事實は餘りにも有名なことである。元來支那全體が全天下の如く考へられてゐて、國と國との間には、常に利害の衝突、離合集散が繰り返されてゐた。それが爲めに、ひどく小國ながらも、外交手腕を練るの機會が多かつた。

かやうにして夫々の國と國との間がこれであつたからして、又部落と部落、個人と個人の間にしてもが、其の間、樽俎折衝振りといふのが仲々冴えたものであつた。この邊の興味のある事實は、史記列傳の文面に細かく見えてゐる通りで、學生達にもよく知られてゐることであらう。その民族としては國際的に練れ、又社交的に練れてゐて、人間としては獨立獨行の氣分が養はれ、その自ら經濟生存を全うする事にかけて特異の腕が出來てゐるのである。一旦緩急あるの時は、自ら反旗を飜し、野性を發揮したり、秩序を紊したりするものを見ると云つた形勢も看破せられる。かくして、强食弱肉の弊を助長するがために、王者爲政者側では、君臣の義を明かにし、國の秩序を維持するの必要を認めて來た。周代の文物制度を記した周禮とか、又その後の文化を加味してゐる禮記とかには其の間の消息が細かく記されてゐる。一方には詩經、書經などの文獻があつて、古代文化の表裏を物語つて

を居り、論語孟子には、國家、社會の秩序を正さんとするの氣魄がよく溢れてゐる。けれどもこれ等はどちらかといふと何れも政治當局者の側に喜ばれるものである。始めからその國家の組織になる傘下に又政府庇護の下にたよらうなどと考へてゐない農民漁夫たちにとつては、老子や莊子の氣持にふさはしいやうな自由奔放なる人生觀を體得するやうになる。一方にその秩序萬能で行かうとする氣分の濃厚なるに對して、他方に制度や、規則を超越して氣樂に萬事行かうとする無關心な大きな氣持も現れて來る。之を露骨に云へば、むしろ、國家の組織、制度などで束縛されようと云ふ氣持よりか、それに關係なく、自分で食つて、自分で樂しんで行かうと云つた呑ん氣な別天地を開く氣持ちの方が、本來支那一般の民族的生存觀ではないだらうかと云ふ觀察も出來るのである。この兩方面から見た支那の生活法は三千年後の今日であつても依然として、共に兩立し、しかも互に衝突することなく、爲政者が爲政者なら、農民は農民であると云つたやうな夫々別個の天地を開拓しつゝあるのである。丁度一方は聯盟の手前を氣にして、國内の不統一を揉み消さんと苦心してゐるに對し、他方には之に反旗を飜してゐるものがあつたり、ソヴィエットが聯邦と手を握つて見たり、全然足並の異つた行き方をしてゐるところが見られる。世間の人のねらひどころは、古も今も變はつてゐる所はない。支那の歷史は繰り返す。その民族として、又國家として國際生活に處する歩み振りは依然昔しのまゝの支那流の型を踏襲し、その邊は千古を通じて全然、軌を一にしてゐるものだと思はれる。

甘肅省蘭州北山の白塔寺と黃河の鐵橋

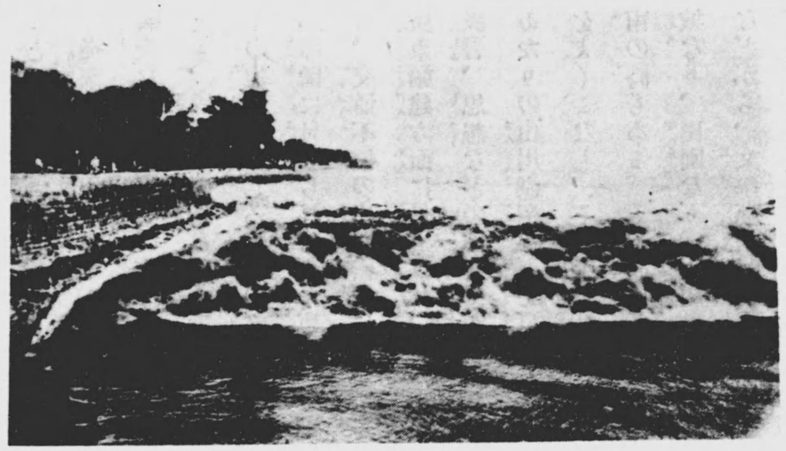
八、支那の大陸地理

「支那は、地理の上から見ても、あの通り平沙萬里人煙を絶つと云はれてゐる位に廣く、又高樓萬里の春と云つた風に、平野は見渡す限り廣々としてゐる。山は遠く水は長く、支那自然地理の上には悠久なる雰圍氣が漲ふてゐる。飛ぶ鳥も落さんず勢を示してゐた英雄の殘しておいた宮殿は、秦の阿房宮にしろ、漢の未央宮にしろ、又魏の銅雀臺にしろ、その他六朝、隋唐の金殿玉樓にしろ、今はすべて跡かたもなくなり、たゞ纔かに荒野の中に帝陵の淋しく殘つてゐるのを見るだけである。大陸にはかくの如くして、萬里の長城の空しく殘つてゐたり、又運河の淋しく在りし昔しの榮華を偲ばせてゐるものがあるだけである。古戰場を懷ふの氣持はあつても、國滅びて山河ありの詩情のそゝらるゝもののみ多く、別にどうと云ふ事はない。清の乾隆皇帝の御陵ですら、最近

墓泥棒にすつかり發かれ、陪葬品も何も、遠く外人の手に賣り飛ばされてしまつたと云ふ他愛もない結果になつた。つまり後世に殘る所はたゞ支那歷代の史上の記錄文書、と金石もの、各地の傳說、俚謠、風俗習慣と云つたくらゐのものである。併し地理上、最も特筆せらるべきものは、何と云つても大陸に漾ふ山河清壯の氣を承けたところの支那民族性そのものである。これ許りは、萬里の長城、長江の流れ、崑崙の雲などと共に大いに仰ぎ見らるべき四大呼び物と稱することが出來る。支那史を閱する者は、とかく歷史を以て單なる戰爭の連鎖劇と見たり、高貴、帝室の文化史と見たりしてゐる傾があるがそれを以て能事とせず、今からはこの大陸影響の下に生れた民族性の特徵に眼目を置くやうにしなくてはならぬのである。

支那大衆の生活と、民意の向ふ所から察するならば、古來幾度か建つては滅び、滅んでは建つた王朝歷代の天子爲政者たちの事柄よりも、民族として意義のある住民たちの經濟生活の安定といふ點にあるべきであると考へられる。新らしい眼で見てゐる有識者たちは、更に之を歐米日本などに見る國際地位の方に向け、民國の地位を高めようとしてゐるものもあるが、それは支那の歷史地理の上から云つて見當ちがひの考である。こは出來れば無論よし、出來ざるも元もとだと云つた悟りの心をおくものゝ考の方がよい。

支那は大衆の國、民意の國であるのだから、歷史あつて以來、常に何れの王朝の帝王も、看板には、

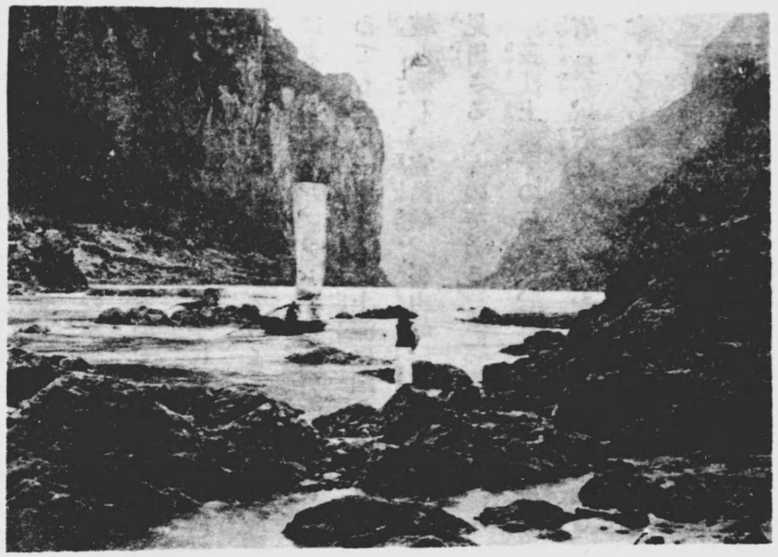


浙江錢塘江の呼物八月十六日の大潮

人心の收攬と云ふことに心を致し、民意々々と許り、口癖の樣に民意尊重のことを云つて居らなければならぬのである。その他の理由で王朝が滅び、自ら退位するの止むなきに至つたときでありても、民意によつて退位したと逃べ、それを婉曲に、天の命によつて禪讓したと體裁よく飾つて云ふ所が面白い。言葉の上の飾りは、兎も角、事實、人心が支持してゐて呉れなければあの大陸に君臨する事は一日も到底出來ない話である。固より一天萬乘の英君が現はれ、文物制度、保境安民外交刷新の千手觀音的力を振ひ得るものが出て來たとすれば、申し分もあるまい。併し外は、これからの樣な國際關係の複雜して來る時代になり、內は地方人民側に頭の進んだ者がどつさり生じて來るといふ時世になるにきまつてゐると云ふときは容易な事でない。支那は民をして依らしむべし、知らしむべからず、で行くとすれば、治りもするだらうが、教育の普及を圖つたり、交通の完備を期したりする必要に迫られた現代の大勢に照らして見

ると、將來は益〳〵この四百餘州の統制は難かしくなる一方であると見られるのである。

從來歷史の上ではや〳〵もすると、貴族特權階級の歷史のみが考究せられ、御用學者は、その方面の調査にのみ沒頭し、文學にしてもまた上流文學の一方にのみ偏してゐる嫌ひがあつた。その方面のことも、固より大切なことであるに相違ないが、大衆の間に行はれてゐる民謠、傳說、神話、にしろ、その他歷史にしろ、その文字に揭げられてゐない廣い方面の文化的分野がどつさりある。しかもそれが等閑に付せられてゐた事は、支那の眞面目を見る上に尠からぬ手落ちであつた。今日の支那の片田舍、交通不便の山間僻地に行つて見ると、今から千年乃至は二千年の昔しの古語を物語る古い音が、廣東福建方面に見出され、また古代の衣食住、或は古代の精神生活方面を物語る信仰、迷信、娛樂、風習、思想などの事までが一々具體的に蒐集される。支那大陸の地理は、桁外れのものが多く、日本あたりの山川湖沼などを以てしては、その概念をだも得ることが出來ない。その田夫漁翁の自然地理をよく〳〵こなし、その大陸生活に慣れ切つてゐる所に、白樂天の文章もあれば、李白の詩もある。又杜甫の詩もある。その間にいかにもなだらかな地理風俗が詠み込まれてゐる。要するに現在の支那の都城なり、田園なり、山川風物の實際の知識なりを基礎として、支那の歷史、支那の戰爭、支那の經濟などから、文學藝術、又暗黑面の方面の內容を見直すことにしなくては、眞に理解ある支那の歷史地理と云ふものの特色は見出されないのである。」



長江の上流、上海から壹千餘哩を遡つた三峽の秘境

九、三峽の地理

今、地理上の立場から、現在ゐる地方住民の生活狀態を具體的に知らうとするには、その一例を、揚子江の上流、四川省方面から採つて見ると面白い。長江は上海から約一千哩、宜昌のところ迄は、一望千里の平野續きである。稀に山を見る事はあつても、それは例外としての地相に過ぎない。上海漢口間は約六百哩もあるが、その距離に對して、水面の落差は纔かに八十尺を出でない。又上海宜昌間の距離、約千哩に對してその落差は纔かに百三十五尺と云はれてゐる。以て如何にその距離の長さに比して、海拔の僅少なるかを察知することが出來る。地理を知らぬ人は南支の水量豐富なる點を利用して、水力電氣を起したらどうかなど云ふものもあるがこはむづかしい事で、僅かに今上

流三斗坪の邊りにその計畫があるとか傳へられてゐるが、物になるか否かは判らぬ。その本流支流の水量と流域に見る湖沼の水量を見ると漫々と湛へてゐる海の如き眺めに對して、立派な水郷の觀を抱くものあるは當然であるが、事實上、その落差利用の點に至ると先づ絶無と云つてもよい位である。所が一度その宜昌のかみ手に溯れば、俄然山色天に連り、水流は烈しく縞目をなして走り躍り、時には咆吼するかと思はるゝくらゐ、山彦の響きを聞くことすらある。こゝに於てか、沃野千里の國土は忽ちテーブル、ランドの山谷を觀るに至る。如何に支那は、曠野續きの天地であると許り思はれてゐても、足一度長江の上流に蹈み入れれば、意外なる山岳重疊の景觀を見るに至るのである。所謂三峽と稱し、宜昌峽、巫山峽、風箱峽、この王者は、古來天下に聞こえた支那隨一の奇拔な絶景として見出さるゝものである。

長江上流の三峽は、その延長百十一哩に達し、宜昌を起點として、七十六哩ペーシー（培石）の省境、石柱のあるあたりまでに次の如き、有名な名所舊跡、大自然の奇拔な景色を見出し送迎に遑ないくらゐ澤山あるのである。

三遊洞、ピンシャンバ（平善壩）の稅關、天柱石、天仙橋、黃牛峽、ホワンリンミャオ（黃陵廟）、牛肝馬肺峽、新灘、

キャプテンプラントの記念碑、兵書藏劍峽、

烏石の屈原公祠、流來觀、巫山峽、

萬流、

などといふがある。そのうち、三遊洞は奥深き洞窟の中に、古禪寺の建立せられて楚客巴客の參詣者も多く、蘇東坡時代以來その喧傳せられた歷史も古いことである。又その附近には龍骨洞と稱し、奥深き鐘乳石の古洞の中に、蜒蜿として神龍の化石したる如き姿した遺骨を見る。かつて袁世凱が皇帝たらんとした時、その目出たい瑞祥として發見せられたので、袁自ら悦に入つたものだと云はれてゐる。この神骨は、その實、洞内の石灰石が地質上の變化を受けて、さも龍骨の姿に見えてゐるものに過ぎないものであることがわかり、今は懷中電燈など携へ、暗中摸索に出かける遊客も少なくないといふことである。

キャプテン、プラントの碑は、プラントが英人の遡航探檢家として多年自らこの上流の急流激湍を突破し又その渦巻を乘り切らんとし、そのため特殊の船を作り、幾度か失敗に失敗を重ねた末、遂によく成功したものである。その爲めに上流に事實航行する者の自然と頭のさがる碑であつて、右岸の綠蔭に白く打眺められてゐるのがこれである。また兵書藏劍峽と云ふは、昔し諸葛孔明が大軍を率ゐて、三峽を下り、盛んに魏の大軍と闘つた時分に、この天險を背景として非常な苦戰に耐え、要害の地に軍略を回らし、軍需品を藏しなどしておいたところだと云ふ傳説のある所で、一名又米倉峽とも

云はれてゐる。その對岸のシャンチー（香溪）といへるところは漢の時代匈奴に身を賣られた國際犧牲者として、又それよりも絶世の美人として、その名も高き王昭君を出した山里であつて、今にその村名が殘つてゐる。崖下に小川が流れてゐて、長江の本流に注いでゐる。土民の話によると、その水は一種云ふべからざる香氣を有し、王昭君の美人の芬香が今以て傳へられてゐるのだと云はれ、懷かしがられてゐる。恐らく、その地質礦物の關係から、そうであらう。

烏石の屈原公祠は、むかし有名な湖南の洞庭、ベキラ（汨羅）で身を投じ入水したあの屈原の遺骸を祀つてゐる公祠である。之について、土民の語る所によれば、その屈原の德を慕つてゐる村民たちが魚類をして、入水者の身に觸れさせないやうにと粽を作り之を魚に與へたとの事である。又その鯉魚には、大きいのがあつて、その遺骸を口に銜へ、洞庭から長江の本流に出で、急流激湍、渦卷を突破して峽水を溯り、屈原の鄉里烏石に、その令妹のゐる所迄銜へ持つて行つたのだと云ふことである。令妹はその身柄を引とりそれを祀つたものがこの屈原公祠の起りであると云つてゐる。この地方の鯉魚は、その大さ驚くべく肥えふとり、その一枚一枚の鱗は窓ガラスに代用し、明り障子に箝め込まれてゐる位であるから、以てその大いさも想像せられるであらう。一尾の鯉魚は顎から尻尾のところまで三十六枚を以て定まりとしてゐる。その全長は鯉幟りの紙製のものと、殆んど寸法を同じうするものと見てよい。こは鯉の傳說に屈原の口碑が結びつけられた譯であらうが、三峽地方の老人子供たちの間に、罪なく傳へられてゐる童話の一つである。江を溯り、流來觀のあたりまで行くと、水勢は急に、峽中は珍らしき難所になる。每年溯航する民船の沈沒し、波に呑まるゝものが多く、土民は之を洩灘と稱し、新灘と共に峽中最も恐れをなせる難處と見られてゐる。それからかみ手、數哩にして、牛口灘といふがあり、その上にバートン（巴東）の山里がある。對岸に聳ゆる寶塔は高く、その下に珍らしき巴東電局の看板のかゝつてゐる建物を見る。

巫山峽は三峽中でも、最も哩數の長い絶景であつて、二十五哩に亘つてゐる。官渡口の三角山の仰ぎ見らるゝ所から始まり、湖北、四川の兩省に跨り、奇峰亂岳、江を壓して聳え立ち、中にも巫山十二峰の如きは最も奇嶂に富んでゐる。江上より望み見るに、白雲深く閉ぢ込めて、その全景を見る事は難かしく、天氣のよい時でも十二峰のうち、纔か數峰しか見られない。その十二峰といふのは、古來次の如く稱へられてゐる。

（一）望霞峰　（二）翠屏峰　（三）朝雲峰　（四）松巒峰　（五）集仙峰　（六）聚鶴峰　（七）淨壇峰　（八）上昇峰　（九）超雲峰　（十）飛鳳峰　（十一）登龍峰　（十二）聖泉峰

これである。これらの十二峰は或は美人の踊るが如きがあり、又神仙の倒れんとするが如きがあり、又高僧の天に飛ばんとするが如きがあり、言葉の上では到底表現出來ない種々相を現はしてゐる。峰

は峰にと重り、前方を見てゐるうちに、後峯は半ば白雲の間に隠れなどする。その眺めは文人畫に見る奇峯そのまゝである。太陽の光りを受けて或は紫に、或は黄色に又緑にと映へ、その色彩美は云はん方なく、眞に秘境の別天地だと云へる。長江の水に面せる斷崖壁面は、帶狀をなした岩層によつて蔽はれ、それがわりに規則正しく幾重にもなり重り合つて仰ぎ見られる。所々に鶯色や紅色の毛氈を敷いたかと思はるる草地の殘されてゐるところもあり宛ら雲上の武陵桃源を呈してゐるかとも思はれるものがある。何れにしてもこの巫山峽は三峽中での絶景と稱することが出來るのである。三峽の地理を知らうとするものは、宜昌を基點として、宜昌峽からさかのぼり、漸次その兩岸奇絶のところを送迎すべきである。しかし人の見る處によつて差はあるにしても、巫山峽が最も遊客に強い印象を與へ、殊にこは湖北、四川の兩省に跨つてゐるので、懐かしみも一段と深い。

十、四川に入りて

ペーシ(培石)の石標とその對岸の編魚溪、布袋口の山里を最後の目標として、これから奥は愈々巴蜀の天地、今の四川省に這入るのである。兩岸の斷崖江壁は高く、右に左に、夫々連る奇峰を仰ぎ見る。どの山を見ても、巫山峽中の名峰ならざるはなく、その青石洞のあたりから數哩に亙つて右手に聳ゆる雲際の峰は何れも、最も奇拔を極め、こゝに所謂十二峰の地理的存在が認められるゝので、支那山水美の極致、そのクライマックスとはこれである。十二峰を出て右手の小河を過ぐれば、仙女觀の祠堂があり、その向ふの中腹に巫山縣城が指ざされる。こは四川省境に入つてから始めての城壁である。白雲鎖ざす峽中の都城にも、山貨の集散、取引き殷盛を極め、船の汽笛を聞き込み、阿片を賣りに來る小舟は急流渦巻をも意に介せず、船の兩側へと漕付け纜を叫び求めるのである。來る小舟、來る小舟に綱を投げ與へてゐるのであるが、急流の速力激しく、そのよく之を摑み得ずして、下流に流され、波浪に呑まれ、土左衞門となる手合は少くない。殆んど命と交換で、阿片の商ひに夢中になる商人たちの心理狀態ばかりは、巴蜀の天地も、江南のそれも變る所がないのである。流れは濁流、山は緑に、雲は深し。入蜀の氣分は益々募り、國を去つて三巴遠しの詩境

四川省白帝城下夔府に見る減水期の鹽臭磧 一

はいよ〳〵胸に迫るものがある。巫山の位置は宜昌を溯ること、九十一哩の地點にあるのである。

シャーマータン（下馬灘）にバオツタン（寶子灘）の難所を溯れば、左手の雲際に高嶺の二つに斷ち割られた如き、割れ目を有する二峰を仰ぎ見る。綠濃く物凄いやうな奇峰である。土民は之を錯開峽と呼び、太古、禹王が誤つて、この奥地の水流をこれに導き出さんと、山を斷ち割つて見たけれ共その土木は失敗に終り、本流の風箱峽の方に遣り直さなくてはならなくなつた。そのためこの失敗の谷を斯やうに錯開峽と呼びなしてゐるのだといつてゐる。宛然アメリカ、カリフオルニアのコロラド峽谷を見るが如く、五千尺に近い垂直の裂け目を奇溪として現はしてゐる。全くこれこそ天下の奇觀である。白雲生ずる所、穴居の民あり、その白羊の二三を伴ひ、遙か彼方に仰ぎ見らるゝは太古ながらの原始生活の姿と見てもよろしからう。併し、若しあの山上の棧道を蹈み誤り落つれば幾千尺の下峽中の濁流に阿陀佛となるわけである。雲を蹈んで蟲の如く動いてゐる山民の生涯は、何たる又現代離れのした悠久な生活であらう。上海のネオンサインを見、强力なるラジオ放送などに思ひ比べ、支那の天地には極端と極端の生活相の對立がいとも不思義に又よく調和して存在せることを思はしむるのである。

錯開峽を溯ること、五哩、鐵灘、マオルトウ（猫兒頭）の邊りから、風箱峽の秘境に這入る。全長僅か四哩、兩岸の峰は、四時始んど白雲にとざされ、地理學上、その最高峰は水面から四千七百二十

五尺と稱せられてゐる。深綠の斷崖奇嶂、榧色の崖壁、薄黑き絶壁は兩岸に迫り之に風穴の如き箱狀をなす窪みがあちこちにと見出される。峽風頓に增して、のぼりの民船は、白帆に風を孕み、逆落しに走る水勢を突破して行く。斷江の岸最も迫る所、纔かに三百呎。呼べば答へる如き距離に感ぜられる幅であるが、その深さは之に倍する六百呎を數へ、その山容水勢は、餘りにも大自然を超越した神爲天成の極致を示せる秘境のこととて、何だか人間の天地に非ざる感じさへする。孟良梯、瞿塘の磨崖彫刻文字も壁面に讀まれ、昔し山上の老僧が、繩梯子によつて雲中から上下してゐたと云はれてゐる奇峭もあり、中腹の出つ張りに見る穴居の民、樵夫の小屋は綠蔭におかれた築山の玩具の如く指ざされる。濁流の奔る音は轟然と岩壁に當つて響き渡り、逆落しに流れる水は、渦を巻いて無限の深さへと、加速度を加へ快速力で巡り落ちる、その中心の回轉力は嘗つて鐵板をこれに投じたるに、水平の位置を保つたまゝ、きりきり渦巻きなりに廻はされ、仕舞にはその渦の中心に汲ひ込まんとする力に負けて、板は眞二つに打割られたとまで傳へられてゐる。その物凄さといつたら常に咆吼の聲の谺して全く生きてゐる氣持さへもしないくらゐである。江心にそゝり立つ灩澦石の姿はその色黑く濁流之に當つて、天地も碎けん許りの山彦を生ぜしめてゐる。夏の增水期と冬の減水期との間には、水の增減著しく、その石の側壁に白くペンキ書きして、ウオーターマークが示されてゐる。最高200フイートで一等出水の增した線を物語つてゐるのだが、眞夏は普通百三十五六呎を上下してゐる。一

度西藏から四川の奥地にかけ、雪解けや、大雨などのある時は百九十呎を越えると云つてゐる。まことに兩岸の猿聲は啼いて止まざるに輕舟既に過ぐ万重の山と云はれてゐるぐらゐ、水勢の恐ろしい峽中なのである。唐の李白が早發白帝城の七言絶句を吟じた所はまさにこの風箱峽の出口のところにあつて、右岸に聳ゆる綠丘こそは卽ち白帝城の古址である。文風塔を右に見て溯る一哩、こゝに奉節縣クイフ(夔府)の縣城が仰ぎ見られる。そのあたりの江岸一帶は臭鹽磧と稱し、一面に鹽を吹き出してゐる。秋から冬にかけては鹽釜が用意せられ、鹽を焚く竈の煙が幾十個所となく立ちのぼり、あたりをたて籠めてゐる。夏は江磧が上まで江水で覆はれてゐるため、すべてその鹽磧は江底となり、見えなくなつてゐるわけである。船を泊めて、急流に掉さしてゐると、例の阿片舟だの、蟹舟、果物舟だの云ふのが客を目當にかん高い聲して賣りに來る。その聲の如何にも山に響き四川氣分を唆つてゐるところは懷しい。

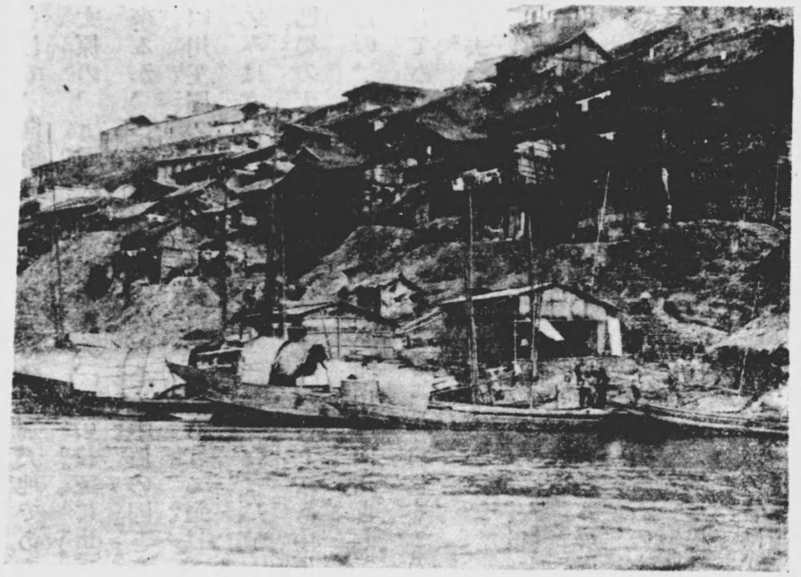
三峽を溯る民船は、その構造、その機能、到底下流の江上で見ることの出來ない特異性を有し、大なる物は、三四百噸以上のものもあり、多くは樟の船材を以て頑丈に造られてゐる。舳は低く、艫は高く前後に思ひ切つた舵がついてゐる。前の舵は五間に餘る長い棒狀をなし、おも舵は後方に扇形をなし、共に巧みに操縱されてゐる。舵手は常に前後に立つて連絡を取り暗礁、渦巻、水勢、風力を常に見張つて見る外、他船との衝突、輪船のあと浪、浪沈の危險などを、戒しめてゐる。右舷左舷には夫々十本十五本の長い艣が裝置せられ、その各々に八名宛の屈竟な漕ぎ手が蹈む足の音も勇ましく漕ぎはたらいてゐるのである。多くは、夏冬通しにズボン一つ纏はず、丸裸の姿で、之に從事してゐる。こはまさかの時分に急流を泳ぎ渡るに便利であるからだと云つてゐる。中央に帆柱が立ち、溯航には風力を利用し、成るべく右岸又は左岸の流れの抵抗少きコースを取つてゐる。渦巻を避け、避け暗礁に注意した上にも注意しながら、水先の指圖によつて進み行く。下りは千里の江陵一日にして還る、と云ふ位に、江心の水勢を利用し、舵手に信頼して流れ下るのである。併し上りには、逆落としの水勢、激湍、渦巻を乘り切ることとて、その操縱振りの容易でないため、難所、難所に見る曳子村に話をかける。船頭は大抵之に交涉を持ちかけるのである。話が成り立てば、一度に百人二百人といふ大變な曳子が出て來る。そして、音頭取りの親分の鞭の音によつて、それ〳〵岸の岩角にしがみつき、足の指先に力を込め、胸に斜めに當てた綱で懸命の努力を捧ぐるのである。やゝもすれば、水勢の餘りに激しく、人力の之に及ばない時には、船、曳子もろ共に下手の方へと打ち流され、岩に打當つて難破する例も少くない。

その曳子が胸に斜めに當てゝゐる綱といふは、長さ何れも二百尺、三百尺、船の帆柱に結びつけられた親綱から、幾條にも分けて曳いてゐるのであつて、その綱は麻繩ではなく、四川峽中獨特の竹索なのである。三本宛の割り竹に、よりをかけて編まれた索であつて、時代の飴色に染つたものもあ

る。その牽引力の強いことは驚くの外ない。曳子の拍子を取り取り、崖路を辿る聲、又民船の漕ぎ手の拍子をとつてゐる聲は峽中の水面に漾ふ靄のうちに微かに響き、何とも云へぬ四川祕境の諧調を感ずるのである。靄は晴れ、見通しのつく時が來ても、山又山の峽中の行く手は、行き詰まれるかと見えて又開き、開いては狹まる。時には又どうかすると、一里二里の幅廣き流れとなることもある。曳子の群は江岸、隨所に居る譯であるが、その裸體の皮膚の色が、岩の色と自然の保護色をなし、聲の幽かに聞こえて來るので氣がつき、注意をして見ると、之が列を江岸に見る。もし迂かりしてゐると決して見つからない位である。巫山縣の地理上の位置は、宜昌を溯ること百十二哩、上海より約千百十哩のところに在るのである。

十一、四川萬縣、重慶を中心として

三峽の難所を出て、四川の上流を究むるには、更に萬縣があり、重慶がある。北に向つて成都の方に進む代りに尙本流を西に、上手の敘州、岷江と金沙江の合流地點となつてゐる所までは、今日、輪船で以て進むことが出來るのである。更に岷江を溯れば峨眉山下に至り、本流、金沙江の方を溯れば屛山縣より雲南境に沿ふて西藏の秘境へと溯れるのである。が、上手の方は瀑布があつて、のぼれない。自分は今日のところ、長江溯航の終點とせられてゐる敘州迄、卽ち上海から千五百六十哩の地



四川長江江上より仰ぎ見たる重慶民家の特異性

點まで探險して見たのであるが、本流金沙江の水は依然として尙淡褐色の濁流で岷江の支流の流れ込む高塔の下あたりは、清濁合せ混ずるの狀を呈し何とも云へぬ趣が見らるゝのである。

長江の上流は、三峽を突破して、更に奥地四五百哩の所に進むと、漢口あたりを基點として丁度千哩近き奥地になるわけであるから、下流に見る平野の生活に慣れた一般支那住民の生活振りとは、全然趣を異にしてゐることがわかる。固より四川には成都を中心とした巴蜀の盆地があり、相當廣い罌粟畑や稻田の平野がある。蜀の棧道劍閣を下つて四川の平野に這入るものは、この四川王國に絶大の印象を受ける。その人口は五千万、面積は約日本の二倍に當たり、昔しから宛然一大獨立國をなしてゐるところなのである。中央政府から制約を受ける事などのな

くして、自給自足でやつて行ける別天地である。この四川王國に這入るには北の方、長安、漢中、五丈原の、方面から秦嶺を越え、蜀の棧道に出て來るか、さもなければ上流の三峽を突破して這入つて來るか、この二つの道の外に全く中原の國と交通の出來る道はないのである。實に金城鐵壁とはこの四川王國の謂である。棧道の方からする道は、棧嶺雄關四時白雲にとざされ、容易に交通の開ける見込みは立たない。今の所纔かに南のかた、宜昌から這入る三峽の水路があるのみである。この爲めに巴蜀の天地は全然、その文化生活にしても中原とは異なり、蜀江の錦だの、その他、不老長生の秘藥だの、特殊の物を發達させ、四川は四川としてアジアの中心に蟠居する一つの文化王國となつて存立してゐるところである。まことに身親しくこの秘境に這入ること二回、古人の詩に、詠めるが如く國を去つて三巴遠しの感なき能はずである。

宜昌から溯ること百七十八哩。こゝに人口十五萬の山城、萬縣の古都がある。城内城外の街が小川を挾んで右岸に見出され、背景に聳ゆる屏風を立てた如き岩山はとみに四川人の沈重の氣持を唆つてゐるやうに見える。全市は一つの大盤石の上に建立せられ、岩を穿ち路面を作り、住宅は何れもその凹凸の岩角に凭つて構へられてゐる。屋根は黑く、壁は白く、江上から仰ぎ見た眺めといつたら城廓の如き觀がある、軍營に響くラッパの音は、江流の雜音に一際清かな氣持ちを感せしめてゐる。背景の岩山、中腹の壁面に持つて行つて文字をほり、同治四年水此所に止む、と深く刻まれてゐるのを

見る。當時全市の住民が一人殘らず、江流に犧牲となつた畫期的の大慘事を思ひ起させてゐる。それ故三百年に一度位は、江岸の住民達は天の惡戲ですつかり下劑をかけられたやうな形になる。これまた如何にも四川らしき挿話の一つとなるのである。

萬縣城外には、雲上に聳ゆる天成城の山寨があり、此には昔しから賀氏の一族が住み來たり、自給自足の堂々たる自治生活を營み、地方切つての土豪である。山上には田園あり、藥園あり、護衞兵あり、新しき蓄音器なども取寄せられ、時代に遲れないだけの文化生活を營み、その面子を保持することにつとめてゐる。日本人の來たり訪ぬる者あれば、特に歡迎し、遠來の客を迎ふることを樂しみとなし、又地方住民の間にも德望のほまれが高い。萬縣地方は、桐油、紙類、石膏などの物産も多く四川東部の山城として特に重要な一都市となつて居り、陸路成都への街道も此處から通じてゐる。嘗てロシア帝國崩壞の頃から、ロマノフ朝の卑しからぬ露人が都落ちし、どうした因緣か、流れ流れてこの萬縣に落ちつき、今は郵便局の事務員として仕事を手傳つてくれてゐるなど味のある話であるが又かなり氣毒な哀話もある。峽中、例の曳子の生活をしてゐるもの〳〵中にも、稀には日本人の落ちうどが交つて居て、裸姿でその竹索の仕事に從つてゐるとか云ふ珍らしい挿話も耳にした事がある。或は人ざと離れた江岸の山畑、一軒屋に、九州生れの女の、今は四川片田舍のかいがいしい農婦として近所界隈の人たちにも、その素性を明かさず訛り言葉の調子も巧みに、よく保護色に馴染んでやつて

ゐる大和撫子もゐるとのことである。かう云つた秘境に見出される語り草は、自分が四川行脚の道すがら随所々々に耳に挿んだところであつた。

萬縣のかみ手、狐灘（フータン）の激流を過ぐれば、右手にシーバオツアイ（石寶寨）の石造の樓閣が崖壁によつて起てるを見るも今は留守居の番僧が、秘境に時刻を知らす鐘を突いてゐると云つた風雅なことをしてゐる所も見出される。忠州城外の綠蔭、山腹には、白樂天を祀つた古廟の眺められたり、又羊肚溪の土匪の頭目のゐる住宅を見たり、酆都の縣城に善男善女を惹きつけてゐる冥獄寺院の白壁を仰いだりなどして次第次第にと奥深く這入つて行く。群猪灘の難所を突破し、貴州の山中より流れ來る陪陵江の水と本流の合流地點に位する陪州の街を見、江上、荔枝の船着には昔し唐の玄宗皇帝が楊貴妃の爲めに騎馬を走らせ、その大好物、荔枝の果物を取りに遣したその詩的傳說の殘つてゐるところなど興味深く眺むる。陪州のかみ手には又珍らしくも電線の高く流れを横切つてゐる龜門關の山里を見たりなどする。このあたり船を停めて夜泊すれば、月は皎々と冴え渡り、遠き山里には蜀犬の吠えてゐるのが聞こえ、どことなく物淋しく思はれてならなかつた。又江上中流に碇して、粉を舂いてゐる水車の音を聞くなどは如何にも奥地の水鄉らしい趣の唆られるものであつた。長壽縣の崖下を過ぎ、明月峽を通り、銅羅峽のところを突破すると、やがて大佛寺の石佛、金ピカが水に浸つて江岸に拜せられるのは勿體ない。增水期には全部その姿を水中に沒し去つて仕舞ふが、こは水

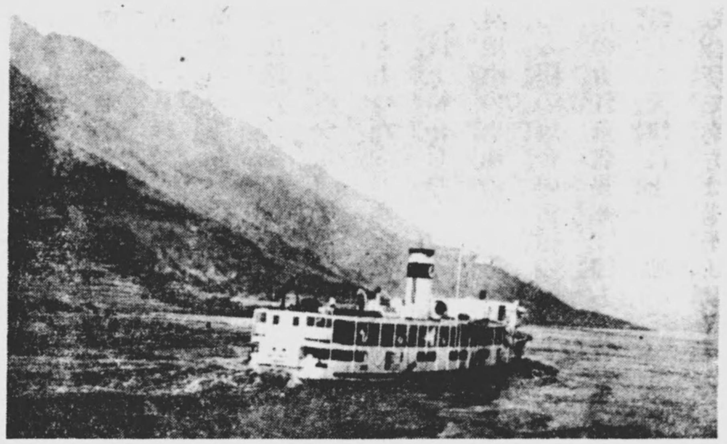
難者の菩提を弔ふためにとて、わざと水中の岩を切り殘して、刻まれたものだと云はれてゐる。その大さはかれこれ三十尺にも達し、素晴らしいものである。いよ〳〵宜昌から溯江、三百五十二哩の地點に達すれば、こゝには四川隨一の商業都市、人口七十五萬を包有する重慶の都城が右手の江岸に高く仰ぎ見られる。成都の方面から流れ來る嘉陵江の濁流を距てゝ、とかく仲のよくないチャンペイ（江北）の街と相對してゐる。長江を隔てゝ對岸の日本租界は、海軍の倶樂部だの、その他日本人の經營に係る製糸場、鐵工場など色々設けられてゐたものがあつたが、打ち續く排日騷ぎに、止むなく日本の領事館員始め、すべて今は何れも引揚げてゐる。在留民たちは捲土重來の機會の至るを待ちつつ漢口その外に留まつてゐる者が多い。

重慶の都城は、萬縣と同じく、江を壓して聳え立つ一大盤石の上に堂々と築かれた大市街である。城内で一等賑やかな商業場の目抜きを中心として、太平門、朝陽門、の兩碼頭（船着場）の方へと商家はだんだん擴つてゐる、又日本領事館前から嘉陵江を距てゝ江北、その他、長江の對岸に聳ゆる連山を打眺めた景色は實に雄大である。それから城壁を越えて後方、見渡す限りの墓地の方面は、土饅頭累々として打續き、成都街道にある浮屠關は夕陽に照らされて美しいパノラマを展開してゐる。重慶城内の市民は、住宅を持つてゐても、井戸を穿つことが出來ない。そこで各民家では考へ、岩を刻んで作つた幾百千級の石段を下り、長江の濁流を汲みとり、天秤棒で以て擔ぎ運んでゐる。

重慶城内に見る歩道の路面は、年が年中、その擔夫の水桶からこぼるゝ水滴に潤ひ、加ふるに一年に陽を拜むことのないくらゐ曇り勝なる空模様でとざされてゐるので、衞生上は甚だ感心しないのである。併し四川人の生活力と、その意氣の盛んなること、四川、雲南、西藏、の物資の取引の活潑なることなどは大いに見るべきものがある。市況の人氣は常に積極的であり、年一年と省城の成都を凌いでゐるかの感がある。實に重慶は四川省内でもその交通經濟上、又財政上、最も大切なる咽喉を扼し、政治的にも重要な位置を占めてゐる。されば重慶は成都よりも今では政治的に重きがおかれ、やゝもすれば、財力の點で省内第一と云つたくらゐの地位を占めるに至つた。從つてこゝに領袖など も一大地盤を築き上げることに苦心してゐる。四川省内の登場人物としては、劉湘、劉文輝、田頌堯劉存厚、楊森など四川一流の群雄が鎬を削り、年來の四川動亂の蒸し返しをやり、今や西藏の暗雲低迷と共に、南京政府當局の頭を惱ましめてゐるものがある。

十二、長江の終點と煬帝の大運河

重慶よりかみ手、二百餘哩の間には、歷史に有名な瀘州だの製鹽業の盛んな自流井だの云ふ所があり、又四川獨特の土豪の、山巓に仰ぎ見らるゝ山寨生活がかなり目に立つ注意を惹いてゐる。江上、雲間に高く指さるゝ山頂には、綠林の間に點々として白壁の塀を廻した住ひが仰ぎ見られる。こは、多く山寺に非ざれば、土豪の山寨生活を示したものであつて、四川地方の金持たちは平地に住まふことを好まない。成るべく人里離れた秘境に自給自足の生活を營まんとしてゐる。こは河南の平野に防禦林、深濠、高壁を巡らし望樓高く築きなして、自給自足の生活を營んでゐるのと考へ併すべきものであつて、興味のある富豪生活の實相なのである。四川の富豪に親しく會つて、その人間として一生何を一番希望せらるゝか、何を最も樂しまれるかとの問ひを發して見ると、死ぬまでのうちに一度四川を引揚げ、上海の街に出て、租界の安全地帶で生命と財産を托することを得て、しばしでも、氣樂な日を送つて見たい事、これ以外に何物もありませんと云つてゐたのであつた。



四川嘉眉山下、岷江方面を航行するろ輪船

また先年岷江に泊つてゐたとき、我が船へ訪ねて見えた時の督辦、劉文輝（當時二十九歳）將軍に向ひ、同じやうな事を食後の四方山ばなしに質問して見たのであつた。すると、將軍はいふ。自分は四川の奥地、西藏の下まで十一縣を統轄してゐて

何一つ不自由はなく、海外のニウスも方法を以て集めてゐる。それで南京がどうならうと、北京がどうならうと、此處には全く關係がない。たゞ自分はかうして騎馬を樂しみ、山野を跋渉し、四川の天地で雄飛すること以外何も考へてゐない云々、と胸中を語つてゐた。綠の轎子に乘り、武裝兵二三百人に護られつゝ、山を下り河緣に出て來るときのその長い行列の動きと云つたら、全く舊幕時代の仙臺樣のお通りを芝居で見る樣な氣持であつた。わが船に臨まれてから、江岸の岩と云ふ岩には叙州の土民達が大童になつて黒山の如く集まり、我船の煙をあげてゐるところや、碇の形や、汽笛の音のするところやら、何でもかでもすべて物珍らしく、丸で伊豆の下田にアメリカの黒船の來た時分、かうでもあつたらうかと我ながら腹の中で面白く又可愛く感せられたのであつた。

以上紹介したところは、今日、支那の地理の上で人の殆んど手をつけず、又ニュースの得られ難い奥地中の奥地の一斑を、我が體驗の儘、述べたのである。更に歴史の方面で今教科書等によく見えてゐる隋の煬帝の治績の一つと數へられた大運河のことについて一言加へておきたい。煬帝の大運河は南の方江蘇省揚州、卽ち、昔しの廣陵を發足點として、大體海岸線に平行して北へ進み、山東省を縦斷して天津にまでも延びてゐる。あとは白河に連絡して通州へ迄も船で以て通ずる事が出來るのである。所で南方は揚子江口に通じ、又江蘇、浙江の奥へは蜘蛛の巢の如く開かれてゐる大小無數の運河があるのである。この大運河によつて、實に南北支那は、人體に於ける大動脈の血管を見るが如く、

よく津々浦々まで山村水廓いづれのところへも行かれると見てよい。この大運河は、煬帝の遺された土木事業として勿論特筆さるべきものであるが、北、江蘇の地は、揚州、高郵あたりを中心とし、四方八方に沼澤地が無數に散在してゐるし、更に安徽の北部へかけては一大澤國の觀をなしてゐるところである。從つて水流ともつかず沼澤地ともつかぬ所が無限に續いてゐるのである。迂かり舟を漕ぎ入る時には、地平線上、目じるしの山が一つある譯でなし、柳の森、酒屋の旗じるしを見る位なもので、曇天の時などと來たら殆んど方角の立てやうもない位である。それをよく、南北に縦貫し、之を結び付くる土木を起し、湖江を通じ運河となしたものである。その土堤を作り、之に楊柳を植ゑ、如何にも氣持のよい水路に大成された。傳へ云ふ所では、三千の宮女花の如く春殿に滿ち、綦華の宮殿生活に夢を見てゐたその上塗りの延長として、贅澤三昧な舟遊び用の水路を作つた。民の膏血まで絞つてかゝる餘計な仕事を起したなど評するものもあるのである。

しかし支那の帝王のする事業は民族的の見地からして、一般に幸福を持ち來たし、世のためになるとすれば、よいのである。萬里の長城の土木事業にしろ、この大運河にしろ、何れも歴史上特筆に値するものである。今は江蘇、チンキヤン（鎭江）の港から長江を渡り、金山寺の高塔をうしろに見て船は對岸の瓜州に達する。すると、樓船を曳く曳子がそこにゐたり、堤防には千有餘年の昔しを物語る楊柳の名殘りが殘つてゐたりする。無論その時代の楊柳ではあるまいが、その並木の植ゑられてゐ

て、何處となく、隋の時代相を思ひ浮ばせてゐる。弘法大師始め遣唐使の連中も南の方ニンポ（寧波）の港から上陸をし、これから、運河の小舟により兎も角、此處まで漕ぎつけ、南京虫に襲はれ、おそはれ、この運河を曳かせ進んで、結局行ける所まで行き、そして陸路河南の方へと折れ曲り、洛陽を經て更に西し函谷關、潼關を突破し、一路、長安の都へと入城したわけである。

して見るとこの大運河の水路といふは千年の昔し、日本の先輩が既にこゝに艫の音も靜かに、行李を托して、北航し旅をつゞけてゐたことが考へられる。當時の樓船また、その美しさを凝らしてゐた畫舫は、歷史に見える所、青雀舫の種類であつたらしく、見るからに金殿玉樓の生活を思はしめ、商女、美嬪たちも側に侍り、居ながらにして、船は艫の音と共に、しづしづ波紋を作りつゝ、詩歌管弦の趣なまめかしく、畫となく夜となく行つたものであらう。今は盲らの旅藝人が、鎭江船出の時分から乘り込みゐて、その大運河に入るや、春風に吹かれつゝ、手にかなづる胡弓の音もやさしく、一曲二曲と、面白い所を彈く。客の好みに應じては又更に一曲と云つた歡樂振りを示して大衆の乘客を醉はせるのである。喜捨してくれる客の間に交じりその一方の隅で、物にするとニコニコ顏で早速、胡弓片手に人の肩に手を觸れ、辿り辿り、また他の所に來たり、坐を占めるのである。そして、こゝに違つた曲を彈じ始める。船は土手を行く曳子の麻繩によつて曳かれどんどん進みいつしか、揚州の城內へと這入る。昨今、スピード時代になつてから、瓜州船着からアスファルトの自動車路が出來、

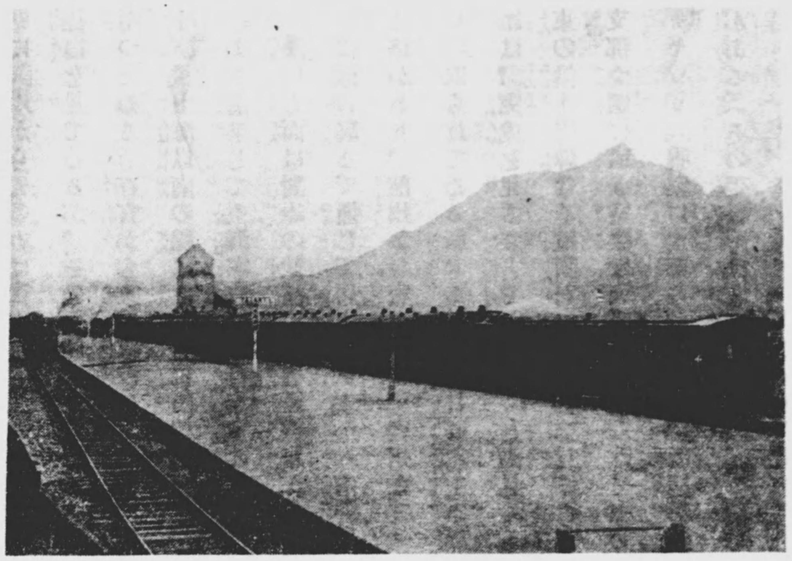
アメリカ製の自動車が此に通ふてゐると云ふ有樣。隋の煬帝の楊柳の氣持、又盲人の胡弓の音などはガソリン臭く、ブウ〳〵鳴らしてゐる聲ですつかり打ち壞されてしまひ、全く煬帝も今頃地下で苦笑してゐることであらう。かう云つた運河は、江蘇、浙江の天地には網目の如く細かく、農村から農村へ、そして兩岸は見渡す限り稻田を見ると云つた眺めよりか、桑田を見ると云つた眺めとなつた。これが時折り黃色の菜種畑に彩られ、流石にこゝは古の吳の都、蘇州に近き所だけあつて、養蠶業や製糸業の盛な所であることが解るのである。

四、支那の交通文化

十三、飛行機と鐵路

支那の交通文化は、時代の尖端を切つて、上海から漢口への六百哩を定期の旅客飛行機が往復し、大體長江の水路に沿うてコースを取つてゐる。又一日に二回宛、上海南京間は時間を定めて旅客飛行が行はれ、その他、上海北平の間に、又北平漢口の間にと、航空の交通狀態が日に月に進みつゝある。

支那中原の航空は、氣流に溪谷のあるところがなく、一望千里の曠野である丈に、まるで平面を行くのと同じこと、或はむしろもつと簡單に行けると云はれてゐる。空中であるため最短距離を飛翔する事が出來る。日本あたりの氣流は、谷あり、峰あり、危險の多いこと夥しい。之に比べると支那は、雲泥の差である。從つて、支那に於ける航空輸送、航空旅客機の將來は、頗る有望視せられてゐる。今ではアメリカの飛行士が之を操縱してゐるもの多く、天津郊外の空には米國飛行隊の活躍も見え、飛行練習をやつてゐる所すら見られる。奥地深く這入つた山岳地方の航空は容易でなく、たゞ一度四川重慶まで飛行機の飛んだ記錄はあるとのことだけれども、事實上かなり困難なところが多い。



山東泰山の麓泰安府の車站

又水上飛行機の方は、南支の一局部、浙江の錢塘江上に用ひられたこともあつたが、長くは續かなかつた。日進日歩の支那の交通界は、自動車道に、鐵道にと、新しい交通系統を著しく發達させてゐる。今では北の方滿洲方面より入り來る鐵路は、山海關を出でて天津に入り、天津から一方、山東を經て長江沿岸ブカオ（浦口）に達する津浦線があり。他方に、天津から北平に出で、北平チエンメン（前門）を起點とし、石家莊を經、南下し、黄河を渡り鄭州、信陽、武勝關などを經て、長江漢口に達する平漢線といふがある。こは世人周知の如くである。更に津浦線の方に、浦口の對岸南京から鎭江、常州、無錫、蘇州と行き、崑山を經て上海の北站に達してゐる線がある。上海からは更に又南してソンキヤン（松江）、カーシン（嘉興）と進み、杭州を經て南星橋の錢塘江邊に達してゐる。江を渡つて

更に對岸から先の方は豫定が中止されてはゐるが、運河で主に連絡が取られ、近來は又乘合自動車の往復を見てゐるが、その區間は東の方シャオシン（紹興）、曹娥江から、江邊のバククワン（百官）に至つてゐる。百官から東、寧波に至る間は鐵路が設けられてゐる。上海南京間の鐵路は之を滬寧線と呼び、上海以南の線は之を滬杭甬線と呼びなしてゐるのである。

により南下して上海寧波に急行することが出來るのである。

漢口方面は對岸の武昌から粵漢鐵路がある。湖南を、洞庭湖の東岸に沿ふて岳州に出で、岳州から今は湘口驛まで通じて居る。そこから南、衡州都城を經て、廣東省境に行くまでの間に乘合自動車の連絡があり、韶州から廣東省城、廣州までは粵漢鐵路の便を見ると云つた風がある。その乘り合で連絡の取られてゐる所もあるから、遠からず、漢口廣東間の鐵路は、完成を見ることであらう。して見ると北の方、滿洲より北平を經て南下せんとする者は遠く廣東の港まで譯なく縱斷し得る時代を見るに至るのである。この津浦線と、平漢線を含む二大縱貫線は支那全國に取り重要な大動脈と見られてゐるが、更に地方的には、北平から萬里長城を過ぎ、チャンチャカウ（張家口）から、西の方、大同を通り歸化城、バウトウチン（包頭鎭）、に至る平綏線といふがある。（その平綏とは北平綏遠省の略稱である）又南の方、正定、石家莊を經て山西省城太原に至る正太鐵路があつたり、又山東、青島、膠州から半島を西に、濟南に出る膠濟鐵路があつたり、又

津浦線の徐州から西のかた、河南の開封に出で、鄭州、洛陽を經て觀音堂まで橫斷してゐる隴海鐵路があつたりする。その他、南部支那では廣東の汕頭、潮州間に又廣東、三水間に、或は、廣東九龍（香港の對岸にあり）間にと云つた風に、細かい地方線があちこちに建設されてゐる。孫中山總理の唱へてゐた交通鐵道の理想は全國的に大變な鐵道網を完成し、それによつて交通文化の目的を大成せんとするにあつたのだが、前途は頗る遼遠であるのだ。全國の鐵路延長は以上の樣であるが、支那自力の腕で建設したものは、單に北平から西に延びてゐる平綏線の一線があるのみで、他は悉く外國資金に依つて敷設されたものである。殊にその中部支那、江西省の九江、江邊を起點として省城南昌に通ずる南潯鐵路があるが、こは日本からの鐵道借款による利金が納まらず、問題となつた儘、多年それ切りになつて運轉だけはしてゐる。又浙江省、曹娥江、百官の手前の江心には、徒らに鐵橋の橋脚、赤煉瓦の姿をそのまゝ十年前から見せてゐるのがあるが、レールや、枕木は、昨今どちらへか持去られ、自然に姿を消してしまつた。何時その鐵橋の架せらるゝ日の來ることやらこれ又全然見込みのつかないと云つた有樣になつてゐる。

山海關停車中の頭髒風情

支那鐵路に見る列車は、往年、民國十二年五月五日、臨城驛の田舍に突發した土匪夜襲の事件があつて以來、裝甲列車が用ひらるゝに至つたけれ共、元來いふとお粗末な箱が多い。殊に平綏線の列車の如きは、貨物や家畜を運ぶ列車をそのまゝ客車に當てゝゐると云つた風である。列車としては快車（急行）、慢車（普通）の別のあることは云ふ迄もないが、その等級には頭等、二等、三等と云つた外に四等、五等があつたり、又貧民車などいふ大衆向きのものゝ加へられてゐるところもあるが、これによつてよく支那世相の縮圖が物語られてゐる。

支那の汽車といへば、支那式の所が多分にあつて、夏の降雨の時節に、又湖沼の氾濫どきとに事故を起すこと頻々、途中停頓する場合も尠くなく、又匪賊の襲來を聞いて、運轉を中止し、夜行を見合はせることなんかもあり、さうかと思ふと又正月元旦の一番列車は、年賀の意味で、運轉休止を見ると云ふ人間味ゆたかな運轉振りを發揮することもある。その他、名は急行であつても、地方軍閥軍隊輸送のゴタ〳〵から物の五時間、十時間と遲れて來ることは珍らしい方でなく、急行車が、却つて普通列車以上に呑氣な旅行振りを演ずると云ふこともある。尙支那の列車は地方有力な袖領、群雄が之を横領し、問題の解決を見る迄、發車せしめないと云ふやうな抵當になる事もあり、その爲め新聞紙上で見る如く、時局の度に、その開通不能となる事實は、支那汽車の年中行事として見ておかなければならぬくらゐのものである。尙支那語で汽車のことはホウツオ（火車）と云ひ、鐵道のことはテイエル（鐵路）と云ふ。それから面白いのは、支那で汽車と云ふときには、これが自動車の意味となることである。

支那に於ける火車（汽車）の利用については、田舍の農民達は成るたけこれを利用しようとはせずいくら日數がかゝつても自分であるくのである。その線路に沿ひ、袋を背負つてテク〳〵テクつてゐる。火車は之をたとひ利用する必要のある場合が起つても、急行券まで求めて高く支拂ふよりも、なるたけ安く乘つて、長く車上にゐられるやうにと考へる。折角文明の利器が出來てもそのわりに利用さるゝ率は少なく、地方の商人宿屋あたりにしてもその鐵路の開通を見たため、自分達の商賣も上つたりだと心からこぼしてゐる者も尠くない。といふのはもとは田舍を歩く者にとつて、隨所にあつた宿屋が、かなり便利に見られてゐたものだが、鐵路開通と同時に、その立ち行かなくなるものが生じ自然閉店をすることになつた。さう云つた方面に、昔しながらの地方的の色彩が消滅して行くと云ふ結果を見ることが多いのである。民度の低い奥地の生活には、外人向きの、一流富豪なんかの喜ぶ宿屋ホテルとか交通機關とかは存外受けてゐない。富豪階級のものは勝手にたくさんの鐵路やホテルを設けんとしてゐるが、百姓の方では全然無關心である。墓地まで潰されてたまるものかといつた熱を吹いてゐる者さへあるくらゐである。

河南省鄭州街から穴居村に通ずる田舎道

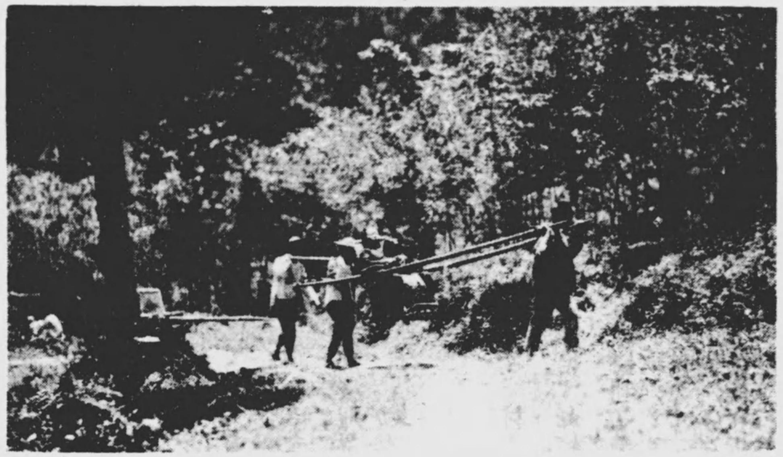
十四、支那都鄙に見る路面

支那の道路については、近來の開け方で、都市も、田舎も、面目を一新した觀がある。南京中山陵へ通ずる長江、江邊シャーコワン(下關)から起つてゐるアスファルトの中山路を始めとし、各地の都市で、城壁を取り毀したあとに作られた新道、環狀線だの、或は城内各地區の改正に伴ふ路面の擴張だのいふものには、著しくその民國の時代相を物語つてゐるものがある。その城内市井の巷に見る市區改正は固より結構な事であるが、その立ち退き料を寄來さなかつたり、期日までに立退かないと兵隊を遣つて、高壁を破壞したり、屋根を落としたりなど、餘りに高飛車に出らるゝまで、人民側では矢張りいくら不便でもよい、また不衞生でも構はない。これ迄通り人力と人力のすれ違ひの出來ない位の狹い道で以て滿足をするよ、などと不平だらだら云つてゐる者がある。新らしい面目を施した所では路幅はひろくなつたが、市中が却つて寂れたと云つた慨みもあり、旁々以て舊來の城内交通の面目は容易な事では改まらないだらうと思はるゝところがある。

田舎の畦道とか、山間、樵夫の通ふ徑とか行つてきつめられ、殆んど人里稀な所であつても、これ許りは、まことによく行屆いてゐる。田舎街の鋪石の下は多く下水の暗渠になつてゐるが、一度降雨の至れば雨水が忽ち溢れ、足を沒し、車の轉覆を見ることすら少くない。それから、北支那では、黄土質の泥濘深く、水はけの惡く、雨後の慘めさ、その不衞生さ加減と云つたらない。又天氣のよい時は、迚も埃つぽくて歩行に不愉快である。蒙古風の吹き來る春秋の頃、路上の行人の苦惱振りと云つたら到底、日本人の想像し得らるゝ所でない。全く火鉢の灰を投げつけられた感じのして、口にじやりじやり砂を噛むの思ひさへする。わけても北支那の田舎、交通不便の地方では、太古その儘の、ごろ〳〵石の現はれてゐる路面で、行人は驢馬か、駱駝の背でも借りなければ、長い道は歩かれない。昔から支那には南船北馬の言葉のある通り、南は船で、北は馬、かうして動くの外全く方法がなく、長の旅には自動車は通せず、人力車はなく、精々、がた馬車か、さもなくば馬背である。

蒙古路には河北となく、山西となく、到る處、駱駝隊の群を見る。むく〳〵と羊の毛皮を裏につけた、汚れた支那服を纏ひ、引く手綱も緩く、首に鳴る駱駝の驛鈴は大陸的の音を出し、そろふ脚並み

にじやらん〳〵と、その響は、地平線の彼方にまでも達してゐるかと察せられる。あかねさす夕陽に照らされて、大陸の野を悠々歸路についてゐる駝夫の眺めは、一幅の詩景を見るよりも更にもつと意味深き景觀である。蒙古人との混血兒らしい駝夫が、猿を二三匹背に負ひ、口をもぐ〳〵させながら山下の並木道を行つてゐるのも一種の詩的眺めである。萬里の長城以北の路傍にはあちこちに駱駝のタテ場が見當り、五尺大の文字で土塀に墨黒々と「駝店」と書かれてゐる。内部に行儀正しく膝づいてゐる駝公の背の瘤が二つ宛見えてゐる。そして駝夫は茶を喫んだり、晝寢をしたりなどしてゐる。さきの遠い蒙古路を行く手合の、どこまでも急がぬ呑ん氣振りがよくこゝに見えてゐる。北支那の田舍道ではまた驢馬が著しく重寶がられ、驛前に、また、名所舊跡のある邊りには、幾十幾百とそれが集つてゐる。旅慣れぬ旅客はこの驢馬の包圍攻撃を受け、身動きもならなくなることがある。驢公はそのコツを知つてなるべく、意地惡くないのを選らび傭ひ、連日の旅を續くるならば、とても愉快なものである。その乘り慣れぬ客だの、又鞭を餘り多く使ふ客だのいふのに出合はすと、やつこさん疾走中忽ち首を下げて、客を加速度のか〳〵つたま〳〵前へ落とす。確かと鐙に足を嵌め、脚に力を込めてその要領をうまくやることが肝腎である。甚だしく手古摺つて來た時は、指で尻尾の附け根のところを撫で叩いてやるがよい、すると、驢公は、目を小さくして柔順になる。田舍道の困難の多い歩行には、かう云つた色々の支那式のコツがあるのである。



浙江省莫干山の竹轎を登る轎子

十五、路上の轎子と山西の自動車道

支那の交通は、また昔しながらのチャオツ（轎子）に依つて特色づけられてゐる。このかごは普通長さ二間にあまる二本の棒の通つた乘り心地よき轎子である。左右に窓の明いてゐるのもあり、ないのもある。山東泰山に登るときの轎子は一種特別の腕かけ椅子に棒を通したものである。轎夫は互に前後になつてかつぎ行くのでなく、左右に並んでかつぐやうに出來てゐる。名山舊跡に屯ろしてゐる轎夫は多くたちのよくない雲助式のものがあてかなり客を手古摺らせ、荷物のある客は、その足許を見て吹つ掛ける。中には一日で充分往復の出來る山道を、わざと度々休憩して見たり、腹痛へをすると稱して寺さへ見れば之に入り、食事を幾度でもやつて暇つぶしをして見たりすると云つた計畫的の惡戯を繰り返す。結局山の中腹、仕方のないところで、日は暮れ路遠く、如何とも

なし難い情況に陥れ、轎賃の先拂ひを申出て來たり、途方もない割增を云ひ出したり、い〳〵やうに弄ばれて仕舞ふ。中にきつと一人ぐらゐ音頭とりがゐてはがや〳〵騒ぎ立て煽動をする。どどのつまり、腹痛を起したから、客に降りて吳れろなどと場所もあらうに泊る所もない深山幽谷の下で人を苦しめるやうなことを平氣でやらかす。多數の轎夫を傭ふときは中にそのたちのよくないのが必ず居ると見ておいてよい。

支那では、軍閥、政治屋、何が人を手古摺らせると云つたつて、山の雲助ぐらゐ巧妙な外交術を心得てゐる者はない。こは支那交通界に於ける何とも仕方のない癌と云つてよい。けれども澤山の中にはきつと又、滑稽なのも居たり、人の正直なのも居たり、運のよい時には大いに話せるのにぶつ突かることがある。さうあたまごなしに云つたものでもない。よくその人相を見、また傭ふ時の交渉に當る人、それにもよることである。村夫子に相談をかけて、その人の顏で傭つて貰ひ、歸宅した後に夫子自らの手で支拂つて貰ふ形にすれば、かう云つたうるさい問題にはならなくてすむ。

支那街城內あたりで隨一の便利な乘物といふと、人力である。北方では、之をヤンッオ（洋車）と呼び、上海あたりではワンバオッオ（黃包車）と呼んでゐる。日本のそれの如く、乘る所が高く宙に上つてゐるのではなく、かなり路面に近く下つてゐるのとその梶棒の長く充分に延びてゐるため、曳く方では、曳き易いらしい。終日乘り廻しても車賃は、始めの定めやう一つで大變安くあがる。そのため中部支那あたりでは、夏の夜、寒暖計の九十六七度を下らないといふ時などは、曉天までいくらと定めおき、うと〳〵と車上で夢を結んでゐる氣のつきである。車夫の背中には警察の番號札が縫ひつけられてあり、無理な要求でもして來た時には早速巡査に屆け出ればよいと云ふのである。が、しかし下手をすると、巡査の方とぐるになられ、こちらは泣きの涙で三倍五倍と、ぼられることもある。甚だしきは、約束の行先にまだ達しないうち、途中、金は全部支拂はされ、他の車夫に身柄を轉賣されることすらもある。引き次いだ車夫には申し譯的の金しか渡してゐないと見えて、こちらはあとで、二重に催促されることもある。その非を咎めて見たつて、喧嘩にもならず、どうかすると黑山の如く仲間が集つて來る。そして形勢有利と見るや、聲を大にして、更に要求額を大きく殖やして吹つかけて來る。道が惡かつたの、風の抵抗が强かつたのとあられもない難題を持ちかけて來る。

支那の人力は安くてよいけれ共、數臺も纏めて傭ふ場合には、甲乙丙丁、夫々の間に何等の連絡がなく、殊に交通の繁き目拔きの四つ辻などで、前のものとはぐれて仕舞つたやうな場合には、進退谷まり、言葉は解らず、地理は不案內で、支那錢を持ち合はさないと來る。これが始めての日本人であると、二進も三進も行かなくなる。だからもし支那街の見物に出かくるには、馬車を傭ふことにして互に車上で固まつて話し合ふ事の出來る仕掛けにしてゐるに越したことはないのである。

支那の道路と乘物の大要は先づ上に云つた通りであるが、田舍の地方でも、有名な山西省、太原地方を中心とした農村と來たら、道路もよく完備し、自動車のドライヴ、ウエーも四通八達で、流石は民國初年以來保境安民と、交通文化の事に努めた閻錫山の治下である丈に、他の地方で見ることの出來ない眞面目がある。又福建、廣東方面の省城には、年一年と舊道路を擴げ、面目を一新し、道を明るくしてゐる點に於ては、北方よりもたしかに一段進んだ感じがする。廣東の沙面（居留地）に面した沙基路あたりの文化振り、又最近河南街の方へ通ずる長橋の架けられたあたりの路面は著しくよくなつた。今や都會も、地方も長足の進歩で、道路の擴張と路面の改良とに官民擧つて努力してゐる。この點、新興途上に躍る支那交通文化の一面が見えて、有望なことである。

十六、支那宿と茶亭

支那の交通文化の發達につれ、之と平行して進んで來たものは旅館、ホテル、客棧である。支那の南方方言では、之を引くるめてカザン（客棧）と云ひ、特に洋風の宿をば中西旅館と云つてゐる。中西とは中國西洋折衷の意味である。支那の客棧は原則として、その食事付きのものはなく、部屋料のみをとる。上等の客室になると、應接間がある。浴堂があり、また簡單な化粧室の設備などもある。南方では寢臺、椅子、テーブルなどが置かれ、大體北方に見る炕（オンドル）付のそれよりも感じが

よろしく多少進んでもゐる。又北方はその便所の不完全なるに比し、南方は、必ず客室に夫々マードン（馬桶）の便器が備へられ、毎朝氣をつけてくれるので衞生的である。これは必ず朝早く云はなくとも清められてゐる。宿賃は食事を伴はないため、田舍では一二圓から十五圓二十圓とのぼつてゐるのもある。南山東以北は之が用意されてゐないのが多い。近來南京あたりではたしかな保證人を立てなければ、一切旅人の止宿を認めず、二十ケ條の印刷にした項目を示して、嚴重にその身許、旅行の目的、携帶品行く先などのことを明記せしめてゐる。阿片吸飲器を持つことは殊にやかましく、公安局の手で調べさせてゐる。しかし之には相當また裏の拔け道もあるらしい。

交通文化の方面で、支那獨特のものと見らるゝのは南方で路傍に扉の設備も何もない丸出しの長屋式マオカン（茅炕）の設けられてあること、これである。こは多く江南地方の街の場末、或は田舍の路上に見出されるものであるが、一種の共同便所の形をなし、且つ手輕い倶樂部でもあると見られる。町の人、道を行く人、共に、その催して來た時はいきなり此に陣取る。そして腰をかけ

江南の田舍茶亭支那宿の窓より見たる水鄉（浙江紹興所見）

用足しをし乍ら、くはへ煙管で談笑したりなどしてゐる呑ん氣極まる趣である。又地方によつては路傍に備へられた茶亭を見る。こは片びさしの屋根の下に大甕が置かれ、毎朝早くから青年團あたりの手で熱茶が入れられ、茶碗、柄杓なども、置かれてあるが、行人の夏の旅にはとても助かるわけである。又道を行く馬の爲めにも水を飲ませる用水場の設けられてゐるところがある。

十七、水鄉の民船筏の風情

南支に見る水鄉の交通は、前にも述べた義渡の渡し舟、或は有料の渡しなどのある外に、手で漕ぐ小舟のホワツ（划子）だの、また手と足で漕ぐチエワゼ（脚挖船）だの云ふのがあり、又一般に知られた例の民船に輪船がある。民船は同じ長江筋丈でも、江蘇安徽地方のもの、又中流の湖南湖北江西のものとそれ〳〵、その構造、形が異なり、四川に這入ると、その水の急流である丈にその船の造り方がまた變つてゐる。その他浙江方面に見る民船には、黒地に青又は紅、樺、黄などの色を用ひた魚眼の圖案美しきものがある。色ばかりでなく帆の形、眞帆、片帆の揚げ方、帆柱の長さなどにも地方的に色々の差別が見出される。運河を去來する帆船は、石橋の下を潜る必要上から總べて、帆柱が短く出來てゐる。

長江下流の水趣に風情を添へる民船

南支の水鄉には、昔しから陸上に住居せず、水上生活をのみ營んでゐる者が多く、從つて、子供を陸上の學校、寺小屋などへやることも喜ばないものがある。廣東福建方面にゐる船上の民はこれを土地ではタンミン（蛋民）と稱し、陸上の者と結婚する事も好まない特殊部落なのである。孫中山が、生前、差別待遇の徹廢を叫び、陸上に小學校を建てゝ吳れるまでの事をしたのであつたけれ共、依然として通學させることは拒んだ位である、蛋民は廣東丈で、約三十萬の人口が數へられてゐる。中部支那では漢口、漢陽、の間を流るゝ漢水の水上にその棲息するものが多くこれ又數十萬、その驚くべき賑かな船上生活振を見せてゐる。これは又支那でなくては見られない光景である。

かう云つた水上生活の大きい場面を見る支那に

は、水上を動く貨物の安全、又生命の安全の期し難く、時折り海賊船の現はれ來たつて、之が掠奪を試み、近來は發動機船を以て船を追つかけ廻すなど容易ならぬ世相を見るに至つた。併しその罪を犯せる海賊は銃殺の刑に遭ひ、船は瓜二つに引き切られ、その上見せしめのためとあつて、土手の上楊柳の下あたりに人目に曝らしてあるところを見ることがある。臺灣海峽から南の方、廣東の沖合にかけて、海賊船の多いことは世界的に有名な話であるが、これ等は南海の交通運輸をかなり不安ならしめてゐる。併し地方的には、隨分その海濱の漁村、近處界隈の治安維持の任に當たり、一定の經費を貢がせて、村民に安堵の思ひをさせてゐるものも尠くないといふことである。沿岸航路を縫ふて歩く小型の汽船は、海賊の被害頻々たる所から、地方民にしても近來次第に大型の船によつて動くものが多くなつたやうである。

支那内地に見る水路の交通又、沿岸航路に見る交通運輸の事業は支那資本に依つてゐるもの許りではない。その支那人經營によるものは、多く、二三千噸級以内の輪船を用ひ、しかも既に船價を償却したやうな古船を使つてゐるのが多い。船側に船名の文字を掲げたもの〳〵中にはそと車で、水をざわつかせ、騒がしく走つてゐる者もある。その遠く大平洋を渡つて支那へ來て、支那から南洋へ、日本へ、又アメリカへ、と遠洋航海をなしてゐる者は何れも外國船で、之によつて海外に出かけるものが多く往復し、支那自國の船は沿岸を離れない。從つて支那は一萬噸、二萬噸と云ふ大船を持合はしてゐない。近來内航問題の八釜しくなり、國内に利權恢復の聲の高くなつた折柄、日本の日清汽船を始め、英國その他の外國船も、その經營振りが思はしくない傾向を示して來た。併し又民間の支那經營になる招商局あたりの輪船なども、時局に際し、徴發の悲運を見る事頻々で、そのため或は政府の直營を希望してゐるなどと云つた風説までも生ずるに至つた。日支間に開かれてゐる船便には、北の方天津、青島、南方に上海、香港、と云つた各方面に航路があり、大小各樣の快速船又は遠洋航路の寄港船が配られてあり、日支相互間の交通運輸は、いくら排日があらうとかなりよく利用せられてゐる。

支那の奥地にありては、中部支那の長江流域は暫くおき、四川では、急流激湍を上下する特殊の構造になる民船がある。又その船頭曳子の特異性については前に述べておいた通りである。上流の水は、その水面以下の底の方を流る〳〵ものと上層の流れと一樣でない場合が多く、緩やかに見えてゐる所で、却つて底の流れの急なるため、夜半碇や鎖の切らる〳〵ことがあつたり、又河床の石塊の流れに禍され、肝腎の碇を捲き揚げようとしてその不可能となつたことなどもある。その外、汽船の遡航してゐるときそのあと浪に災されて、地方地方の小さい民船が浪がしらを喰らつて沈沒し、それがため八釜しい浪沈事件の裁判沙汰を引き起したやうな事も少くない。時には過重な積み荷をして、自分で勝手に沈沒しておきながら、外國船の通りかゝつたものがあると、之に難題を吹つかけ、いよ〳〵容れ

られなければ、以後一切その會社の積荷を揚げさせなくするや
う港の苦力達をそゝのかせて結束せしむるとか、新聞を利用し
て、理窟にならない途方もない要求額を吹つかけて來るとか、
隨分よからぬ事が流行してゐる。その爲め四川航路は、單に渦
巻き、急流、激湍の困難がある許りでなく、種々な意味に於て
八方惱まされることが多いのである。この外、時ならぬ時に、
匪賊の發砲襲撃を受け、船長その他の身邊に不祥事を惹き起し、
慘殺されたり、人質に取られたり樣ざまの事件が續出してゐ
る。近來の排日排貨漸く激烈なるが爲め、四川省内にゐた五十
餘名の日本人たちも、領事館員始め、居留民ども家屋家財をあ
とにして、そのまゝ引揚げて、今は時機到來を待つてゐると云
ふ有樣である。奥地の交通はさうでなくてさへ、困難の多い所
であるに、かてゝ加へてこの逆境を日本の官民たちはよくよ
く堪え忍んでゐる。

次に洞庭湖あたりの湖上に見る交通運輸については、輪船、

湖南洞庭より流し下ろ筏の光景

民船などの往復去來を見る外に、又湖南獨特の大筏が流され、多くは奥地から出て來る樟の材をまとめ集め、之を竹索で筏に組み、更にその筏を幾つもつなぎ繋ぎその上に小屋を作つて數十人、數百人といふ多數のものを入れてゐる。時には筏上に一個村の者が共同生活を營み、此に鷄鳴を聞き、日常の起臥をなしつゝ悠々八百里の水上を數ヶ月も又半年以上もかけて流し下つて來るものがある。筏上は普通女人禁制で、料理洗濯すべて皆男が之をなす。時折り江邊楊柳の幹に筏を結びつけ、七つ八つも群をなし、長江夜泊をきめ込んでゐるところを月下に眺むることがある。數哩に餘る長江の廣廣した水郷では、殆ど航行に妨げとなることもなく呑んだ氣にやつてゐる。江上筏の大なる者は、總坪數三千坪に達する者もあるといはれる。岸の上、見渡す限りひろく打ち續いた葦原を背景として、この悠々たる筏流しの大陸光景を打ち眺めてゐるときは、支那の交通文化に對し又となない雄大な氣持が思ひ浮んで來る。筏の上の男達は何を思つてゐるか、天の一方を眺め、ともの方に胡座をかき、李白、白樂天以上の無韻の詩を味つてゐるかのやうに打ち眺められる。併しかうした大筏は長江の下流金山寺の塔下まで來ると殆んど皆此處で木場との取引が成り立ち、鎭江の貯木場で解かれ、此に保存せられる。そして今度は隨時大の民船にそれ〴〵積荷して、長江の江口崇明島指して下されて行くのは、やがて上海の市場を目ざしてゐるものかと察せられる。

南支黃浦江の碼頭に見る飲料水の水汲み

十八、碼頭の稅關と飛脚

支那交通文化の上で又特別に注意せられることは、その船なり、車なり、又天秤棒でなり運ばれて來るあらゆる物資品物が、一々關所々々の通過の際、色々の名義で以て課稅せられる事である。茶にしろ、米にしろ、燒物にしろ、麻にしろ、其の他雜貨類、衣類、何にしたつて、稅關吏の目に觸れたものは、遠慮會釋なしに、目分量の稅を絞られてゐる。これまで釐金稅とか統捐とかいふ名義で取られてゐた稅、或は落地稅の名で取られてゐた稅などの爲めに商品が奥地から奥地へ這入る迄には、大變な稅額となつてゐた。かつて聯盟の決議でこれ等は表面廢止せられたことになつたのである。けれ共、却つて今はもとよりもうるさく舊に倍する課稅をされてゐるので、品物を動かす方ではこぼし切つてゐる。これは中央政府が直接行つてゐる譯ではなく、夫々地方財政の涸渇してゐる昨今の事とて、一種の請負としてその關門々々で一々之が課稅をしてゐる慣習となつて居る。そのお株に對するいくらかを地方政府へ出させる魂膽があると見える。その云ふべくして行はれない釐金稅の廢止は、事實上不可能の事だと見られてゐる。

支那の如き勞銀の安い所では、現金を輸送するときには、飛脚制度が民間に普く行はれ、その對人信用の厚い長年の習慣から、爲替を組んだり銀行を利用したりするよりか、個人と個人との間に直接行はるゝ送金法として、飛脚の仕事が相當に實行せられ、その人が又重んぜられてもゐる。南洋方面に働く華僑たちの本國に向つてする送金振りを見ても、その鄕里へ飛脚としての使をやり、之に自分の蓄へた多額のかねを委託してまかせると云ふ狀態である。それから又支那の交通文化の妨げをなしてゐる貨幣不統一の大問題は、今更ら之を如何とも出來ない話ではあるが、併しその不統一である事實を商賣のたねにして夫々開港地に、碼頭に、又市場にと盛大な錢莊、錢舖、兩替屋を營み賑つてゐるところが見られる。

上に述べ來つたところを以て、大體普通の交通圈内に於ける文化の現狀、並びにその習俗の一端を紹介したのである。が、更に人跡の殆ど到らない方面、奥地の天險秘境に見る交通について、尙ここに一言加へて置く。古來有名な蜀の棧道の如き、或は安徽黃山三十六峰、又三峽の雲表に聳ゆ

る峻嶺幽峰あたりに見る山道は、その邊の近いところから得られる石塊を持ち來たり、又樹幹を切り來たり、幾萬級の小徑を造る。その通ずる先のかなたは雲間に消えて見えなくなつてゐる。時には、又岩を削り足場を造りなどしてある所もあるが、木の根、蔓を頼りに攀ぢ登るやうなところもある。三峽の絕壁、全然、道の作りやうもない所では、その樹立せる壁面から人馬の通ひ得るだけの高さの部分を削り穿ち、鑿道となしその頭上にしたゝる水も冷たく、一方は崖壁であるが、片方は脚下千仞、濁流の滾々たるを見ると云ふ危險な小徑である。石の手摺り一つ設けられてゐる譯でもなく、一歩、一歩と足許に心を集中してゐなかつたならば、いつ蹈み誤るかも解らぬ。たゞ棧道には、所々に厚みゆたかな石の長い臺が置かれてあつて、攀ぢ登る行人椎夫の足の疲れを休ませるやう設備の出來てゐるところがある。驢馬を數多つかひ、採掘された礦石などをその馬子の歌もかん高く、靄を破つてひよつくり現はれて來る奥地山中の幽玄味は、曉どきの幽谷に屬見る所である。曉の時を報ずる鐘の音は靜かな全山に響き渡り、得も云はれぬ山寺氣分を唆つてゐる。下界の俗氣紛々たる城内のみにゐて、營々孜々と努めてゐる人々にも一度は見せてやりたい趣である。否、世人の想像だもなし得ない別天地なのである。時には五彩の色、鮮かな飛檐の高く、山嶽の一角に仰ぎ見らるゝ棧嶺雄關の情趣は、交通の不便な奥地丈に又幽玄味を唆ることが多い。林相は地方にもよることだが、巴蜀の天地では松柏科に屬するもの、又柑橘類のものがあり、又ホワンコス（黄葛樹）と呼ばるゝ熱帶植物の

大木などが隨所に見出される。この大木は一株で數十間のひろさに延び、又圓形に枝を張り、日本の樟、榎にも比べられる大樹であるが、その木材としての價値の殆どなく、徒らに大きい許りである ため、誰れも之を伐採しようとしない。三株で以つて大森林の如き綠蔭を作つてゐることもある。四川の百姓達はそのかつぽく許り大きくて、物の役に立たない人間のことを婉曲にワンコスと云ふ。これはこの黄葛樹の訛り言葉から來た語であつて、決して賞めた意味ではないのである。

五、支那の資源と勤勞

十九、資源を抱いてあせらず

支那山西省の石炭の埋藏量は無慮五百億萬噸を超ゆるだらうと云はれ、世界最大の炭田として稱せられてゐる。親しく大同の市場に遊び、その無煙炭の良質を見、又太原の奥の山中に入り、その山脈の溪谷を貫く炭層を見、又自ら無煙炭層の上を親しく蹈んでも見たりするといふと、如何にもその無盡藏的な寶庫であるに今更驚かされるのである。その地方には炭層を掘つて穴居をなせる土民もあり、山西はまるで石炭國と云つても差し支へあるまいと思はれる。山に立木を見ず、降雨一度到ればし、必ず一株づゝ植樹すべきことを奬勵して來た。その爲か、近來多少山には青色を見るに至つたやうである。山下に氾濫し、被害に住民が苦しみぬいてゐるので、閻錫山は毎年、四月一日、一人一木主義を強調

山西はその山骨の石炭であるがため、實は餘り良い林相を見ることは困難である。しかし、太原城內には農林學校を設けられ、日本から留學生の歸國したものなどもあつて、鋭意その事に當たらせてゐる。尚又石炭についてはあるを始めとし、半島各所に炭田を見、河北省には渤海灣に沿ふて開灤を中心に驚くべき開平炭の美田がある。これ等の炭田は、何れもその品質を異にしてはゐるが、滿洲撫順炭と共に、北支那竝に東北方面に於ける世界的な石炭の產地として知られてゐる。その他、四川に、中部支那にと各方面の、交通のある地點から石炭の採掘を見る所が多い。それ故に或る意味から云へば、支那は永久性を持つた石炭國と稱し得られる。併し山西のそれの如く、省內住民の臺所用、鐵道用に要するもの、外、多少省外に出してゐる量があるけれ共、其の採掘法の全く舊式であり、その採掘量も遲々たるものであると云ふのが多い。一時は外人にその採掘權を許可してゐた事もあつたけれ共、今はすべてその利權を回收した。

恐らく幾百千年の後迄も、山西の石炭の埋藏量ばかりは、支那永遠の資源として殘されるものであらう。殊にその品質のよ

船の積み荷を了へた山東の苦力が小鳥を相手に河邊に夕涼みをする所

い事と運搬賃の割合に廉なる事とは、一層有望視せられてゐる。薪炭材料の缺亡してゐる邊省のことて、何れも民家は地元の石炭を燃料として用ひ、その極めて安く使用が出來るので誠に惠まれたものである。又南の方、江西省の西南隅ピンシャン（萍鄉）は、南支に於ける最も有名な炭田であつて、大冶の鐵山から採掘される鐵礦と共に、ハンヤピン（漢冶萍）の大礦業會社を作り出させた位の資源を有し、萍鄉から粵漢鐵路の本線へ接續する石炭輸送專門の鐵道まで敷設されてゐる。かう云つた炭田は尙各省各地の地質調査の行はるゝにつれて今後どれ丈發見せられるか解らない。次に鐵礦は上述大冶の驚くべき鐵山の產出額のある外に、桃冲山の鐵礦が又かなりあつて、テイキャン（狹港）の船着場から運び出されてゐる。これらは多く漢陽の鐵工所へ集められ、軍需品の製作その他に供給せられてゐる資源として多大の關心が持たれてゐる。これ等は又夙に日本の八幡の製鐵所と密接な關係を有することは周知の事實である。

製鹽は、海岸方面では、白河の河口、太沽附近に見渡す限りの廣き鹽田を有する外、山東海州に又浙江ユウヤオ（餘姚）にと多量の產額があり、奥地では四川方面に瀘州に程近き自流井のそれを始め、隨所々々に鹽井を見ることが少くない。その他錫は湖南に、マンガンは四川に、水鉛は福建に、水銀は湖南に、陶土は江西に、又江蘇にと云つた風に礦石類の資源の多きは云ふ迄もない。又米、麥、粟、黍、稷の五穀を始め豆類、落花生などの穀類から野菜、筍の類に至る迄農產物と云ふ農產物はどつ

さり又多様に生產してゐる。又麻、桑、紙、木材、木炭、の類から畜產方面では、水牛、黃牛、羊、山羊、馬、騾馬、驢、豚があり、又家禽の類では家鴨、鵝、鷄の如き、凡そ古來支那の資源として知られた物で今尙盛に產出してゐないものはない。そのうちでも支那官民の財源として直接間接一等興味を惹いてゐるものは、罌粟である。その栽培、竝びにその生產品としての阿片の黑貨はこれ亦たいしたものである。

これ等の資源はすべて限り無く寶藏され、又產出されてゐるが、支那自身としては別段新しい科學的方法に依るとか、或は能率增進の方法によるとかして、その近代式の效果を擧げるやうなあせりかたはしてゐない。自らその寶を抱いて居りながら、別に抱かざると同じ態度で居るのである。古から藍田、玉を生ずと云はれ、奥地は陝西に、又甘肅に、或はビルマ境ひの雲南に、又貴州にと到るところ幾多の寶玉、貴石を產出し或は又浙江省常山からは有名な雞血石を、又西南雲南地方からは翡翠を、又湖南からは水銀をと云つた風に可なり高價な物をも產出してゐる。これ等は支那のとぼけた傳說口碑と共に、その資源、採掘地點なども一向に明かでなく、漠然と神話的に傳へられてゐるに過ぎない。しかしその支那領土內の地點地點から出てゐる事だけは云ふ迄もない。西藏の下、金沙江からは、古來砂金の產出があるため、この長江の本流地域は專ら黃金產出の目出たき祥地として目されてゐるのである。

斯様にして、支那の廣き地域内は、地上に地下に、無限の資源を有し、しかも之に近代文化の採取法を應用することに努めず、最も安全で、最も鈍い、しかも一番自信のある在來の方法によつて、之を徐々に物にしようとしてゐる。外人の考へついた新らしい方法などは結果は擧るかも知れないが危かしいわけだと云つた氣持で、必ずしも、それを信用しようとせず、祖先傳來の家傳の方法で以て急がず騒がずこつ〳〵とやつてゐる。近ごろ文明人が水晶を刻するに歯科醫の用ふる如きエンジンを利用してゐる者の多くなつて來た時代に、支那の篆刻師は依然として機械文明を用ふることを好まず、暇にあかせて氣の向く儘に風流な手彫りをなし、鑿の技術上の妙味をその製作品の上に漾はしめ、そこに自然のあらはれを樂しみ滿足せんとする心のゆとりが見える。此處にあれほどの支那資源に對し、之を支那の人々が如何に見、いかに取扱はんとするかの態度の一端が窺はれると思はれる。

二十、農産物と藥草

支那はあれ程までの豐富な資源を有してゐながら、全然資源なき國の人も同じ氣持でゐると見えて、何處迄もつつましく、又よく悠久な生活に堪え得る様な暮し方をしてゐる。その日毎日毎に勞役に從事してゐる有様を見ても、悠久を征服するには、かくも呑ん氣に働かねばならぬかの眞理を訓へてゐるかの如く見える。山東の農村を歩いても、その農作物、穀類を陽に乾かし、扇形の熊手で掻き分けたりする場合にも、蓆一枚使ふでもなく、その構庭は地面其の儘の泥を叩きつけた漆喰様の滑かな土面である。まことに世話のない思ひつきを實現してゐるわけである。高粱にしろ、粟にしろ、豆にしろ、みなその土面の上に自由に乾し擴げてゐる。つまり何をするにしても、金のかゝらないで、自然の儘を巧みに使用してゐる。これといふのも、一つには土地柄雨の尠く、乾燥してゐるためでもあるであらうが、又、その農事の如何にも無雜作に行つて長續きのする方法が取られてゐることを物語つてゐるのである。

支那棉花の資源を餘所に古綿を打直す住民たちの心事

山東の農村では、有名な落花生、白菜などの生産額が市場で見ると、山なす壯觀を呈してゐるにも拘らず、親しく田舍を歩き、畑を見廻つてみると、何處にも落花生や白菜の畑は見當らない。又同じ田舍

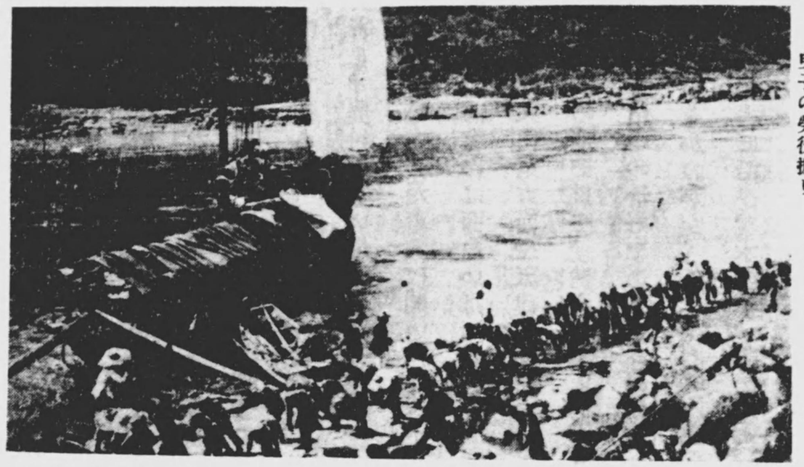
で田畑に働く山東牛は、たいして姿を見るといふほどでもないのであるが、一度曲阜の田舎に、或は青島に、即墨あたりに、その牛の市へ出掛けて見ると、幾萬の大小各種の牛の群が見られる。その驚くべき壯觀を呈してゐると云つたら流石は支那の、奥地深い事を思はしめてゐる。つまりその資源の限り無き寶庫のあることが、この一點からでも察せられる。又渤海灣の西岸、唐山から鐵路の沿線、塘沽を中心に見渡す限り地平線下まで、泥の鹽田のつゞき、あちこちに、船の帆をさながら放射狀に五枚八枚と合せた如き裝置して、風にキーキー音を發しながら廻つてゐる風車の趣の指さるゝは一種の鹽田風景を示したものであるが、これは溝中に引き入れた海水を一段高き鹽田へと汲み上げる龍骨車の裝置なのである。見渡す限りに於て鹽家の影など殆んど無く、働く人間の姿さへも見えず、稀に天地の接するあたりに工場の煙突が黒煙をあげて堂々とやつてゐるのを見る位のもので、見た所まことに寂寞たるものである。併し大陸の太陽熱を自然に利用して巨額の製鹽を營んでゐる狀態は、その天津まで出る十里の沿道に、これ又見渡す限り、鹽山の、幾萬幾十萬となく累々として列んでゐるのが指さるゝので一段驚かされるのである。年が年中この鹽の小山は殖える一方であつて、その産額は實際驚くべきものである。これが奥地幾億萬の住民の必需品として、朝に夕にそのなし崩し的に運搬されてゐる事を思ふ時、その資源の無盡藏である事を感じさせられるのである。にがりを抜くとか、化學的の新しい方法を用ひるとかは別に考へられてもゐないが、乾燥せる泥地に野曝らしにして、

長く鹽山の儘、打ち置かれてあるのであるから、大きい意味に於て、一種濾過作用がこゝに行はれてゐるやうな譯である。これ等の食鹽は北支那住民の口に、又住宅用の泥の煉瓦に、又上塗りの泥の中に、交ぜて使はれると云はれてゐる。これは土地が乾燥してゐる爲め風土の關係から自ら起つてゐることだと思はれる。

又南支の農村に見る麻の產額は、湖北から江西の邊りを中心とし、普通漢口に集散せられるのであるが、その實は下手の九江の對岸、武穴の市場に集つて來る。上海あたりからも直接現金を懷中して武穴迄買出しに行く邦商もある。上海から幾千噸の船に麻の貨物を滿載して輸出してゐるのも、皆この武穴から出てゐるものである。日本全國の漁村に用ひられる漁網、又全國家庭用の蚊帳の原料になつてゐる麻は、すべてみな支那麻が用ひられ、臺灣麻は高級品として知られ、その用途は少ない。又奥地四川省にあつては、藥草の產額、驚くべく多く、成都に、重慶に、又叙州にと、一大市場の開かれ、自分が叙州滯在中には西藏、雲南、四川、三方面から出た無盡藏の草根木皮が四尺大の袋に入つて、幾百斤となく一藥店に集まり來るのを見た。中にも鹿角はその種類の多く、夫々特殊のマークが附けられ、市場にどつさり運び込まれてゐた。三峽を下る民船の列をなしてゐるものも、その船頭の話によると、多くは藥草船で、その價格はたいしたものであると云つてゐた。主として不老長壽、壯陽、補身、に關するものが多く、流石は藥草の本場丈に物凄い產額を見せてゐる。

又長江の下流南京上海方面では、一日に約二億萬斤からの鷄卵が蛋廠迄運ばれ、化學的裝置の下に、之が分解作用を行ひ大々的に歐米に向つて輸出されてゐる。嘗て世界大戰の當時、南京和記公司にありては、長江流域の雞肉その他の肉類を幾億斤となく集め、之を冷藏肉となし、隔日に歐洲の聯合軍に向け、六千噸級の冷藏船で以て送り出してゐた。當時その公司は六百割の配當をなし、國際營利會社中のレコードを殘したのであつた。その外南支では福建安徽より出て來る茶の產額、又その輸出額は驚くべきもので、世界的の需要を充たし、英、佛、獨、露、日本、各國の茶と云ふ言葉の、その源が支那の茶の發音から出てゐるの一事を以て見ても、如何にその影響の大であるかゞ察せられるのである。

斯様に支那內地の資源は、見れば見る程、驚くべきもの許りである。何一つ見てもたいした事なさうに見えてゐて、その實、集つてゐる現物を實地に見ると、今更の如く大資源の底力のある事に思ひ至るのである。遠く眼を長城以外蒙古方面に放つて見ると、その白羊の放牧の盛んなることは云ふ迄もなく、之が北支那一般住民の用ふる毛皮となり、或は絨氈の材料となり、その肉は三千萬回々教徒の食糧ともなつてゐる譯であり、又その腸の靱帶は世界的の需要があつて、ラケットのガット用として重要視されてゐる。又蒙古馬の、軍需用に、運搬用に、重寶視せられてゐるは云ふ迄もなく、支那馬以上にその產額も目ざましいものがある。



四川の藥草目がけて遡江する民船曳子の勞役振り

斯やうな事實を大局の上から見ると、支那大陸は、一見殺風景の如く、又無變化の如く評せらるゝも、何分あれ丈の面積と、その地下地上の資源とを持つてゐるので、恐ろしい統計を示さないものはない。山東地方の農村の少女が稼ぐヘヤネットの輸出總額丈でも、歐米日本を通じて二千萬金からの額を下らないと云はれてゐる。いくらその仕事は細かく、勞銀は安いと云つても、コツ〳〵根よくかせぐ絕えざる勤勞振りは、その資源をして一層光輝あらしめて行くものと云へる。

二十一、勞銀に見る底力

支那の大衆社會の勞銀は、その生活程度の低く、韮、蒜に味噌、麵類で以て五錢六錢ぐらゐでもあげ得ると云ふ安價な生計振りであるから、考へやうによつては、その稼いだ丈の勞銀が大半貯金され得る事であり、又その心掛けも他國人の企て及ばない所を行つてゐるのであると見られる。そこに恐ろしいもの

があ る。

資源に對する開發振りはさう急いで積極的に目立つて勤めようと云ふ風には考へないが、その代り人が見て居ようが、居まいが、又人から賴まれようが、賴まれまいが、そんな事にお構ひない。たゞ一度定めた事は巖をも貫くと云ふ底力で以てやり拔くのである。牛の如く、龜の如く遲く、のろい。併し確かに行く。あの滿洲に渡つて働いてゐる苦力又は車夫たちが獨身で以て零細な金をため之を懷中してゐるが、その食つた丈を差し引き、あとは纏めて一年に一度或は二年に一度、山東の田舍に歸省し、農村の安い地所を買ひ求め、天晴れ地主となつてゐるものすらもある。こは大連あたりで試みに自分の乘つた車夫に聞いたことである。その鄕里、脊州の田舍に送金して田畑を買つたといふ實際の話の內容には面白い插話が色々とあるのである。そのいふところには一段確かなところがあると考へる。又山東方面や天津の田舍から滿洲に渡る勞働者で、靑島の港から噸あたり十二、三人のわりの噸積みの形で以て、送らるゝものもある。その之を積み込むときと云つたら船と岩壁の間に網が張られ、芋積みの恰好である。その甲板に積込まれたら貨物同樣の扱ひで大連に向け運ばれるのである。それでもかねがかゝるとあつて、中には船をやめ、遙々足でテクリ、牛莊、營口さして海岸線を三角形の二邊に沿ひ、木の下、寺の境內にごろ寢などしながら日數かまはず流れ行くといふのである。その船賃をとられるよりかテクつた方がよいと云ふ、支那一流の勤勞氣分で以てやることであるが、そ

の考へが末恐ろしくこゝに現れてゐるのである。

上海の紡績工場に勤めてゐる幾萬の女工或は男工たちにしても、その肩に斜に靑いたすきを掛けてゐる組長は之を別として、一般のものは多く、文字の讀めない方である。自分の姓名がやつと書けるか書けないかの程度でゐるのだが、併し、ブローカーの爲めに、時折り煽て上られる事がある。例の工賃値上げの問題で、一日日給十四錢のものが十七錢に、二十錢のものが二十五錢にと云つた風に、既に事務所前の揭示板に明示されてはゐても、その字が讀めない爲めにブー〳〵云つてゐる者がある。多くは勤勞第一主義の平和の民であるから、之を焚きつけたりなどする者さへなければ、可愛いものである。正しく素直に導くならば、支那資源開發と共に、喜ばしい前途を樂しむ事が出來るであらう。

二十二、資源よりも勞役

嘗て支那南北が兵火を交へてゐた當時のことである。南軍の兵隊が北平城內に這入つたが、いくさのない平和な日もあつた。城南公園のベ

手押し車のショウツオ(小車)を稼ぐ南方の苦力表

ンチの綠蔭に或る日南北双方の兵隊が日向ぼつこをしながら、話し合つてゐるのを見た。胸のマークの違ふので一見直ちにそれ〳〵の所屬が解るのである。自分は何心なく二人の兵隊と背中合せに片方のベンチに凭り憩ふてゐた。すると二人の南北所屬を異にしてゐる先生は、久し振りで會つた友達同士の間と見えて、色々打ち開け話をしてゐる。こちらに聞かれてゐるとはつゆ知らず、毎月貰ふものの額のことを話し合つてゐる。何でも南軍の兵隊は戰時手當を入れて十二弗になると云つてゐるに對して、北軍の方は八弗にしかならぬといふらしい。どうだ、都合では俺の方へ來ないか、と云つてなつかしげな相談振りである。敵味方の關係であり乍ら、表面南北對峙の形であるとは云へ、よくもこんな話が交されるものだと、不思議に思はれたのであつた。尤もその前、北平の城內では、明後日になると、敵の爆彈が飛行機から落されるから、市民はその積りで避難の仕度をしたら宜からうなどとの達示が出てゐた。氣の早い連中は、荷物を纏め、天津租界の身寄りの所まで都落ちをした位の者もあつた。又落ちついてタンバイロウ（單牌樓）あたりに居殘つてゐる者もあつた。すると、面白いではないか。その日の午前になつて號外が出た。見ると、敵の爆彈は落とされる筈であつたが、都合によつて日延べになつたから市民安心せよと云ふことを報じてゐるのである。恐らくその爆彈は、北方側の某方面で價高く買ひ取つて仕舞つたため、事なきを得て、この吉報が出せる事になつたのであらう。すべてがこの調子であると見て、大差ない世相なのであるから、敵味方の兵隊同士の味ひのある

話をする場合も、支那なればこそとよく味はれたのである。

支那は兵隊と云はず、女工と云はず又一般居住者と云はずその給料はいくら安くても八釜しく云はぬものがある。その必ずしも額の大小についてやんや云ふものではなく、その裏に流るゝ魅力の事を考へ、又その全局面に漾ふ一種支那式の悠久な氣分のあることを見てゐるのである。しかもそれを多くは芝居化しながら、面白く、可笑しく、呑氣にやつて行かうとするところがある。そのいくら資源を背景に持つてゐても平氣である。所謂文明國人とか、科學の適用を事としてゐる人とかの汲々としてゐる態度は支那の人の取り得ない所である。又取りたいとも考へないところである。胸に萬年無限の寶庫を藏し、手に鳥籠を提げ、一日の勞役を忘るゝべく、樂しく小鳥と語りつゝ場末の並木街道を散歩すると云つた詩人の心境を持つてゐるのである。一萬圓の自働車で乘り廻し、その事務所から馳けつけ、ギャング式の不祥事のあと始末に汲々としてゐる如き日常生活と、果たして何れが悠久な資源に對する行き方としてよいであらう。眼に一丁字こそなけれ、又その歐米の科學一つ知つてこそゐなけれ、何處となく大陸氣分の漲りゐて、天の一方に資源の妙峯を打ち眺め、眺め、長閑にしてゐられるのである。これが支那の資源と勞役に對する一種特別な支那式の認識法である。事實又こゝに支那勞働者の最後の自治的勝利氣分も宿つてゐると云へる。

支那の勞役問題は、要するに時の問題であり、又數量の問題でもある。その永久的な見解の下に、

大衆の纏つた力を併せ持つてゐることが、支那の資源の値打と相並んで、何よりも強みとなる所である。之を他國から如何に批評しようとも、やんや捩じ込んで來ようとも、少しも驚かないのである。支那の方では必ずしも形式的な經濟統制は强制しようともしない。形なんかどうでもよい。みなが皆、根よくどこまでも自力更生で努めるならばよいと括つてゐる。外來文化などたいして當てにもならぬ。文化侵略だの外人のふところ都合だの、さう云つた方面のことには眼を曳れてゐる暇もない。稼げよ稼げ、我が仕事に、と云つた貴重な標語の下に、たゞ勤勞振りを發揮してゐるのみである。口さがなき支那の青年たちは傲語していはく、いくら紡績事業にしろ、礦山事業にしろ、支那の勞働者を數多使役し、支那を捌け口としてゐるものは、とどのつまりは、その機械裝置、高壁、煙突、何もかもそつくりそのまゝ中國に置いて、その人間だけが歸國してしまふ様な時代が來るかも知れぬと。資本は資本家の資本に非ずして、大衆勞働者の手にあり、などゝ云ふ太平樂な氣持を表現してゐる者すらある。何れにしろ、その資源よりも何よりも强いものはその勞銀の安いことに在る。その安くて勞働そのものに代をかけ、親子で以て打込み之に終始し、結局その動かすに動かされないだけの勢力を張るに至る事は、支那資源の寶庫を見ると同時に、最も認識を深めなければならない點なのである。近代科學の萬能の姿にのみ捉はれることなく、むしろ科學は方法論を云々するときに强みを示すものであつて、眞の相手は、科學よりも、資源よりも、この勤勞勞役を生命とする支那大衆の勞働者にあることを。この點を重く見なくてはならぬのである。」

六、支那農村生活

二十三、蘇州田家の娘

支那の農村ぐらゐ有りの儘の支那の姿を呑ん氣に物語つてゐるものはない。その死生の巷で、一厘一毛を爭ひ、口角泡を飛ばして驅引に夢中になつてゐる都會地から離れて、いともその長閑な高粱畑の颯々たる風の音を聞くのはよい氣持である。又田家に驢馬の嘶くのを聞きつゝ老農と語り合ふなどは、農村生活の得がたい片影である。

支那の田舍と云つたらどんな處であるか。

そこに支那人の自力更生は如何にして營まれてゐるか。支那の詐らざる姿は何處に存在するか。三千年間練りに練られた支那農民の人生觀は如何に味はれるか。又支那大陸地理の趣はどれ程長閑にこゝにあらはれてゐるか。

北支那に見る田舍の子供兄弟

又方面を違へてかう云つたなだらかな天地へソヴイエト・ロシアから相手もあらうに、農民田夫に先づ目を付け之を對象とし、南支の百姓達を赤化してかゝつてゐる、といふ事實もある。かうして色々と見て來れば、來る程、見處の多いのはこの農村生活である。田園自ら樂しみあり、魚鳥亦相親しむと昔しの文人墨客の看破した姿はこの農村生活に見出される。人は支那では、農村に一步蹈み込めば寄つてたかつて殺人騷ぎがあつたり、人を人質にとつて片田舍へ連れて行つたりするなどと、碌でもない噂を立てる。この平和境である水村山廓、田園生活の眞相が、往々日本の青年子女や知識階級の間に理解されて居らず、やゝもすれば認識の出來てゐないのは、お隣りの日本として殘念なことであると思はれる。

支那の田舍に這入ると、時たま青年達が日本は何故支那をいぢめますかなど、戲談交りに語ることがある。いぢめるのではないよ、双方に誤解があつてそれが解けないため、さう見えるだけのことだと云つて、その眞情を細かく語り合ふ。さうすると、すつかり氷解して來る。青年以外の老農達は別段そのやうな國際關係の事など話題には出しもしない。又痛切に利害を感じてもゐないやうである。自分の畑の桑がよく出來、稻がよく實つて呉れゝばそれでよいのだとしてゐる。無理な稅金を取られず、負擔さへ輕くしてもらへるなら外に云ふ事はないのだとしてどこまでも之と語つてくれる。友あり遠方より來たる、また悅ばしからずや、と云つた氣持で談笑する。そして日本の農村の長閑な方面のことなど、知つてゐる限りを打ちあけ話してやると、如何にも腑に落ちた頷き方をして、子供や孫に、又語り聞かせてゐると云つた風である。事實鋤にしても、鍬にしても、又唐竿にしても、その他、唐箕などにしても、日本にあるものは支那そつくりの物で、恐らく日本は支那から之を學んだものではないかと考へられる位である。胡瓜や茄子の形の長く成つてゐるのを除けば、あとは大根、蕪、人參、牛蒡、葱、南瓜、西瓜、絲瓜、芹、菱、ごいなどの如きも、大體日本のそれと似たものである。蓴菜草の如き又菊の如き又竹の如きはその物も言葉も双方ともそのまゝで、これ等は支那傳來の物として考へられる。

かう云つた兩國共通のものゝ見出されることは一段と話の親しみを增させるわけである。農家の南面せる人通りの少なき路傍の蓆の上に、老婆が、鍋で繭を焚き、片方に手で手繰りの車を廻してゐる日向ぼつこ姿は、如何にも田園生活らしく又柔かくも眺められる。又村外れの軒の下に、昔日本で見た古綿屋の綿を打ち返す弓なりの機械で、ビーン〳〵の音も勇ましさうに働いてゐる者の見えるのはなつかしい。南支那は農村に桑畑又は稻田が多く、北は高粱畑が目につく。桑は山東の魯桑、江南の湖桑、湖南湖北の荊桑などと地方的に違ひはあるけれ共、何れもよく出來てゐる。殊に江南地方江蘇、浙江、安徽、の桑田は、その株、さしわたし六七寸にも達し、高さ七八尺の所から始めて小枝を出してゐると云つた栽培法である。その葉は大きく七八寸以上のもあり油切つてゐて光澤がある。

春の彌生の頃、ウーシー（無錫）の公園を訪ねて見ると、養蠶業の勤業展が催されてゐて、地方の桑の葉の陳列、繭といふ繭の種類や、產額、又化學的分析などから外國產のもの迄をも比較陳列し。大いに地方農民の注意を喚起してゐると云つた近代氣分を漲らせてゐたのであつた。いふ迄もなく無錫は蘇州、杭州と共に養蠶、製絲、絹織物に於て、支那四百餘州の魁をなす所、流石は古の吳の國だけに吳服物の原產地として重きをなしてゐる、江南の農村を遊歷して見ると、このあたりは稻を作るよりか、桑の方が利益も多く、日本の繭の相場の安い時分には、日本から續々輸出されて行つたものだが江浙繭業組合の方では、自己防衞の意味から、ひどく之に反對の氣勢をあげてゐた事もあつた。

田舍の運河船著場で綠樹の蔭におさげの髮の姿した農家の娘が二人、椅子を持ち出し、木の枠を前に、しきりと絹地に黃色の龍の模樣を鱗の畫き繪そつくり刺繡をしてゐるいそしみ振りは見る眼も可愛く眺められたのである。妹の針の運びの間違つた所を姉の方から注意してやつてゐるところなど、その姉妹の情も見えて、蘇州の田舍に漾ふ田家の風情が一段懷かしく思はれたのであつた。

二十四、江南農夫の風情

湖北の奥地、三峽の裏山にひとりの田家のかみさんを見る。手に茶壺を下げ小さい足して緣の廣い麥稈帽子も輕るげに、頭を振り振り畦道を辿つて行く。その姿は、畑に耕す老農の姿と共に、一幅の繪を見るやうである。又水牛に跨がり、鞍もつけず、一人の牧童が、群がる水牛を率き連れ、長江の流れに沿ひつゝ、土堤を下つて行く所は、何處となく長閑な水村の趣を物語つてゐる。又船が江上を去來するのを見、飽氣にとられた顏附してこちらを打眺めてゐる百姓達の紺袴つけた姿、これもまた南方農村の小景である。北支那の柿の生つた木の下に、岩積みのさゝやかな石室の如き百姓家は、淋れ切つた四邊の山里の中にある丈に何處となく又物寂しい住まひが想像され、長城以北の趣を見せてゐる。

江蘇の田舍に見る農夫の仕事振り

かう云つた風に、支那は隨所隨所に田舍の地方色が打ち眺められ、これが又農村を知る上の一方法でもあるが更にその耕農振りについて、その地方的の動きを見て來るとそこには又自ら趣を異にしてゐるものがある。江南の田家、運河沿ひの地方では、河床の泥を汲み上げ、汲み上げ、之を溜め置き、生乾きにしたのを天秤棒で朗かな春の歌など歌ひつゝ、足で調子をとり

ながら畦道遙かに畑へ、畑へと運び行く。その泥仕事をするに、一々刺繍の施した紺袴をつけてゐる習慣のあるのは江南の農夫に於て始めて之を見る。泥まみれになる仕事をするにこの袴袿でとは餘りにも趣をつけ過ぎてゐるかと思はれるが又風雅にも眺められたのである。

又初夏の頃、水郷の田畑にはスイニユーポ（水牛盤）と稱し、歯車仕掛けで下の運河の水を畑に汲み上げてゐる。そのための裝置で、その水牛のわき見をさせぬやうにと、馬車馬式に目かくしをされたのがそこに必ず見當たる。日覆ひの下で中軸の柱を中心にひねもす同じ圓をあるかせられ、ゆつくり巡つてゐる。こちらの畑に水が這入れば、またその水牛盤は水牛もろ共にあちらの畑へと位置を變えてゆくと云つた風にどちらへなりと持つて行かれる。この裝置を持たない百姓は水田の一角に簡單な龍骨車を裝置し、傘を片手に、足で蹈み蹈み水を汲み上げてゐる。秋から冬にかけては水牛盤は土堤の叢の中に捨て置かれてある。

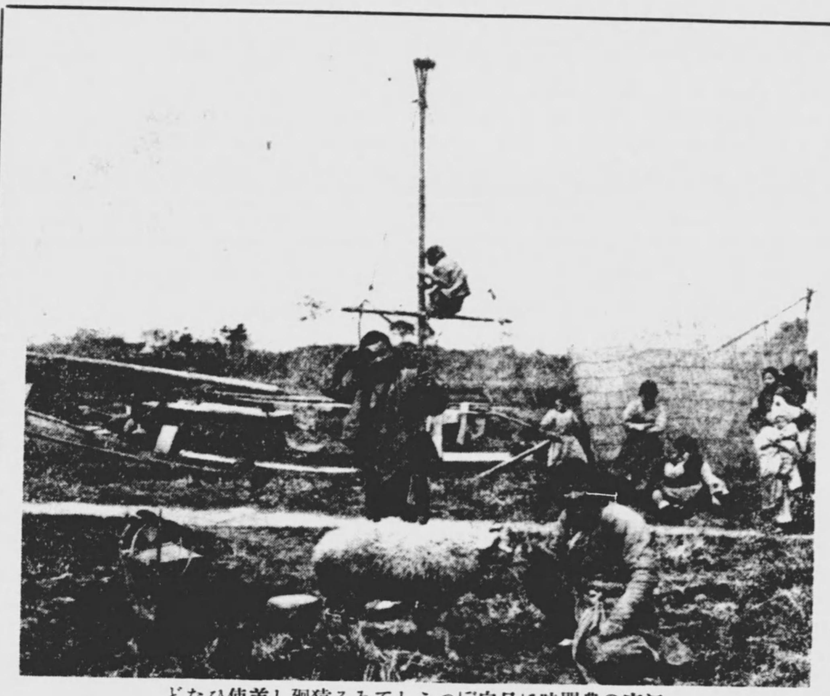
田舍の田畑の眺めは、丘に昇り見渡して見ると、榮種の黄色、稻田の綠、蓮華草の紅、などとりどりで毛氈を敷きつめた如く見え、遠距離のかなたから縫ふて來る運河の水の、銀色に光つてゐるのもこれ又江南でなくては見られない眺めである。橋の袂に船を停めてゐるのを行つて見ると、それが稅をとられてゐる民船であつたりする。岸の草を喙む水鳥の四五羽が波紋を描きつゝ群つてる所は、平和の象徴とも見られる。又柳村に念佛を唱へる女の聲の聞えてゐるのは、あの先に禪寺でもあるかと

想像される。秋の田舍の畑に百姓と語り合ひ、又手帳に萬年筆で書きとりなどしてゐると、何時しか赤蜻蛉の飛び來つて、その尖端に靜かに止らうとする。筆を止めしばし打眺めてゐると、二つの大きな眼の玉をくる〳〵動かしながら、不思議さうな止り木だといつた顏をして見廻はしてゐるところが面白い。

かう云つた風で、春は空に鳴く雲雀に、百姓の泥を運ぶ歌、秋は畑に戲れる赤蜻蛉、如何にも支那農村の姿は平和の氣に充ち滿ちてゐる。地方によつては又見渡す限り罌粟の花の咲き亂れてゐる所もある。こは百姓も、役人の方でも多大の利益の眼で以て見られてゐるものであるが、こゝに一種特別の農村阿片氣分の或物が唆られてゐる。又南方ではよく桐畑を見る。これはあまり高くは伸びてゐないが、手の屆くあたりに綠の實の生つてゐるのが見られる。絞つて桐油をとる原料となるもので、昨今國内の需要許りでなく、海外へも相當にウッド・オイルとして出されてゐるとの事である。

二十五、農村生活の娯樂

農村生活の娯樂方面としては南支では、村芝居が運河べりに小屋掛けで催される。附近に露店が出る。小ざつぱりと着飾つた田舍娘達も之に向ふ。銅羅、胡弓、笛、太鼓、木琴の音が賑かに聞えてゐる。又夜は寄席に入りが多く、賑つて、村人の半ばは之に集まり打寛いでゐて、さながら村の倶樂部



江南の農閑時に日向ぼつこしてゐる猿廻し羊使ひなどな

の觀がある。こゝには又何とも知れぬ和平の氣分が窺はれる。その外竹林の中に農家の胡弓を彈づる家があつたり、麓の里と思しき桃林の彼方に、祭りのおほ太鼓の音が霞を通して聞えて來る。彼岸の頃には山僧が托鉢姿でしづ〳〵と念佛を唱へ乍ら町を練り、村の子供達もそれについて歩いてゐる。又廢寺の屋根は傾き、僧侶一人居ない淋しい門内に、乞食共の固まつてゐてそのわきに、大きな石像の彫刻などの三つ四つあれど半分は倒れてゐたりする荒廢振りの眺められるのは南北各地共に田舍でよく見るところである。

時には珍らしく西洋人の宣教師が、馬上手綱を取つて、村民に笑顏を作りつゝ、歸路を辿つてゐるところなども見當る。無論かう云

つた宣教師は奥地に長くゐて、その地方の言葉も出來、新約全書の設教は、巧な支那語を使つて笑はせたりなどするのである。久しく農村に喰ひ入つてゐた歐米の宣教師達も、近來文化侵略の名で地方青年達からいぢめつけられることがあるので、段々跡を斷ち、一時は全支に六千人からゐた美國（アメリカ）ミツシヨン・スクールの連中も、今は姿を殆ど見せない。併し流石にフランス天主教の黒のガウン姿した女宣教師丈は、よくも周圍の土民を感化して粘り強くやつてゐると見え、殘つてゐるやうである。

二十六、田舍の共産氣分

ロシアのソヴイエット系から田舍に入り來たつてゐる手合は又相當にゐるが、これらは必ずしも、宗教を目的にしてゐるのではないらしい。でも、内地に深く入り關帝廟の如き土民の信仰厚き寺々に陣取つて、農夫細民に黄白をばら撒いたり、色々の方法でつまる所、赤化を宣傳してゐる。廣東地方の田舍では、共産主義に加はつた者へは毎月一定の手當を寄越し、再び脱退する事を絶對に不可能なからしめてゐる。之を誓はしむる爲め、身内のもの、一人を殺害するか、さもなくば更に黨に引つ張り込むか、何れかの方法を取らしむべく、高壓的に出てゐるため、種々なうるさい問題を惹き起してゐる。一度這入つた者は内心は出たく共、事實で出られ得ない仕組になつてゐるため、種々なうるさい問題を惹き起してゐる。又江西の田舍では共産

黨の幹部と、良民との間に種々な利害關係を緊密に結ばせ、良民側から相當な人を出してその連絡を圓滑ならしめるやうにとつとめ、年一年と接近するの傾きさへ見えて來た。南京政府では、中支地方のこの現狀をひどく憂慮してはゐる。けれ共、農民が自力でする事には、如何とも手がつけられず、討伐隊を派遣しても、それが又、軟化したり、妥協したり、てんで仕末に了へない。今のところ農村に喰ひ入つた福建、安徽、江西、湖南、湖北あたりの赤化部落は、南京當局の歯が立たない程度にまでも進んでゐる。自力更生の道については、太古以來國家や政府の厄介にならず、自己の道は、自己で開拓するといふ力強い歴史を持てゐる農夫達の事であるから、政府の方針如何に拘らず、支那式に形の變つたものとしてソヴイエットの氣持が浸潤して來ることであらう。國體が違ひ、國民意識の異なる自力萬能の支那には、日本人

片田舍の共産村の畑中にむつくり現はれゐる土匪の片割れ

あたりの考へ及ばぬ人生觀があり、又民族の運命も實は此に懸つてゐる。支那は支那たり、日本は日本たり、などと云つて呑ん氣に對岸の火事と見ては居られない事實も此處に宿つてゐるのである。

支那の農村生活は、古來文章の上にはあまり書き現されてゐない。その歴史の上で取り殘されてゐる人間味の眞の民族的氣分と云ふはこゝに養はれ且つ强調されつゝある。ロシアは表面立つた政府だの、國際法だの云ふものに係り合ふことなく、表面は表面、裏は裏でぐん〳〵手を延して來てゐる。

〔表面の國際交渉にのみ捉はれ、かん〳〵になつて憤慨したり、斷乎として、やつ付けなければ駄目だなどと云つてゐるのもよいが、併しその農村の柔かい所、四億萬民衆の心臟とも云ふべき本當の支那大衆の心持から離れてゐると云ふ行き方は、國民外交の急を唱へてゐる時代として餘りに見當違ひのやうにも思はれる。問題は、支那農村生活の情味のある所に目をつけ、國民と國民、心と心、の暖か味を互に感じ合ふやうにすることが必要である事を力强して置きたいのである。〕

二十七、水鄉の舟行

支那農村の情味の輪廓についてはほゞ前に述べたところで了解せられたこと、思ふ。が、自分が支那遊歴の際、田舍の農夫達を相手に運河を舟行してゐた時に自分の特に體驗したこと、又上海あたりの在留日本人があまりに田舍を恐ろしがつてゐる半面にかう云つた事實もあるとのことを此處に少し

古の吳越を界する錢塘江の渡し舟

く附け加へておく。

排日の氣分の未だ本當に消えてゐない時分であつた、田舍の江南地方を、常熟から無錫、ニイシン（宜興）リイヤン（溧陽）金壇方面へと一人で歩いたのである。この地方はすべて運河の水路が四通八達で、子供が學校に行く道中も、豆腐や野菜の物賣りも、葬式も、すべて運河が利用されてゐると云つた位に水運の便利な所である。城内も路幅の狹いところを乘つて行くよりか、船を傭ふて好きな所へ着けさせる方が、らくでもあり、便利でもあり、また安くもある。殊に買物でもしたい時には、傭ひ切りの船だと、自由がきく、南支江浙の地方を動くには、輪船があり、民船があり、又民船の曳船に曳かせるのもある。その時の都合で色々種類を更へて見るのもよい。何時も自分たちの乘り合はせるものは地方の百姓達で、家族連れのものもあり、一人客のものもある。船内はカツアン（客艙）もあり、フアンツアン（房艙）もあり、又ハイカラなヤンツアン（洋艙）

といふもあり、夫々その等級は違つてゐるが、要するにその客だねは界隈を動いてゐる農家の主人、かみさん又は田舍の小商賣人たちである。多くは、田舍出來の籐鞄とか手提籠などを携帶してゐる連中で、手ぶらの人はあまりゐない。船に乘つた以上は、吳越同船であるが、何れも皆席を譲り合ひ、互にお茶を薦め合ひ、始めのうちは互によそ行き顏をして夫々きちんとして澄ましてゐる。船が碼頭に寄航すると、船頭は尻上りの判つきりした聲で、客に碼頭の名を叫び知らせる。逸早く果物、饅頭長生果（南京豆）などを賣りに來る賣り子が這入つてくる。客は入れ替る、銘々は手荷物へ特別の目を光らしてゐる。かう云つた田舍船に乘り込んだときの氣持と云つたらかなり緊張した恰好に見えてはゐるが、その碼頭を出でゝ次の碼頭まで漕ぎ行くあひだの、長くかゝる處では、かなりひまで退屈をするのである。別段紳士的にかまへてゐると云ふわけでもないが、さりとて無論名刺を取りやりする程の手合ひもなく、又名刺など持つてゐるらしく考へらるゝ相手でもない。あけすけに云ふと字も知らぬ位の連中なのである。これが先づ田舍船の乘り合ひ客の常態だと見ておいてよい。

船は出る。運河の兩岸、楊の蔭、菜種の花、黒犬、百姓娘、石屋、茅坑、牌樓と次から次へとこれらが左右に送迎される。石橋の下を潜る。綠濃き蔦がよく見える。かう云つた外の眺めに視線を放ち心を遣つたり、又同船のとなりの客に、橋の名前を尋ねて見たり、村の名前をきいて見たり、なんかしてゐるうちに隣席の百姓の客と次第に親しくなつて來

る。でも別に向ふから名前を聞くわけでもないが、こちらから名を云ひ出して見たりする。

船内は互にかたり合ひ四方山話で賑ひ、次から次へと話題が進む、前の碼頭で買ひ求めた果物、白胡麻のかゝつたシャオピン（炒餅）なんどを卓上に持ち出し、熱茶が來ると、そろ〳〵互につまみ始める。居合す客には悉く薦めたりなどするうち、その地方の果物の話から先づ問答が始まる。トンヤンピンコー（東洋苹果）（林檎の事）の話も持ち出される。かうした罪のない四方山話をしてゐるうちにかみさんの側に借りて來た猫の如くしてゐる子供がゐる。五つ六つの女の子で、赤の毛糸で頭のてつぺんに二個所、總角の毛を可愛く編み、直立させてゐるのである。その丸顔したところが又いかにもいぢらしく見えるので之に炒餅を取つて與へる。けれども取らうともしないで、からだを斜めにねぢる。顔をそむける、取らせようとする。するとお母さんが子供の名前を呼ぶ。クイホワ（桂花）と云つてゐる。クイホワお客さんのくださるお菓子を戴きなさいと云ひかけてゐる。かう云つた所が如何にも田舎の情味のあるところであるので氣分を優しくさせる。そしてそろ〳〵話を家庭の方面へと向ける。先づ年齡を確かめたり、外の姉さんの年齡や名前を聞いたり、その子供の好物を聞いたり、だんだんするうち、何處の港で上ります。お住居はどちらかなど失禮に當たらぬ程度のことをきく。やがて側の亭主らしきが、話を引き取つて明確に答へて吳れるやうになる。今度は相手が男だけにこちらも自分の行先を語り、宿屋の話や、又禪寺の事などを尋ねる。折りよくこちらの思つてゐる行先

と丁度同じ碼頭で降りると云ふ百姓が側にゐて、それがその話を更に引き取り、細かく話して吳れることにもなる。時刻は晩の八時を過るだらうから、道は暗くなるし、勝手が解り難くいだらうから、宿まで御案内をしてあげませうなどと云つて吳れる。宿屋の名前から、番頭の氣立て、船著からどの位といふ距離、一泊幾ら位といふところ迄、何から何まで丸で親類の人の様に、心から教へて吳れる。實は日本から來て、名所舊蹟をたづね探り、今日は行ける所迄行く積りで來た。都合よく道連れを得て好都合であつた、など感謝の挨拶をしたり、茶を入れ代へさせたり等するうち、江南の農村で見た所と、日本の田舍の生活振りの違ふ所など話する。すると又向ふから質問を出して來る。日本は田に水牛を使ふか、馬を使ふか。何を使ふか、種蒔き、刈り入れ時、養蠶と、色々の話に移るのである。かうして大體互の氣分が了解されると、船中は全く一家團欒の形になり、仕舞ひには先生は、今年幾つになるゝかなど齡の話にもなる。皆さん當てゝ見なさいと問題を出す。十も十五も若く云つたり。又上に云つたり近い處迄來たりなどする。笑ひ聲が出る。その村の結婚風俗の話が出る。花嫁（出門婦兒）の話に花が咲くと、云つた風でまさに滿堂春色を生じ、船の進むのも忘れて仕舞ふと云つたほどである。

人にも依ることだらうが、何れも皆始めての乘合客、別段相互の間にどうと云ふ意味があるでもなく、有りの儘の當らず觸らずの社交の談笑を繰返す。かうしてゐる分には其處に何等の蟠りの起らう

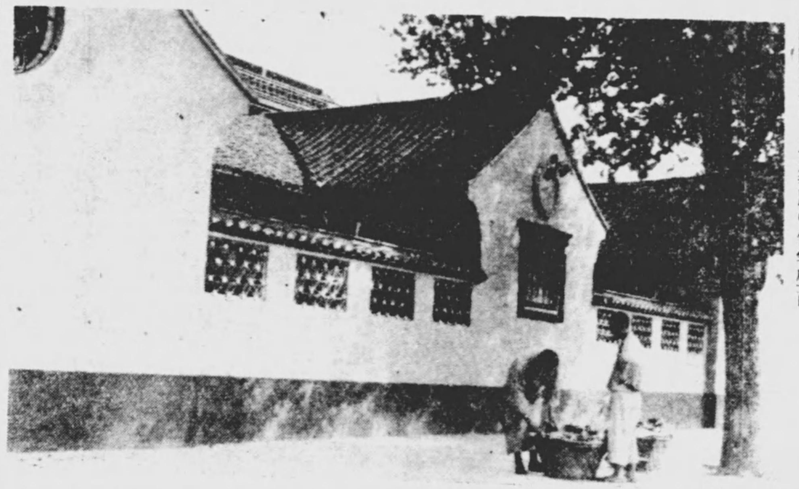
筈がない。排日等の遺憾であることなど持ち出して見ても、そんな事は何處の世界に行はれてゐるかと云つた返事で、張り合ひのない位である。尖端を切る都會地の青年の持つてゐる考へとはまる切り天地を異にした氣持であるのであつて、これが支那の内地の本當の姿であり、煽てや宣傳の圈内から全然別に存在してゐる悠久な世界であると思はれる。上海から二日もかゝらないこの江蘇の田舍農村の田夫と語り合ひ、こゝにその情味、雰圍氣を嚙みしめて見ると、日本で今日、新聞に書き立て大活字で神經を尖らせてゐる樣な問題は餘りにも正直過ぎた、又氣を廻はし過ぎた感じ方ではないかと云ふ事を深く感じさせられるのである。これは獨り南支那の人々許りでなく、奥地に進めば進む程その感じは甚だしくなる。湖南の田舍では、日淸戰爭のあつた事すら知らず、地方の敎科書には日本が連戰連敗したとの記事がそのまゝ信ぜられて居ると云つた有樣である。又支那歷史の中には、元時代蒙古の軍が多多羅濱邊に來て大敗をしたことなど殆んど文字にもされて居らないのである。日本でこそ北條時宗、膽、甕の如しなどと歷史に見えてゐるけれども、支那では問題にすらしてゐない。

支那の農村生活は、國際問題などに觸れる氣持のあらう筈はなく、たゞその田園生活の圓滿と稅金の尠きことを希ふの外何物もなく、日本で農村救濟だの、自力更生だの、事々しく宣傳强調してゐる樣なことは支那の方では見られず、支那は何處迄も農村自治の自給自足、むしろ農村が大衆を擁して地方地方の都城を養つてやつてゐる位な大きな氣持でゐることが解る。（別段日本に對してどうの、日本人の個人をどういぢめ附けようなどいふ氣持は殆ど自分には感じられない位である。

七、支那の都城と山間僻地

二十八、都住ひの内容

支那の都城の古い歷史を見るに都會には城がある。舊來の四百餘州はみな縣城を有するを原則としてゐる。從つてこれ迄縣廳の所在地として知られたところは何れも城壁を以て圍まれてゐる。尤も四川の巴東ばかりは天然の要害を背景にしてゐる峽中の山城であるからといふので特にここは例外とみなされてゐる。一般支那各地に見る都城はすべて市民の生命財産を保護する目的から必ずその城壁を以て圍まれるといふ設計の上になつてゐる。その平面圖は寧波の如く、圓形をなせるものがあり、北平城の如く方形をなせるものもある。又その周圍は之に濠又は運河を繞らしてゐるのもある。その城壁には東西南北の四方に城門が有り、更に之にまた便門と稱して、その城門の外側に翼狀をなした別の小門を備へてゐるものがある。こは外敵の直接城門に攻め入ることを妨げんとする防衞上の目的から出た築城法の下に出來てゐるものであつて、北平の如き大都會には之が設けられてゐる。北平の城門には多く之がついてゐるが、例へばその西北隅のシーチメン（西直門）あたりにしても、その



城内上流家庭の住宅壁面

代表的な構造が見られる。

支那都城の城壁は、必要に應じ、又外壁と稱する二重の城壁を有してゐることがあり、内外夫々に城門が備へられてゐる。城門の構造は、望樓を有するを原則とし、高樓萬里の外を見張るやうに出來てゐて、内部に鐘や太鼓の用意してゐるのもある。城壁の高さは都會の面積、規模に正比例するのが普通のやうであるが、大抵三四間から七八間ぐらゐの高さを有し、北平城の如きは五十尺にも達してゐる所がある。城壁の上に少なくとも四五間或はそれ以上の廣さを有し、歩行の出來るやう平坦に造られてゐるが、望樓のあるあたりには特に内部から斜めに石段のトンネルを通じその昇降に便じてゐる。城壁の外に面した側面には、夫々女墻と稱して長方列齒凹凸形の設備が出來てゐて、之に弓矢又は鐵砲の射撃に便ずる眼孔が穿たれてゐる。全體の構造は、大型の煉瓦で以て築き上げられてゐる。煉瓦の大なるものは長さ二尺にあまり、

土燒きで灰色を帶びたものが多い。城壁の中味としては、石塊、煉瓦屑、土塊などが詰められてゐる。大都城になつては、四方に城門のある外に、その各隅に持つて行つて、角樓と稱する小形の望樓が設けられてゐる。先づかう云つた造りの城壁が、支那四百餘州の都城につきものとしてあり、これで大體の概念があらはされたものと見られる。

南北支那の各地には、國亡びて山河有り、と云つた物淋しい光景のうかゞはれる處もあり、昔し六朝の頃、晋の陶淵明が守たりし長江江邊の彭澤縣といへる縣城の俤は、今も九江の近くで山の中腹にそのまゝ殘つてゐるが、その城壁の構へは小やかなるものである。又四川三峽を出た奉節縣のかみ手には、唐の時代の俤を偲ばせてゐる白帝城の城壁の名殘りが山腹に指さゝれてゐる。今日普通に云つてゐる白帝城の丘陵よりか、更にかみ手にあたり、城壁と云ふも名ばかりで、その内には唯荒廢した平地の殘されてゐる處があるので何物も外に見あたらない。この廢墟なす城壁も、またその規模は極めて小さい。それ故、昔の田舍の都城を物語る城壁といふは先づ今日見渡したところ、大仕掛けのものは多くないやうである。日本の城は、大抵天守閣を中心に、市街地の中央に設けられ、城下の民家が、その都城を取り巻き、住民自身はその城の防衞に身を曝らしてゐる形である。が、支那の都城といふのはすべて之とは反對で城壁の中に市民が生業に安んぜられるやうに出來てゐる。

都城の門は鐵の扉で、城内城外の出入交通に便ずるため平生開き放しにし、門衞に武裝した兵隊

が數名之を護つてゐるのをおきまりとする。けれども一旦動亂にでもなつて、時局急を告ぐるの時は時間を夕刻六點鐘なら六點鐘と限り、鐵門固く鎖して容易に開かれない。どうかすると最も危險な非常時に際會し戒嚴令でも布いた時なんかは、丸きり鐵門を閉ぢてしまつて、絶對に開かないと云ふこともある。それ故今日の時代にあつても動亂期に際して、その戰鬪行爲が長期に亙る時分には、全然、城内に立籠る軍隊や、市民の糧道が絶たれ、饑餓に瀕せんとした實例もあり、先頃武漢の兵亂の際には、飛行機を飛ばしてビラを撒き、救ひを外に求めた事すらあり、敵軍との交渉が成立をしてやつと日を限り、時間を定め戰鬪に關係なき女子供老人たちを限り城外心當りへ避難せしめたと云つた事もあつた。最近、都城の交通文化の發達と共に、かう云つた城城はあつて邪魔にこそなれ、役に立たぬ。むしろ取り毀すに若かずとの見地から、既に上海の舊都城などは城壁の取り拂ひが決行せられ、此處に民國路と銘を打つたあの通り立派なアスファルトの國際道路が作られ、内外人のドライヴ・ウエイーとなつてゐるものがある。又昨今、寧波、四明城の如き、その城壁を取り拂ひ、南門外奉化行きの自働車道のあたりまで幅の廣い新道が作られてゐると云つた如きもその一例である。文化の寄せ來る最近の支那都城奏は、年一年と舊態を破壞し、一にも交通二にも交通と云つた風である。一説には國都南京の城壁（日本里數で九里半もある）が取り拂はれんとするの危機に瀕した事すらあつた。が、こは某外國顧問技師の忠言で、將來之に電車を通じ得る計畫を豫想し、やつと取り毀しの運命だけは

免れる事になつたとのことである。時代の新しい動きに心を奪はるゝことなどなく、幾千年の歴史ある舊都城の美觀は、支那民族の榮え行く限り、民族精神の消滅しない限り、どこまでも之には國家的に修理を加へ保存せらるべきものではないかと思ふ。

支那の城壁は三千年、五千年の古代文化を物語る殷の時代の、龜甲占ひ文字の象形にも既に明かに描かれてあり、城壁の周圍に加ふるに四方の望樓を以てしてゐる殷の時代の、龜甲占ひ文字の象形にも既に明かに字の原始字形を見ると之にその姿があらはれてゐる。されば城壁の歴史沿革は支那民族生活の當初からしてその集團的生活を營んで行く爲、よほどの重要性を帶びてゐたものとされてゐた事が解る。星移り年變るにつれ、主都や各地の小都城も代り、或は洛陽に又長安にといつた風に時代と共に淋れ行く處もあるが、大體東寄りの海岸に近い方面の都城は、人口が增加するのみである。中にはその一定の限られた都城の中に住み切れなくなつてゐるのもあるが、程近にその道幅を狹め、住宅地に寸地でも繰り入れる樣にと腐心され、役所、王者の住居でない限り庭園の地坪すらも餘り取らせない位にしてゐたのであるが、そのやうにしてゐてすら、その城内の面積だけでは中々收容し切れず、止むなく城門外に押し出されることになつてゐる。そして城外に住宅地を求め、此處に延長地帶としての新市街を造らざるを得なくなつた都會が尠くない。之を普通商埠地と稱へ、城内と相對立して支那街を形成してゐる。城内は舊式であるに反し、商埠地の方は新式に、街は廣く、路面はアスファルト

で明るく朗らかに作ると云つた風である。山東濟南の商埠地の如きは、その最も明瞭なもの〳〵一つである。商埠地の生れ出るまでの徑路順序はかくの如くしてその城内の人口の增す關係にあることが主であるが、尙一つには所設された鐵路の驛の所在地が又之と深い關係を有し、驛前から城門に至る間の通りを中軸として、之に或は平行に又直角の碁盤目の地割りが設定せられる。その住宅よりも、先づ以て道路の設定が出來るといふことのために、商埠地の外觀は多く近代式の整然たる體裁をなしてゐる。

城内生活は、その何れも切りつめられた地域内に狹く住宅地を求めてゐるので、中流の家庭あたりにしても、中庭を取ることすら容易でなく纔かに一ユワンヅ(院子)に二三の植込みをして金魚鉢、鉢植などを置いて樂しむくらゐがせめてもの處である。その池あり、橋あり、築山あり、と云つた庭園らしき庭園を持つことは民間の者では容易なことではないといふのが原則である。其れ故大都市の目拔の商業地域では、單に店をその位置に構へる丈にしておきそこに男の寄り合ひ世帶をなし、女子供といふ家族たちは田舍の鄕里に置くと云つたのが普通である。又城内の會館邊りから日通ひで通つて來る者もあり、用意のよき紳商達であると更にまた住宅内の一隅、地下に穴倉を造つたり、小地下室を設けたりなどして、之に財寶を人知れず秘藏してゐるといつたのもある。其の邊の秘密、暗黑面に屬した方面の裝置、からくりに至つては、支那城内は一種特別のグロ百パーセントの處を藏してゐると云つても差支ないのである。

湖北武昌に見る城門文昌門の妄趣

二十九、城門の警備

支那都城の門扉には、平素、事のない時であつても、劍突き鐵砲の護衞兵のゐる後方に、高く手札又は相判の人物寫眞が五枚八枚と掲げられてゐる。これは云ふまでもなく注意人物でその人相、背丈、鄕里、姓名、年齡、特徵まで說明が加へられてゐるのもある。その他に兵隊は兵隊でポケツトに數葉の手札寫眞を忍ばせてゐる。多くは懸賞附の札つきで、逮捕條令の中に見えてゐた名前の者が多い。うまくこゝで取つちめて生首を持つて行けば二萬金、身柄をその儘持つて行けば、一萬五千金等と云つた耳寄りの人物なんかもある。うまく行けば、かうして立ちん坊同然のことなどして居なくとも、ふところ手

で樂に食へると戯談を云ひながらそつと一枚取り出して見せて呉れたりすることもある。巻煙草一本愛嬌に呉れてやつたり、マッチの火でも借してやつたりすると、人通りの少ない城門あたりでは可なり珍らしい話の特だねを提供して呉れるといふ物の解つた門衛などもゐる。或はキャラメル一つで其に寫眞のカメラに這入つてくれたりするやさしいのも居る。併し城門一重で、火蓋が切られるの、切られないの、境めに立つ門衛の事でもあるから、平常は見たところなか〳〵苦い顔をしてゐる。鵜の目、鷹の目で自動車の出入を調べ、一々鑑札の文字を見て、城門外をドライヴする認可を得てゐない運轉手でもつかまへると、之から通行税の五十錢、一圓といふを捲き上げてゐるのもある。又出てゆく荷物擔ぎの縛つた綱を解かせ、中に手を突込んではこま〳〵と調べてゐるのもあつたり、又這入つて來る旅行者を誰何し、鞄の中の書類など一々見て、ソヴイエット●ロシアに關係はないかなど字も讀めない癖にひねくつて見たりするのもゐる。

かう云つた城門警備振りのからくりや雰圍氣は、小説以上の探偵氣分で暗夜、馬車で這入るときなど毛裏の外套の襟を立て、軍帽を目深かに眼を光らせ、カンテラの明りも暗く、じろ〳〵睨みつけて見入る時の様子と云つたらない。劍の光は冷たく全く慣れぬ人は膽玉を潰すのである。これが實際の支那城門の朝夕に見る警備振りなのである。山東の田舍、臨城あたりでは例の臨城事件以來、城外、驛頭に見る目も物凄い、三尺の青龍刀をかざし、その抜き身を兵隊がそれ〳〵背に一本、右手に一本とひらめかし、都合六人で以て非常警戒をなしつゝ、プラットフォームをあちこちと行つたり來たりしてゐる。その光景は又となない一段のグロ氣分を唆つて自分の體驗した時見た儘の實話である。城門、驛頭の警戒振りは、ひとり非常時ばかりでなくとも、支那では常に見るところである。

法律のあつてない國であるから、その時の當局者、その時の大勢で以て如何やうにとも秩序の維持と、警戒振りとが誇張されて行く。支那の人々の氣持ちになつて見ればこれ位の事は當たり前のことであるかも知れぬ。普通の汽車の中にしたところで、切符改めの車掌の後には、平常でも、モーゼルのピストル、彈丸帶姿の武裝兵が三四名も堂々と列車内へ入つて來ることは珍らしくない。車中であれ、市中であれ、城門であれ、驛頭であれ、これは支那の國柄としては當然の事である。人民側も別に之を恐ろしがつてゐるわけでもなく、例の煙草一本で以て、ピストルを貸して見せて呉れと云へば喜んで煙をふかし、ふかし、見せても呉れるのである。どうかすると、ネヂを外し、頼みもしないのに面白げに一々分解までして、この通りですよなどゝ、説明して呉れる處など全く罪はなく、さながら十年の知己の如くである。だからピストル恐れるにも及ばず、青龍刀にドキッとするにも及ばず、兇器は兇器、氣分は氣分といふ風でゐて少しも差しつかへないのである。

支那都城に立籠るヤーメン（衙門）（役所の事）の役人達は、文明國流儀の法律を楯にとつた氣分で

るやうな者は少く、一種の支那式のなごやかな氣持を漲らせてゐる。固より今では、中央黨部に對する支黨部員としての役人振りを發揮してゐるものもあり、空に、門に、青天白日旗を掲げ、公文書を掲示板に布告し、又國民黨の宣傳文などを壁にべた〳〵貼付けたりしてゐる。その組織ある南京政府の統制治下に置かれてあるわけであるから、その治績の工合も從來の行政振りに比べて餘程變つて來た。若い役人達も割りに時間正しく、新興氣分に燃え、隣國の日本語を操つたり、人にアイウエオ●カキクケコを教へたり、その邊の時代精神は餘程理解されて來た。時には、餘りに法律に、拘泥し過ぎてゐるかと思はれるくらゐ、足並みを揃へて、國の文化は統制から、と云つた標語を胸に藏するが如く進んで來てゐる。

都會地では先年來、舊曆を廢して新曆を强ひて採用せしむることが大方針として行はれて來た。商店街の方の反對のたつたにも拘らず、年々その方針を實現させるべく努力してゐるところも見える。ぶう〳〵云ふ者があつても、自然新曆になじみつゝあるのは、日本のメートル法、キログラム法のそれと餘程よく似たところがある。併し何と云つても拔けないのは元來の支那の役人氣質、舊來永年に亘る風俗習慣である。これは割りに給料の少いのと、附き合ひ交際の張つて行くが爲とで、つい〳〵取らなければ遣り切れなくなるのである。別段それを咎れる方でも、貰ふ方でも、惡い事として考へてはゐない。それが爲めに疑獄の起る不祥事を見るでもなく、その邊は誠にしやあ〳〵したものである。

又それがなかつたならば、役人は働く氣にもならず、軍隊は動かせず、政府筋の車の運轉も油が切れる譯になるのである。こゝいらになると、何と云つても、從來の不文律の習慣の力の方が如何に大であるかを思はせる。支那街を動かしてゐる表面の統制力は何と云つても公安局の役人であり又それ〳〵の市黨部の人々でもあらうが、それ等の裏面に動いてゐる運轉の力がいづこにあるかと云ふ事を見るに、この舊慣の運用そのことにその本當の力があり、又社會的の力があることを認めなくてはならぬのである。

都會生活の尖端を切る學生青年達は、從來やゝもすれば、時局問題に熱狂し、五町十町に亙る示威運動の行列を作り、旗竿堂々標語を掲げ、歌を合唱して、練つて歩いたものである。ところが、近來は公安局の目が光つて、學生の政治運動、時局騒ぎは成るべく穩かにさせるやうにといふことになつて來た。併し尙時局に當て込んだ團體を組織し、會名を掲げ、紙に、布に、赤や青の色を使つた諷刺畫を畫き、大道高く掲げ、又街に演説し、路上行人の衆目に曝らして喝采を博し喜ぶといつた者が尠くない。本來から云つた社會運動に興味を持つ傾向を有してゐる都會青年の中には立派に之を職業化してゐる者があり、ブローカーを働き、相當の收益を擧げて、花柳の巷にまで出入し、淪落の果て後悔してゐる者すらもあるらしい。

三十、都城に見る公安局

都城では、近來公安局の取締りが相當に效果を示して來て、地方によつては爆竹の風習を禁じ、阿片を固く取締り、又麻雀その他の遊びを法律で以て禁止するといつた處もあるやうである。併し爆竹は爆彈の音に似かよつてゐるため、それに胡麻化して、惡戲をしたり、或はほん物を投げたりする者もあり、物騒な世相を一段と騒がせることになる爲めでもあると察せられる。けれ共、舊來の魔除けの意味に於てのこの音をさせる美風は、花嫁の輿入れ、名士の歡迎、國家の吉慶などの大事なときに、之を抜きにしてしまつては張り合ひも糞もない。又阿片の都會生活に禁ぜられることは、市の體面上、又政府の國家的面子の上から、之が絶對禁止をあせることは當然のことであらう。實云ふと、こは何と云つても、云はないよりか、云つた方がよいと云ふ位のものであつて、到底止まるべき性質のものではない。都會地の旅館、花柳の

都城をピストルにて警備せる南支の兵隊

巷、富豪の後房、市内の横町あたりでも之を見ない所は殆どない。併し之を禁ずる事にして置いてその罰金を徴收して行く方法をとる事は、其の筋のつけ目であると解釋せられるのである。次には賭博のことであるが、麻雀は賭博でなく、一種の社交の遊びであるとして、輕く見てゐる支那世相にあつては、之を法律的に八釜しく云ふべき筋合のものでもない。又支那の夜の遊び、晝の社交、各個人の經濟生活の享樂、何れの方面から見てもこは到底制止出來ないものだと斷じてよい。南京で之を禁ずれば、汽車に乘つて、上海に出掛け、上海の租界で連宵之に淫するものが出來るであらう。それ故かう云つた方面の趣味娯樂に屬するものは之を撲滅することは害があつても益はない。又この邊に支那の都會生活の生命が宿つてゐるのだと、かやうに支那の人は心から思ひ込んでゐる。

文明國式の法律萬能の頭で以て、支那の都城生活を批判する事は難かしい。支那は支那としての行き方があり、少數の、國際的地位に思ひを寄せてゐる者だけが、法律的に都會の集團生活を體裁よく向上させやうとしてゐるのである。その努力せるところは多とすべきも、前途は頗る遼遠たるものである。先づ漸を追ふてぼつ〳〵やるうちに、時が來ればどうにかなり、解決して呉れる時代も來るであらう。

支那現代の都城のうちには、奥地の秘境、四川の重慶あたりですら、長江を距てゝ對岸に、そのはみ出された市民を住まはせ、今では宛ら、城外の感じを味はゝしめ、頻々渡船が長江の激流を往來してゐるのを見る。その他、南北何れの都城も多くは擴張に擴張を要求して來てゐる。別けても、世界の交通路の衝に當つてゐるあの長江の江口近くにある上海は、ワンプ（黄浦）の流れを挟んで對岸、ブートン（浦東）の地域を取り入れ、宛然たる東洋隨一の國際大都市を作るに至つた。今や上海は老北門、新北門、小東門、高昌廟などを取り入れた舊城内は、ほんの南寄りの一支那街となり、北の方ザポ（閘北）に至る間、また東の方ヤンジッポ（楊樹浦）の果てから、西の方、靜安寺路の先の方までを見渡して見ると、東西も南北も、共に東洋一の大都市の面積を有し、一旦その戰時狀態になるといふと、その全人口は六百五十萬からを算すると云はれてゐる。こは周圍の避難民が、支那の法律によらない外國人の庇護の下に、生命財産を守つてもらはうと、八方から避難し來たり、二階に、三階に、四階に、と鮨詰めの狀態になるがためなのである。

上海は平素とても人口三百餘萬を抱有し、人種は四十七八ヶ國と云ふ複雜多樣を極めた住民を、打つて

上海共同租界ガーデンブリッヂの歩道を去來する日支人

一九となした近代式の文明都市である。そしてその租界は行政上共同租界とフランス租界の二つに大別せられ、共同租界は英日米の市參事會委員より成るミユニシバル・カウンシル（工部局）が之を統轄し、警察、土木、衞生、敎育などの各般の行政に當つてゐる。日本人は約三萬と稱せられ、在留五十餘年に達する老上海の顔振れも見られる。

上海はその東洋に於ける近代都市の代表としての面目を遺憾なく發揮し、日抜きのダマロ（大馬路）二馬路、三馬路、四馬路、五馬路を中心として、年が年中不夜城の觀を呈してゐる。市民のうちで、支那側の有力な商人は、寧波及び廣東の出身者が多く、由來浙江財閥、及び廣東財閥の二大勢力を形造つてゐる。上海を地盤に政治的活動をなす者は、これ等何れかの財閥を背景に持たなければ根強い仕事は出來ないとされてゐる。殊に最近は浙江閥の天下であるが、又廣東閥は南洋の天地で贏ち得た資金を上海に注ぎ込み、土地の買收、百貨店の經營、商店街の建築、その他、各種の大事業に拔くべからざる勢力を張つて來てゐる。この點に於て英國や日本の資本も少なからず這入つて來てはゐるが、支那二大財閥の將來は益々注目に値するものがある。日本に對する外交關係の雲行や、また日支、事を構へる時のバロメーターも常にこの舞臺面、上海にある。上海に於ける在留日本人は、その東京大阪のみにゐて支那を見てゐないものの想像し得られない痛切又深刻なる感じを以て常に之が實際の第一線に當つてゐる。否全く、在留民自ら朝夕第一線に身を曝らし、孤軍奮闘、國家を背後に危險を

冒し、犠牲的奮闘努力を續けてゐる志士もかなり多い。この點に於ては北平、天津、漢口、重慶、廣東邊りにゐる日本人の苦しみに負けぬ苦勞があることを自分ながら痛感させられる。日本にゐる日本人がやゝもすれば滿洲方面をのみ見、之に眼が注がれ、中部支那の方はやゝもすると、二の次に置かれてゐるかの傾きあるは、一方の生命線であると同時に、上海が亦經濟的表玄關の意味に於ての心臟であるわけであるから、此の方面にも今一段の注意を喚起せしめんことを衷心希つてやまないのである。

日本人で支那都城に關心を持つ者は、先づ以て上海に誰れしも眼目を置くのであるが、全支那の都城の中で、上海ぐらゐ又世相の複雜であり、またその裏面にギャング、秘密結社、その他の暗黑面の多く集まつてゐる所はない。或る日ガーデン・ブリッヂを渡つて、城内老北門から湖心亭の方へと行く間に途中二ヶ所も、殺人の悲劇を見た。一つは大馬路河南路の角であつて、自動車から引き摺り出されてゐる死人を見、一つは倉庫町のフランス・タウンのはづれの處で、苦力體の男が、ひどく鼻血を出した儘、石段に凭れて冷くなつてゐるのを見たのであつた。二三の行人はこゝに立ち停り、之に視線を注いでゐたが、たいして問題にもしてゐないらしかつた。又話は別だがかう云ふこともあつた。或る日ギャング團と運轉手がグルになつて一貴婦人を夜會から、主人の急病を名として呼び出し、其の儘郊外へと行方をくらまし、そのため當局の役人は監督不行屆の名で馘首になり、貴婦人は巨萬の

身代金を出して、やつと取り返す事が出來たと云ふ蔣介石についての變な風説もあり、之が一時新聞差止記事となつてゐたため、却つて市中にパッと擴がつたこともある。

かう云つた暗黑面のグロ事件の頻々ある國際都市としての上海の街は、自分の體驗した範圍内で、支那各省各地中こゝぐらゐ不安なところはないと見てもよい。殊に城内セロプ（十六舖）の碼頭と來たら一等人氣の惡い船着場で、迂かり手荷物を持つて上陸でもしてゐると、叩き落されると云つたくらゐ物凄い地點である。上海に數十年とゐる在留日本人でも、こゝに來ると、餘程腹を据ゑて歩かなければ、この界隈で裸にされることが多いと云つてゐる。肩摩轂擊、車馬織るが如しといはるゝ所で、あの船の發着時刻には立錐の地もないほどの蟬噪蛙鳴の巷となる。かう云つた上海の物凄い方面のことを描き出すとすれば際限なくなるが、法律の緩やかなフランス・タウンには、殊に國際問題を惹き起し易い、入り組んだ結社、亡命客、秘密探偵などグロとエロの限りを盡したものが包含されてゐる。實に上海の雰圍氣は、到底日本あたりで想像し得られないほどのものが多い。日本在留民のかたまつてゐるホンキュ（虹口）方面、別けても北四川路界隈の裏手の路次の奥、その又奥であるとか、ワンパンヂャオ（横濱橋）の後ろ手の迷宮裏に踏み入ると、行き詰まつたやうで奥に又横町にと、抜け路がいくらでも次から次へと連絡して出來てゐて、一度こゝに這入れば案内者なしでは到底出て來れないと云つた式の地獄街の路次がある。又日本人の領事館に登録されてゐない流浪した手合で、か

う云つた迷宮の奥に、支那人のうちの二階家を部屋借りなどし、十一月の秋の末つかた、まだ手拭浴衣を着て毛脛を出してゐる連中もゐるやうである。一流どころの銀行會社、乃至は領事館方面のターバン（大班）連中の諸君の目に留まらないでゐるドン底の大和民族がかうした穢い所に、お粥を啜りながら支那生活をしてゐる實狀なんかも見られる。上海で王様の如く、又女王の如く、今を盛りと時めけるものも一方にあるかと見ると、半面にこの暗黒部落を見る。偉い人のうちではその毎日虹口の市場に、野菜の買ひ出しに行くにも、平氣でガソリンをたき、よい乘り心地で飛ばして行かれる身分の者もゐる。實に上海居留民の內容ばかりは樣々である。

上海と打つて變つて違ふのは、田舍の都城である。田舍の都城に這入つて見ると、土地の不案內なため、多少の不便があり、落附かぬ氣持のして來る所も時にはないでもないが、しかしまさかに、上海のやうなギャング張りの巢窟、或はエロ百パーセントの極致、又金を中心の大きな渦卷、各國陸戰隊の動き、サーチ・ライトの閃めき、などといふかう云つた方面の强い刺激、又その方面の恐ろしい動きと云ふ者は外のところでは、更に見出されない。南京にしても、その新興氣分に燃えてゐる所はかなりあるが、上海のやうな複雜した世相は此には見出されない。流石に南京都城は、古の南朝四百八十寺、多少の樓臺、煙雨の中、と云つた千里の鶯の啼く萬紫千紅の詩景を優しく感じさせてゐるところなのである。

南京城外ミン（明）の孝陵墓道に見る石象

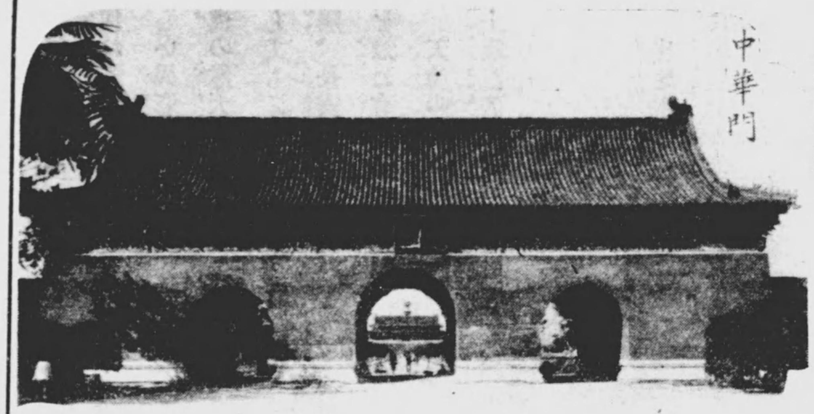
三十二、南京と北京

南京の主都は最近の勃興振りで、人口五十餘萬に達し、その面目日に月に新たに、流石に紫金山中山陵を背景にしてゐる丈に、國民三民主義の氣分が十二分に漲つてゐる。民族主義、民權主義、民生主義の三者を標榜し、國民政府要路の巨頭から青年學生達に至るまで、革命の功、尙未だ成らず、同志仍て須らく努力すべし、との總理の遺訓を守つてやつてゐる。青天白日旗は、空に飜り、司法院內に催される每週月曜日の大儀は、周代の古樂合奏裡に孫總理の遺訓を讀み上げ、足並を揃へて政府要路者打ち揃ひ、革命の大業完成を日禮の裡に誓つてゐるその樣子と云つたら殊に末賴しくも見える悲壯な歷史的場面である。

又南京世相の半面として模範監獄の一斑を見ると面白いことがある。その經費の節減を期する意味やら色々の意味で、

以てその囚人に外から衣裳を持參せしめたり、食事を差入れさせたりしてゐるところが見える。構内に花壇を造らせ、江南氣分を味はしめ、その鐵門の中に人間味をゆたかに漲らせてゐるところは、日本あたりで見る刑務所とはよほど趣が異つてゐる、がその獄内で印刷製本、指物、表具、裁縫と屋内仕事に從はせてゐる所は、日本のそれと相違はない。併し何となく牢屋らしくなく、大體の空氣がむしろ之に志願しても、入社させて戴き度いといふ心持をそゝれる所が見えてゐる。尙城内で、一時馮玉祥の方寸から禁止されてゐた秦淮の畫舫の遊興も、その盛夏の納涼には、せひ無くてはならぬ市民生活の必要な息抜きのものであつたため、いつしかその禁も解かれ、今は復活せられて賑つてゐる。矢張り其の間の都城生活の人間味は拒まれないものと見える。かう云つた禁制を改廢して、市民生活の必要な娯樂手段をどこまでも遠慮なく取り入れて行くといふ心持は、矢張り支那の役所の融通性に富み、捉はれてゐない所のあることが判るのである。

北の方、河北省には省城として今は格の下げられた、もとの北京今の北平都城がある。清朝三百年の帝都であつただけに、矢張りなんと云つても昔の北京である。支那で桁外れの王城としての完備振りは、とても南京あたりの比でない。その中央、紅壁の中に聳ゆる、黄甍五彩の榱柱美しきは紫禁城であつて、遺憾なく康熙、雍正、乾隆の黄金時代に見る藝術美を發揮してゐる。その禁裏の宮城は、南面し、正陽門（前門）、中華門、午門と這入つて行けば、いとも壯麗なる大和殿、中和殿、保和殿、



北平城チエンメン（前門）内に聳ゆる中華門の壯觀

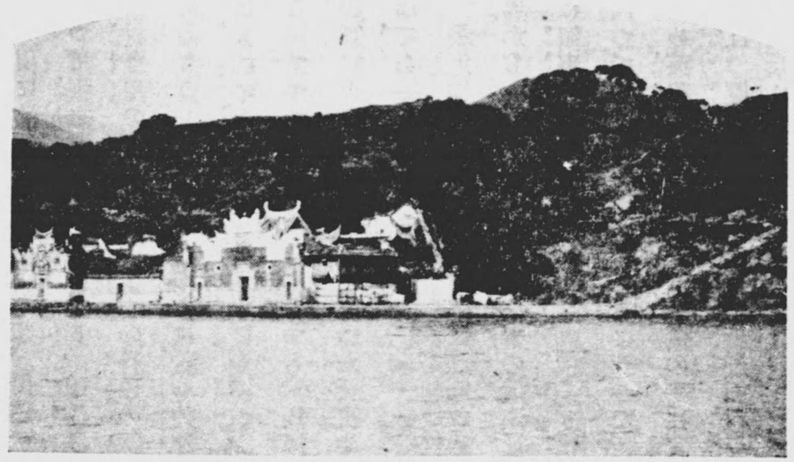
武英殿、文華殿などの殿堂が整然として大規模に建立せられ、雪を欺く白色大理石の玉階、阼階、句欄、辟雍の池は今尙帝政時代の榮華の俤を偲ばせてゐる。更に後方の宮室には、乾清宮を始め、金殿玉樓が並んでゐる。皇帝、皇后、皇族、女官達の正殿、寢室、禮堂、時計の間、控室、書齋から前庭、後庭の設計されてあり、今はそれが故宮博物院に當てられてゐる。更に此の世の榮華の限りを盡したもののみが、みつしりと路を距てゝ景山の方を仰ぎ見るを得べく、又王者の庭としては、ペーハイ（北海）、中海、南海、がある。北海は蓮池、五龍亭、九龍壁などの大庭があり、今は料金を取つて一般人のために公開されてゐる。武英殿、文華殿に寶藏せられ、千古の古銅器、玉器、書畫帝王の衣裳、調度などの寶物は陳列して研究者に觀覽せしめてゐる。實に稀有の珍寶である。幾度かその軍費財政難から當局が、之を米人に借款のかたに提供せんとするなど云ふ噂が立てられてゐる。王者の建築美としては尙、南に

天壇、祈年殿、寰丘、があり、西直門外に植物園がある。これ等は何れも黄瓦その他碧綠の色彩美に富んだ屋根を大空に輝かし、見るからに民家の黒屋根とはちがひ美しい異彩を放つてゐる、流石に王城の跡だけあつて、支那四百餘州、何れの處にも見出されない、規模の偉大さと、大陸的の豪華振りとを發揮してゐる。世界の大都市中、レコード破りの藝術都市と稱してもこは溢美の言ではあるまい。萬里の長城を背景に持つ大支那の舊都としては南京よりも、洛陽、長安よりも、何れよりもこは桁外れの大美都である。その間云ふに云はれぬ奥ゆかしさと落著きを兼ね有した勝地として、北平の都城は永遠に保存さるべき東亞の寶都であると云へる。

天津の都城は、舊城内と租界とを有し、白河を挾んで北支一帯の咽喉を扼してゐるため、常に政治上動亂の影響を受ける事が他の地方よりも多い。

三十三、武漢と福州廣東

奥地の方には山西の太原、陝西の西安、甘肅の蘭州がある。太原はあの乾燥地帶の盆地、高原の中に城壁を聳やかし、附近の穴居生活を營む太古の民と相接してゐるところは、現代支那に珍らしい對象となつてゐる。東の方、青島の街は、世人周知の如く、夙にリヒト・ホーフエンの北支大調査に本づき、獨逸人の開く所、その文化施設の完成は、之を引繼いだ日本人の手で大半なされたのであつた



福州閩江の水郷に見る寺廟の美觀

が今はすべて民國に返還され、特別市區として普通の都城から區別されてゐる。昔の漁村であつた處であるから無論之に城壁のある筈はなく、最初造られたイルチス、モルトケなどの砲臺跡も其の儘戰跡として今日保存されてゐる。日本人の居留民は二萬を超え、日支航路の往復も頻繁であり、東亞の瑞西と云はれてゐる。山青く海清く、山紫水明の別天地であつて、日支兩國人にとり、東海隨一の落着きのある文化都市として、此に餘生を送らんが爲め、隱居所を求むる者が多い。併し將來山東河南の奥地開發のだんだん進むにつれて之が經濟市場としての重要性を增すことは火を見るよりも明かである。

全支那の中心地點であつて、南北東西、十字路の衝に當つてゐる大事なところは、漢口、武昌、漢陽、の三都城である。支那では之を武漢三鎭と稱へ、政治上、軍事上、經濟上、歷史上あらゆる點から最も重き意味が之に結びつけられてゐ

る。現に清朝の滅びんとして、民國革命の旗揚げの第一聲が叫ばれたのは、正にこの地點であつた。かつて張之洞が、清朝の末葉、兩湖總督をしてゐた時、先づ以て時代を看破し、勸學篇を奉つて、人材登用の實を擧げ、舊來の科擧の試驗の弊を矯め、有爲の青年を海外に留學せしむべき事を力說したのもこゝである。その事は着々效を奏し、世論は、次第に熱を高めては來たのであつたが、同時に民族的の自覺心から滿洲朝廷を滅し、漢族自ら頭を擡げなければならぬと云ふ輿論が層一層高められるに至つた。そのとき圖らずも、川漢鐵路國有問題から端を發して天下は囂々、遂に滅滿興漢の論が現實にあらはれて來るに至つた。實にこの武漢の天地こそは近代史上に最も重大な意味を齎してゐる所である。

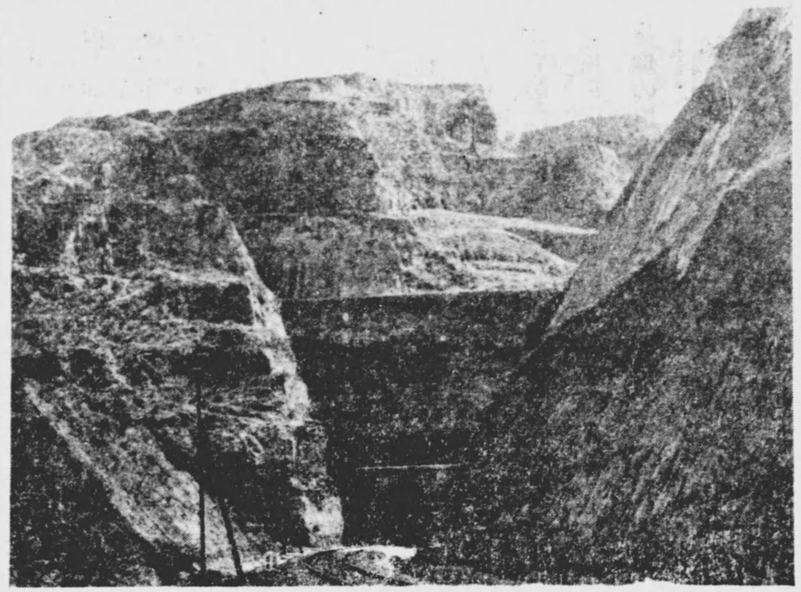
最近では、過去八十年間長江筋に根城を据ゑてゐた英國の勢力が下火となり、その勢力は漢口の租界から驅逐され、國民革命軍の武漢に手を延ばすに至り、間もなく、その青ネクタイの童子軍のために領事館は難なく占領せられ、こゝにユニオン・ジャックの大英國旗は引き下ろされ、青天白日旗が代つて空に高く掲げられるに至つた。英領事は軍艦に逃げたまゝ歸館しないと云つた始末で、それがため英租界は譯もなく支那側の手に奪回されてしまつた。その後數年を出でずして英國は九江、蕪湖、鎭江、厦門、威海衞と丸で所屬の租界租借地を將棋倒しの式に續々支那の手に收められた。今や英國は香港の領地と、上海の共同租界に於ける勢力をのみ辛くも死守しなければならぬと云ふ孤城落月の悲運を味ひつゝあるわけである。印度の聖雄、ガンヂーを思ひ、海峽殖民地の邊りのことを思ふ時、英國の今日の大アジア對策は、支那の國家を超越した民族的自覺の高まりつゝあるに對比して、轉た感慨無量なるものがあると云へる。

右の外尙、長江、三大都市の一つである四川重慶の都城については、既にも述べた如く、又南の方湖南に長沙、江西に南昌、安徽に安慶、浙江に杭州、それから南して、福建に福州、厦門、廣東に廣州、貴州に貴陽、雲南に昆明といふやうに澤山ある。この中特色のあるもの一二をとつて簡單に述べて置く。長沙の都城は、古來政治的に又學術的に兩湖の中心地點であつた爲めに、文化的に目ざましい發達を遂げ、近代にありては、曾國藩、王闓運、王先謙、の如き、又、譚延闓等の學者政客を出し、又、革命の志士、黃興、蔡鍔の如きを出せることは天下周知の事である。その岳麓山下湘水に臨み、瀟湘八景を附近に兼ね有してゐる點のある丈に、畫圖の如き趣を漲らせてゐる。近來幾度か兵亂の災禍に罹り、破壞、又破壞を續け、昔しの面目を失ひ、圖書、名寶、名園の灰燼に歸したものが少なくない。併し、古から、兩湖實らば天下のものは食える、と云はれてゐるくらゐ周圍の沃土は天下切つての珍らしい米倉だと評されてゐる。從つて長沙の都城は、よく雄を天下に誇り得る丈の實力、底力を持つてゐる。

福州は、福建北部閩江を挾んでその位置を占めた省城であつて、城內と南臺とより成り、茶の集

散著しく、市内の外觀は防火壁の設備完備し、又白堊の壁面の黒い屋根の色と參差せる所は誠に美しい眺めを呈してゐる。南方支那でも珍らしき美都と云はれてゐる。岩多く松樹茂り、鼓山、烏石山などの名山巨刹があり、佛寺は日本長崎にゆかりを有するものが多い。又琉球址館があり、溫泉もあり、特色の多き都城として知られてゐる。殊に全支海軍の根據地として、閩江馬尾山下に造船所の設備があり、丁汝昌、薩鎭氷の如き海軍の元勳を輩出せるので一段有名になつてゐる。

廣東は珠江の江口に位置を占め、城内、河南街、沙面の、三區より成り、市區整然、建築高莊、四時半熱帶の雰圍氣を示し、數十尺に達する榕樹は鬱蒼として綠蔭を作つてゐる。荔枝の紅に實れるところは、珠江の黄流の色に相映じ誠に美しい眺めである。由來廣東の省城は千年の昔宋の時代よりしてアラビア其の他と海外貿易を開始し、外人に接觸する機會も多く、從つて全支の尖端を切り、思想文化を常に指導する位置に立つてゐる。最近には革命の總理孫中山を出したやうにし、全民族と國家の進運に貢獻する所が頗る多い。殊に特筆すべきはその福建地方と共にその省民の績々、南洋の天地に進出せることで海外活躍による富を有すること、夥しく、それら財閥の背景を持つてゐること、他省のものの遠く及ぶところでない。又廣東省城には夙に精力劑としての蛇料理、或は三蛇膽酒、海狗酒（膃肭獸より作る酒）ハブカイ酒（蛤蚧、青とかげより作る酒）、等の藥酒鮫齡汁の類を產出すること非常、これ等は不老長壽の靈藥として全支に珍とせられてゐるものである。



河南の片田舍穴居村に續く地層の景觀
洛陽龍門附近を寫す

三十四、山間の穴居村

支那の田舍で長らく暮らして來た者が都會の城壁を見てどう思ふか。こゝに這入つて生活して見たいと考へさうなものだと思ふ者もある。生命財產が高壁の中で護つて貰へると云ふ特權を得るわけであるから、危險に曝された片田舍の生活よりか、どんなによいか、格段の差があるわけだと思ひさうなものである。ところが、田舍に住みなれたものはさうは思はない。そのやうな人爲的な官憲の力によつたり、又城壁を見せつけられたりすることには、たいして關心を持たうとしないのである。成るたけ呑ん氣に自然を樂み、たいした危險の迫ることなどは思つても居らず、たゞ心靜かに田園なり、山間僻地なりに一生を樂しみたいと云ふのが本當の考で、これが又欺らざる告白でもある。

四川三峽の一漁村にゐる七十五歳の李子順と云ふが、嘗て日清汽船の上游船に乗組みとして水先案内を親子もろ共に勤めてゐた。その關係から、同會社の水先の相談會の開かれるとき翁は上海の租界まで下つて來ることになつた。千里の水を下つて來るのだから大變なことである。會議の日迄に集るやうにと云ふ知らせである。すると李翁は大奮發で社命により親子で來ることは來たのであつた。すると、會社側では、芝居を見せたり、スマロ（四馬路）の賑かな所を見物させたり、自動車に乗せたり、歡待至らざるなしと云ふ持てなしであつた。けれども、翁は會議半ばに、四川の山里が戀しくなつて、歸心矢の如くであつた。折角のイルミネーションだの自動車だのいふ、近代文明の渦中に身を入れてゐることに大變な不安を感じてゐた翁は會合がすむなり、わき目もふらず、一路歸つてしまつたといふことである。都會人の考へてゐるネオンサインだの、自働車の音だの、オートバイだの、云ふものは、むしろ殺人的惡魔の感じが翁にはしたものと見える。矢張り山間僻地の大自然、白雲生ずる所の穴居村あたりの方がどんなに氣持にピッタリ來るか解らぬと思つてゐる。誰れにしても恐らく奥地の田夫、樵夫たちはこの李翁と同じ考へを抱いてゐるのであらう。

山間僻地の穴居村を訪ねて見ると、穴の入口に庇をつけたうち、門柱に多少の飾りをつけたうちなどがあり、奥には中廊下を置いて左右に寢部屋を作り、客室を作り、入口に近いところの小室を臺所にあて、天井に穴を開けて明り窓としたりしてゐる。寢臺、机、は土を掘り殘してその形に作り、羊毛を重ね合せた厚い敷物を敷いたりしてゐて、見るからに頑丈な重苦しげな太古式の生活を營んでゐる。門前には雞、豚などが飼はれてゐる。附近の洞穴の中には、老父の棺柩を安置し、供へ物などがしてある。穴居の多くは、南面した山麓を利用し、時には、一段、二段、三段、と層をなし段々と、穴居の入口の横に竝んでゐるところもあると云つた風に、一つの蜂窩式の部落を營んでゐるところもある。こは山西に、河南に、又四川のあたりにとかなり廣い範圍に見出さるゝものであるが、河南地方には又、街道に沿ふて山麓にホテル式の穴居を作つてゐるのもある。その内部には十數臺の馬車を乗り入れることの出來る者もある。左右の客室には相當の設備の出來てゐるものがある。これ等はたいして木材の用ひられてゐる所はなく、乾燥し切つた固い土山、又は砂岩の地質より成る山の斜面が利用されて作られてゐる。時には石炭の山の炭礦を掘り穿ち天井高く住ひ部屋を作つてゐるのもある。之を訪ねて見ると、松の實を浮かせた熱茶を出して呉れて、穴居生活の氣持をゆつくり物語つて呉れたりする老翁もゐる。北平から漢口に向ふ汽車の沿道、黄河の鐵橋を渡つてから、南の方、鄭州郊外の山麓を見ると、こゝには數限りない穴居部落がある。河南の旅行者は之を見て太古そのまゝの原始住民の狀態を想像することが出來る。こはスペインのピレニイス山下に群居する穴居の民と共に現代住居の中に異彩を放つてゐるものだと云へるであらう。

三十五、山中の風俗

支那の山中には、又道士の、岩窟内に仙人生活を營める者が尠くなく、木の實、蕨の鹽漬け、その他深山に得られる苔などを材料に料理して食べてゐる。江西省、廬山の頂に、又山東泰山の頂にかうした道士や仙人がゐる。自分は泰山の道院、玉皇頂で、道士のところに泊めて貰つたことがあるが、その出してくれる料理は、迚も鹽辛くて食べにくかつた。併し或る日の曉天、浴日養雲の四大文字の掲げられた東室から、遙かに東海（東天のこと）に日の出を拜した時の氣持は、日本の富士の頂で旭光を迎へたときの心持と同じく、何とも云へぬ大自然の美に打たれたのであつた。泰山の頂、日觀峰に道士と佇み語り合つてゐると、すぐ二三間の先に三尺大の鷲が、子を連れ、岩頭にとまつて、谷の一方を見詰めてゐるのを見た。道士の話によると、いつもあゝしてこの邊に來て、兎を見つけてゐるのだ、と云つてゐたが間もなく薄紫をなす深い千仞の谷を目ざして、二羽ともに飛び去つて行つた。

南支の深山に仙人生活をして來た山伏の風態

支那は大國丈に、深山幽谷にはかうした道士や猛鳥がゐるのである。又安徽の山中九華山を過ぎ、黄山三十六峰を乘り越え、ユイテイン（漁亭）の山里に出るとき、月夜棧道を踏み、峰から谷へ、谷から峰へと跋渉したことがある。山の頂に高塔の淋しく聳え、月光を浴びて、その色鮮かに、軒に鳴る風鈴の音は清く、何とも云へぬ感じがした。道は羊腸たる小徑でぐる〳〵廻り、いつまで行つても、頭上に、月光に照された塔影の眺められたのは薄氣味の惡い氣持であつた。漁亭の里で友人の知るべの處へ落ちつき、その話をしたところが、あのあたりは常に追剝ぎ泥棒の出る所で、行人がしよつちう惱まされてゐる、何か出て來て、襲つたものはなかつたかと云ふ問を發されたので驚いた。別段事もなく案内者と共に話し話し來ただけであつた。その日の晝過ぎ、峠の茶屋で休んでゐたとき、足許に七つ八つ可愛いらしいヒヨコが戲れてゐて、どれも美しく、或は紅に、或は綠に、又樺に、と云つた風に何とも云へぬ色彩美の變化が見られた。餘りの珍らしさに老婆に標本にしたいが一つ賣つて呉れないかと云つて見た。すると、老婆は笑つて『珍らしくはありません。何處にでも居ますよ。』と云ふ。『イヤまだわきで見たことがない。一體どう云ふわけでかう云ふのが生れたのかね』と立入つて聞いて見た。ところが『色を溶かして、その卵から出た時、足をつまんでづぼりと入れ、染めるだけのことですよ』と云つたので大笑ひをしたことがあつた。更に老婆の云ふには、『赤はうちのだが、青は向ひので、夫々所有主の違ふのを色で以て選り分け、夕方になるとねかせます』。と話してくれてゐる所へ、又澤山又紅いのがそばへ集つて來た。

支那の山間奥地には物珍らしいことのみ多く、随分變つたことが體驗せられる。同じ安徽の山中であつた。かなりな土豪の門前で、かれこれ四尺に餘るほどの大豚の殺したのを、湯を一杯に入れた大桶に持つて行つて、仰向けに渡し置き、三人五人と大の男が集まり、庖丁を手にし、湯をかけかけ毛を柔め、剃取つてゐるのである。やがて足に竹の管を突込み深い息を十分に吹き込み、窄氣枕の如く腹を膨らませ、餘す所なく腹から頭もとへかけ、耳のあたりまで、そつくり毛を剃り取つてゐる。それが濟むと今度は後足を梯子に括りつけ、別の庖丁もて、肛門のところから眞一文字に腹をたち割り、厚い脂肪を開く。そして頸の大動脈をプスと切り、滴る鮮血の眞つかなところを、漏らさず總べて盥に受けて溜める。次で內膜は巧みに切開され、生理學の標本に見る如き五藏六腑のそれぞれを手で引き出して來る。こゝに醫科大學の解剖のそれを見るが如き現場を演じて來るのである。そこへさして邊りの黒い山犬がやつて來て、盥の血を見かけ飲まうとする。飲ませまいとする。熱湯が肋骨の見えたセルロイドやうの美しい體內に注がれるといつた風である。その光景の力强さ、又鮮かさは何とも云はれない山家の氣分を漲らせてゐる。聞けばその翌日とかに、婚禮の披露があるとのことで、その料理の支度に取り掛つてゐる所であつたのだとのことである。

山間に見る金持の家は、第一屋根が高く、又泥棒よけの壁の破風も高い。山は綠に、壁の色は白く、屋根の瓦は黒、打眺めた山家の里の樣子は一種の色彩美に富んでゐる。峻坂の中腹に立てられた石造の安息亭には、近くに碑石が立てられてゐる。山民樵夫共の寄附をした金額が一々その碑陰に刻まれてゐるのは面白い。又山で棧道開鑿の事に力を致した地方の有志、村夫子たちの德を頌め稱へた旌表、バイローウ（牌樓）などの立つてゐる所もある。これには石造があり、又木造のものもある。木造のは紅、碧、青、黄、綠、等の五彩の雲繝模樣が描かれ、深山幽谷を跋涉する人の目を惹いてゐる。

又江南の地で、山下の水流を民船を雇ひ漕がせ行くに、とある石造の眼鏡橋の下を潛らんとする時、忽ち打ちはしやいでゐた乘合の客どもが何を感じたか皆ばつたり默して了ふのである。二人の船頭は二挺艪を漕いで、足の踏ん張る力も一入である。その邊の事情を知らぬ自分は、尙舌り續けてゐると、そばのものから口をマスクさせるやう、手を當て、眼で以て知らせたりなどする。益〻訝に落ちぬ。如何なる理由でさうするか解らない。けれ共はたの人のする通り默つてゐた。橋下を通り過ぎた頃となると、何れも溜め息をついた顏して安心してゐたところ、あの橋は昔しから、ヤーツチヤオ（啞子橋）と云つて、誰れも物を云つてならぬことになつてゐる。ダンマリ橋なのであるといふ。後で物識りに聞いて見た所が、山下あの橋の邊りは流れの急なところで、船頭は一段と腕と脚に撚りをかけ、懸命に漕がなくてはならぬ所である。迂つかり客から面白い話でもしかけられそれに氣が取られたりすると、船は流され岩に當つて難破したり、時折り溺死者を出したりすることがある。だから誰れ云ふともなく、あの橋は昔しからダンマリ橋と云

ふ事になつたのだ云々。

三十六　田舍生活の強み

かう云つた山間、田園、水鄕、の實況は、何れも純朴であつて罪がなく、都人士の生活に思ひもよらぬ語り草が多い。その日常生活の樣子は、程度がかなり低くはあるが、別段何とも思はず、くよくよしない。その田舍町の小やかな手合の集り、自治で總べて賄つてゐる處に這入り、その實際を見てみると、特に田舍生活の特徴としてゐる所が解る。田舍の燒物窯を中心として立つてゐる町だとか、蘭、蓆、莚類を作つてやつてゐる村であるとか、その他宿場馬次ぎ場に當てられてゐるので立つてゐる小さい村といつやうなところでは、五戸を單位として、保甲制度といふを敷き、その組長を保正又は甲正と云つてゐる。こは古く二千年の昔しから行はれてゐる方法で田舍の自治政治の建前であるが、夫々田舍の村落あたりでは徹底的にこ

湖北の水田に耕耘の事に勵める農夫たち

の自治を布き、夜は板に割り竹を當て、カタン、カタンを鳴らすターカンテイ（打更的）（夜廻りのこと）を、時間を定めて廻らせてゐるとか、或は晝は界隈の土木、水利に、或は稅金醵金のことに、相談會を催すとか、實際水も洩らさぬ周到な仕組みに出來てゐるのである。田舍の水村あたりは、概して云ふと、その特に八釜しく、お巡り、警察など居なく共、村民は村民で結構やつて行けるのである。若しや火事を起す事でもあり、類燒を及ぼす場合があつたとしても、成るたけ、合意的に村民相互の間で問題を片附ける。それは類燒を蒙つた家の方のものが、先づ、燒け殘りの石や煉瓦屑を火元の地內へ運び行き、此處に山と積み込む。而して先づ以て夫々家を再建し、商賣を始める。さうした後に、火元のものはその山積みの燒け殘りを船で、又車で、他へと運び行き、後から建築をしてあとで復興につとめる。若し火元に資產があるからと云つて、近所の人の手前も構はず、建築を急いだり、商賣を始めたりしようものなら、他の者が承知せず、之を懲らしめ、制裁を加へなくちや止めぬ。さう云つた點に、村は村として、町內は町內として、頗る解りのよい自治の方法がついてゐるのである。されば江南の片田舍は、一警察を要せず、一役人を要せずして問題は解決するのである。

又河南地方の田舍を見ると、田園生活に、土豪は多く高壁を繞らし、防禦林を作り、又望樓を備へてゐる。宛然一王城の觀を呈し、數からぬ手兵を養つてゐる。こは、前にも述べた如く、國に秩序の維持に當る實力のあるものがなく、あつても片田舍まで及んでゐない。それで止むなく自治の建前か

ら、斯やうに人民自身に用意をしなければならぬのである。所が更に中流以下となつて、小作、水呑み百姓共はどうかといふと、衆を以て互に集まり、團結し、それこそ水も洩らさぬ一種の自衛團の結社を形造つてゐる。これはあちこちにある。こは一つふわけでもあるが、一つには又その地方住民に不當な課稅をせんとする役人などの來たとき、之に對して抵抗して行かうと云ふ考へもあるらしい。かういふ連中は、一種の宗教的信念に基いた極めて強い團結力を夫々有してゐて、いざと云ふ時には、生命を的にして蜂起して來る。その最も有名なものは長い槍を持ち、之に紅の房をつけ、その印としてゐるといふ所から、その紅槍を中心とした團體を呼んで紅槍會と稱してゐる。事を糟へて爭鬪を始むる如き場合には、俗間の信仰の厚い寺廟祠堂から、黃色の神符を下げて貰ひ、之を胸に藏してゐる。この黃符は一種の彈丸除けの護符とも見るべきものであつて、如何なる砲彈、毒矢であつても反れて行つて決して身に當らない、絕對に死ぬる事のない有難いお札だ、と信じ切つてゐるのである。たとひ事實上、彈丸に當たり、そばに倒れてゐる仲間を見たりしたところで、此の者は死んでゐるのではない、必ずや日ならず起き上つて七轉び八起きの末、つまるところ何處迄も素志を貫徹するのだ、と信じてゐるが、一種、自己催眠にかゝつてゐやうにも見える。

斯やうな自治の結社を有するところを始めとして、片田舍には、特色ある集團にそれぞれ侮るべからざる努力が宿つてゐる。それ故、河南を含む中部地方の天地を勢力範圍に收めんとする者は、韓復榘であらうが、元の吳佩孚であらうが、蔣介石であらうが、誰れ人にしても、その地方の民治に關係する以上、先づ何よりも先に、この紅槍會の頭目に渡りをつけなければ仕事は出來ない。殊にその正義と信じた事柄についての信念の堅いことに於ては、容易に之を切り崩すことが出來ない。それ故河南方面の自治の結社には常に中央政府でも惱まされてゐると云はれてゐる。この樣子は、獨り此の邊り許りでなく、支那は全國的に及び、又滿洲方面にしても隨所に之が見出されてゐる。以て如何に地方生活の上に、自治の考が永久に續いて行かうとする民族意識の强く表現されてゐるかゞ窺はれるのである。

「支那の都城生活と山間僻地の生活振りは、支那の世相を見る上の楯の兩面である。その各々にそれぞれ支那らしい氣持が宿つてゐる。日本人の眼には、何れも奇異に觀せられるが衣食住、風俗、習慣、思想、迷信などといつた何れの點から見ても、この方面に立入つた充分の理解を持つて臨まなければ、支那の民族性と社會相は理解されたとは云へない。單なる上海や天津邊りの開港地の面かも租界許りの世相を覗いて來て、それで以て支那の社會相、生活相、民族性の如き大局面を斷定しようとすることは全く針の穴から天を覗くの謗りを免れないものだと云へる。」

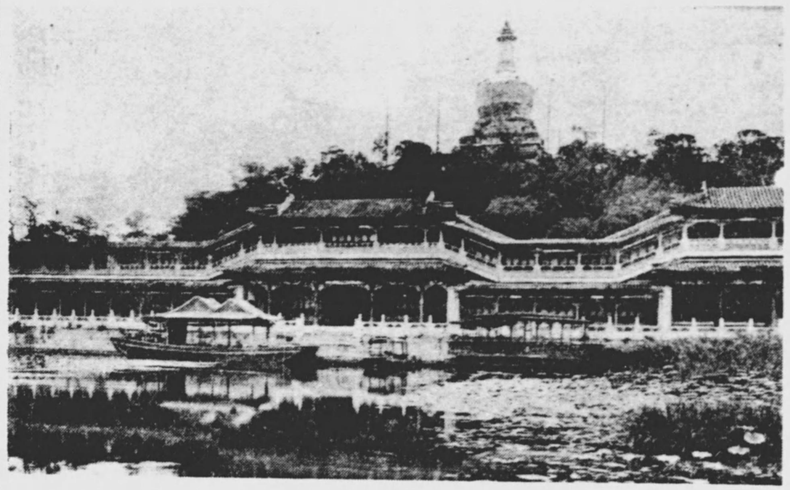
八、支那土豪と細民

三十七、支那の富豪とは

支那の富豪は、實業出身者から現れる場合よりも、政治家、軍閥の方面から出る場合の方が多い。といふのは實業方面はいつもむしろ、その絞りとられる方の立場に置かれ、今では從來の豪農、大地主が軍閥の財的背景と見られてゐた時代が、既に過ぎ、漸次、工業地帶に勢力を張る資本家がその代りの役目をつとめさせられるに至つたのであるから尙いつもその下敷きとせられてゐるのである。若し支那民族中に於て大富豪を數へんとするならば、たしかに支那を去つて、南洋、マレイ、暹羅、ビルマ、佛領印度といつた方向に之を求めなければならない。支那本地にあつては、その財産高を判つきり、明瞭にするわけに行かず、何れの富豪にしても、他から臭ぎつけられないだけの仕掛けを構じてゐる。軍閥政客と雖も、種々の方法によつて、人にさとられぬやう巧みにからくりをしてゐる。今は三民主義の時代となり、舊來の軍閥は表面上、形を潜めた譯になつてはゐるが、しかし昨今の風雲天下の形勢は、尙手腕德望ある領袖、將軍、俊傑の方略、智謀を俟たねば、局面打開は出來ないことに相場が極められてゐる。

支那は政客にしろ、軍人にしろ、又總司令の位置にある者にしろ、或は古の帝王あたりにしろ、すべて一にも二にも金、或る程度の富を作らなければ人心の收攬はむづかしく、少くとも金穴、財的背景を持たねば仕事が出來ぬ。德望の一方面丈では畫餠に等しきものと見られてゐる。支那は民意の國、萬民の心を安んじ、失業者を食へるやうにしてやり、人民の富と幸福を增進してやらなければならぬことになつてゐる。

この意味に於てその爲政者なり、軍人、總司令なりは一方富豪から金の出る道を作り、他方傭兵として應募して來た幾萬幾十萬の若い兵隊どもにばら撒いてやらねばならぬ。國に憲法なく、君の爲めに命を捨つるとの考へのあり得る譯もなく、城を枕に討死する爆彈三勇士の如き固より出るわけがない。歸する所は村のお寺の壁に、ステーショ



北平紫禁城王者の庭を誇るペイハイ(北海)
猗瀾堂の美觀

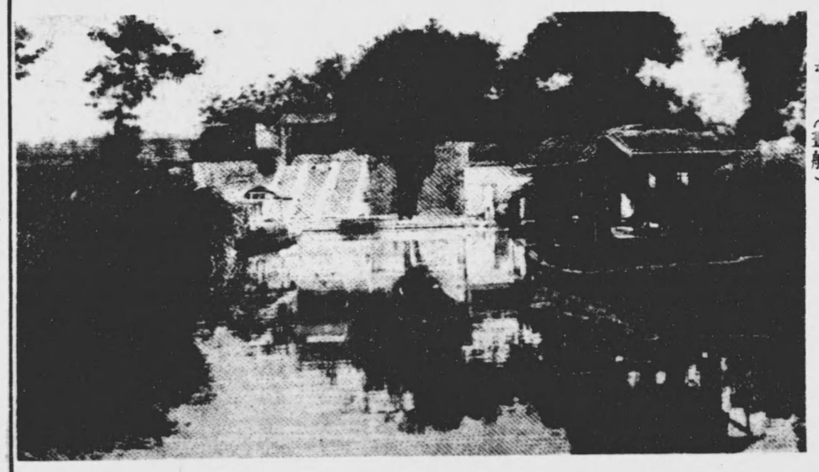
北平城内皇城根、上流家庭境内に見る重門

ンの壁に、又城門の壁に、又役所の掲示場にと、掲げられた傭兵募集の文字をうれしく打眺め、年齢十三歳より四十歳に至る男子、民國人、給料のところは八弗、或は十二弗、などゝ云ふ耳よりの文字に牽かされ、村で着てゐた青衣を脱ぎ捨て、灰色の軍服に着替へたといふに過ぎぬ。そして鐵砲を持たされ、調練をやらされ戰線に出掛けて、貰ふものを貰ふと云ふ丈の考へである。歸する所は、我が師、旅、營の戰闘的行爲のことより も、何時給料を手に渡して呉れるかの點にある。だから軍旅の首腦部は此處に常に思ひを致し、金策に苦心してゐる譯である が、然しそこには底があり、可なりまた桁の大きい取引が別に行はれてゐる所もある。時には十萬の兵を養つてゐると稱し、十二分の配給を受けて居り乍らその實二萬三萬の兵隊しか貯つてゐないといふ事もある。その差額の可なり大きいものを浮かせてゐることがある。下つぱの傭兵達にはその間の消息の知られるわけもない。依らしむべし、知らしむべからず、の古來の

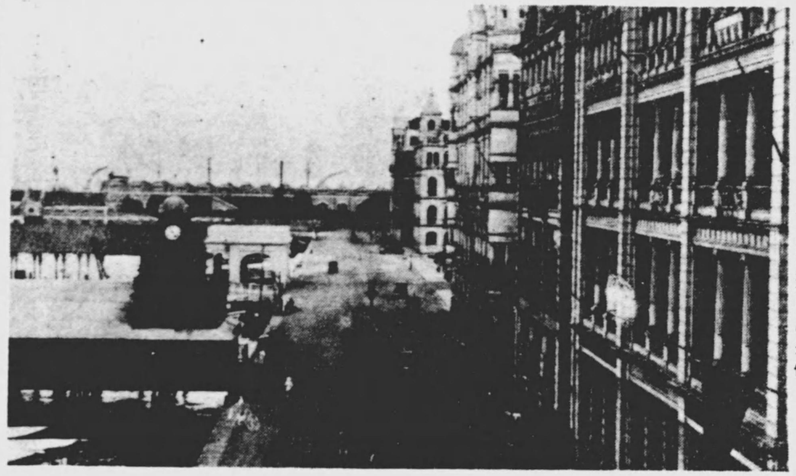
訓へは現實に此處にも運用されてゐるのである。併し、もとこれ、多くは田舍の無職者、失業者、浮浪の徒で用のなく、ごろ〳〵してゐた手合どもなのである。さればこゝに救濟の意味に於て、その傭兵を集めたとも云へるし、又兵隊どもの方では、集り來つた以上は總司令、師長、旅長から失業救濟、めぐみの積りで之を受けてよいのだといふ考へ方の解釋も出來る。

軍閥系統の首領、巨頭にしても從來からしてかう云つた意味で、一方に救濟の善事をなしつゝ、而も片方にぐん〳〵産をなして溜めて行く事が出來た。今日、天津に、大連に、又上海にと以前の督軍級、又執政總理級の者で悠々餘生を送り、租界に銀行を經營し、貧乏かせは何處を吹くかと、左り團扇を使つてゐる手合も尠くないのである。

軍隊の首腦部が、斯やうにして、一種の失業救濟を行ひつゝ産をなして行つてゐる一方に、政治家方面は政治家方面で、その地方地方の富豪、商業會議所、工場主、あたりとそれぞれの



南京城内上流家庭、家族用のフラワー、ボート（畫舫）



香港バントに見る廣東豪商の老舗

交換條件からよい話を纏めて行つてゐる。その地方に、勢力を張れる將軍はその地方の治安維持戒嚴令を布くことを名として、夥だしい要求を持ちかけ、殊に正月、五月、仲秋の節句を境に、幾萬の兵隊の給料未拂の事情を云ひ草にして、どえらい要求額を持ちかけてくる。會議所では泣きを入れて半額なり、三分の一なりに負けてもらつて應分の返事をする。かう云つたコッと同じ筆法の仕事が、政客と富豪の間にも行はれてゐる事は想像するに難くない。斯様にして軍人政客の個人的資産は隨時に增大するものと見られる。山西省の閻錫山は、さう云つた點に全然淡白であり、自ら身を持することに洵に簡素に、いつぞや自分達と面談をする時でも、ヤーメン（衙門）の大室で、手を拱いて話してゐる袖口の一部は幾分破れてゐるのが見えてゐた。それでも平氣で納つてゐる。これが又常態であると云つた人である。むしろ閻錫山その人は保境安民を終生の仕事とし、中原に一異彩を放つてゐる重厚の人であると云つてよいのである。

三十八、上海のハードン（哈同）

上海の富豪ハードン（哈同）の別莊として知られた西湖孤山の平湖秋月

支那の軍人、政客方面のものでその產をなす一般のからくりは斯やうに觀察されるのである。從つて、古來功成り、名遂げ、青雲の志を全うせんとする如き者は、政治方面のことにかけたら夢中になる傾きがある。これは東洋人一般についての一大特色と見られてゐる所である。支那の民間に見る普通の富豪は、その實業方面にわりに尠い事實を述べたのであるが、今日支那全局面の上から見て大きい財閥はといふと前に述べた浙江、廣東の二大閥である。現在の南京政府の政治的活動は、あらゆる方面のことが浙江閥に財源を得てゐる事は餘りにも有名な話である。時折り南京政府の惱まされてゐる廣東方面の低氣壓は、その後方に廣東財閥のゐるが爲めであると見られてゐる。否、更にその奥には又南洋華僑の尻押しのあるらしきこと、これらは勿論云ふを俟たない

所である。

上海に於ける屈指の富豪で、その幾億萬の富を有し、又事業界に、宗教界にとあらゆる方面に財的勢力を持つてゐるのはユダヤ人、ハードン(哈同)であるが、その第一夫人は廣東人であつて、その風采の堂々としてゐる事、又その寶石の胸飾り、ダイヤの指環など見るからに、支那富豪夫人のタイプを示してゐる者である。固より主人ハードンの財力もさる事ながら、夫人の身寄り、親戚、あらゆる方面の廣東財閥がこゝに集大成して今日ミリオネアの富をなしたものだと噂されてゐる。何れにしても上海のあの愛文義路の邸宅、愛儷園の境内は、哈同路に接し、その周圍は數哩、堂々たる高壁を以つて廻らされてゐる。内部には森あり、池あり、高壯なる洋館、支那館があり鏡の間、古美術の間、化粧の間、應接間などは云ふに及ばず、禮堂、芝居の舞臺、觀覽席、寺院、尼寺、大學、中學、孤兒院、印刷局、とあらゆる近代文化の生活組織と様式とを全部集めてゐる。その外庭園には、川あり、池亭、廻廊、花壇、運動場があり、また後庭には、藥園、林泉、などを設備してゐる。裏手の哈同路には相當な二階附きの借家の長屋を持ち、地方避難民等を收容してゐる所もある。

かゝる富豪の邸宅は、その門衞の警護嚴めしく、近來殊に客の出入を細かく八釜しく調べてゐる。これ程迄に富豪生活の設備萬端は完備してゐて、身は寶石に包まれ、何一つ不自由はなかりさうに思はれるのである。けれ共、毎日毎夜の午睡をとる夫人の部屋、又その寢室にあてられる所は、定つて居らず、又定めるわけに行かぬので常にその境内にありながら、自身に不安を感じてゐるとの事である。尙又哈同の別莊としては、杭州の西湖、孤山の一角に、大規模のものが存してゐるのは人の知る所。折り〳〵兵亂時には兵隊共の之を占領して庭が荒らされる事などもある様子である。

支那に於ける富豪の心理といふものは、一般人の想像する如く氣樂なものではないらしい。さは云へその紫檀、黒檀に青貝を鏤めた寢臺、食卓に凭り、壁には大理石の雲煙模様の吊げ額を飾り、綺羅錦繡を身に纏ひ、月夜、玉笛を聞き、客あれば好みの芝居を打たせ、出づるに高價な自動車あり、食するに幾十皿の山珍海味があり、飮むに酒あり、阿片あり、嗅ぐにピエンフ(鼻煙壺)あり、嗜むに書畫あり、扇面あり、語るに秘書古老あり、と云つた風で何一つ物足りない不自由を感ずることがない。封印りのフイルムやレコード等も求むるに從つていくらでも取り寄せられ、凡そこの世の享樂の出來るもの、物質で購ひ得らるゝ物は何一つ出來ないものはない様に出來てゐる。南の方福建厦門から臺灣邊りには土豪で自分身の廻りのこと一つするでなし、又何事をもせぬしるしを誇る爲めにとてわざ〳〵左手の爪を長くしてゐると云ふ風變りもある、この榮燿榮華の現代生活は遠き昔の隋の煬帝唐の玄宗皇帝、又宋の徽宗皇帝、明の永樂、清の康熙、乾隆皇帝あたりの夫々黄金時代の宮廷生活を樂しまれたその繁華振りと全く似た物でもあらう。

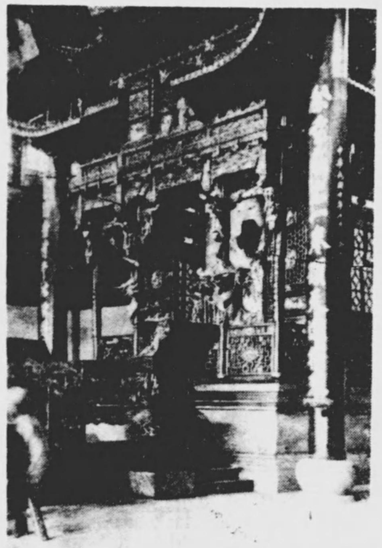
凡そ支那の傲奢な生活ぐらゐ世界の富豪生活の中で桁外れのものはあるまい。之が爲めに支那の文化藝術を極度まで進歩發達させることに、與つて力があつた。けれ共、反面に、社會政策の上から見ると、極端な人民の膏血の絞り、また人民の怨言のあちこちに擴つてゐることは覆ふべからざる事實である。いくらその巨萬の産をなし、地下室に、穴倉に、又死んで後の墓陵の中に、秘藏してもらへる寶がどつさりあつてみた所で、結局は秘藏し了せるわけのものではない。驕る者は久しからず、第二世、第三世のといふうちには必ず之を滅し、又墓陵は發かれると云つた悲運を支那ではいつも見てゐる。それ故支那に見る富豪生活は之を大局の上から見ると、一方に物質的欲望は滿たされるかも知れぬが、有爲轉變の常なきあの世相振りにありては、その文化の保存そのことすら難かしく、その生活は常に民の怨府となり、民意、大衆の氣持ちと相反すること夥しい。こゝの所の見透しがつかないで、大衆を無視し、一方に片寄つた物質慾を滿足させようとしたり、極端な企を無理押ししたりして、それが爲め、往々にして支那の王朝の沒落を早めさせたり、士豪の住宅の破壞を見たり、又その主人公の人質となる悲運を見たりする結果ともなる。又遺産相續の習慣の上から見ると、支那では古來長男のみにとらせず、成るべく之を多數の子供に等分せしむる仕組みとなつてゐる。

斯様にしておのづから支那内部の世相は富豪が獨りで永續の出來ないやうな仕組でなし崩し的に減つて行くやうに出來てゐる。又どうかすると、一と思ひに、切り崩されて行く運命を辿らせるやうにも出來てゐる。元來支那には眞の戸籍法を規定した民法と云ふものがなく、信賴の置ける戸籍臺帳一つ出來てもゐない。又ほんたうの意味の土地調査の行はれたこともない。加ふるに、世相は法律を重んぜず、そしてたゞその時代々々の實力があり、兵力がある者によつて利益が壟斷されてゐるといつた形である。だから、支那領土内に於ての住民生活は、實を云ふと富豪であればある程、安定を缺いでゐる譯である。四川に於ける土豪がわざ〳〵幾千尺の山の頂に山寨生活の地點を求め、而して山中の惡魔から脫却して特に心安らかな日常生活を求めようとし自給自足の方法に汲々としてゐる如き、これ等奥地の富豪の心理も考へて見るとまことに氣の毒に堪えないところである。それ故奥地と都城とを問はず、資産家といふ資産家は常に、上海の如き外國の法律で護つて貰へる安全地帶に出で來ようと、一動亂毎にその思ひを深めて來てくるわけである。動亂のある度に荷造りをして、日本の別府になり、その他の身寄りの處になり、幾度か交涉の手紙を寄越して來るものもある。その上海、香港、或は南洋の如き別天地を心から求めてゐると云ふことは、租界回收熱の燃えてゐる無產青年の論調とは別に、現實に又眞劍に之を念じてゐるものが多いのである。恐らくこの意味から云つて支那有產階級の爲めに、中央政府が本當に國内の治安を、又地方政府が省内の秩序を安定せしむる時代が來なければならぬ。又租界存續の止むに止まれない理由、又生命線としてその安全地帶を設定すると云ふことが内々有力に認識されつゝあるのである。こは體面論とか、國權恢復とか云ふ漠然とした取

り止めのつかない問題よりも、もつと深刻味を有し又もつと、眞劍味を帶びた富豪連の叫びである。唯時代の風潮と輿論の大勢に遠慮して、誰れしも自ら口に出さないでゐるだけのことなのである。

三十九、富者の祠堂

支那の富豪生活で目前に見えてゐる贅澤な暮し振りは大じて意に介するにも及ばぬ。その好きな儘にさせておくがよい。それにしても、支那一般から最も羨ましく思はれて居るのはその死後、その附近に堂々たる祠堂の建立せられてゐることこれである。或はその坐像で、又その神位で、以て子孫に厚く祭られ、鄉黨の人々からも參詣せられてゐると云ふこと、この點である。現世の衣食住で滿足を買ふことよりも、かう云つた永久の死後の生活に入つてから、生前同樣に、御馳走を供へ、香華を手向くる人のある事を好むのは支那一般の人情であつて、特にこの問題から



南支富豪の祠堂に見る建築美

せめて祠堂の建立位はと考へない者はない。こは美しい又純眞な氣持の現れである。又名譽心の方から、殊に從來の官吏崇拜、官尊民卑の氣持からして、祖先のうちに進士、擧人、秀才の試驗に合格し天晴れの役人でもあつた事實でもあると、之をひどく喜ぶ。その五色の絹に書かれた辭令を寶藏してゐたり、又、金文字漆塗りの額に楷書で大きく、進士の二文字、又は進士第、の三文字を入れたのを高く門に掲げ、聊か名門の後である事を示さんとする者が多い。こは祖先傳來の寶物を持つよりも、何よりも、有り難いことだとするのである。一品當朝を始め、官吏任官のことは、同時にその地位を得るに從つて相當の產をなせる事を豫期せしめるからである。又官吏への賜り物は、その役人と連絡のある店舖から之を購はしめ、その贈品は日ならずしてまたそのもとの店に回はさるゝと云つた仕組みになつてゐる。大官に取り入らんとすれば、その店の名を知り、そのコツを知つて、要領よくやらねばならぬ。こはまさかに、翰林院學士あたりの所では、それ程の事もなかつたかも知れないが、普通大官有力者の所ではかう云つた下馬評が聞かれるのである。これ等は皆官吏生活が如何にその產をなすに近道であるかを物語るものである。

（土豪といひ、官吏と云ひ、軍人と云ひ、又有識階級と云ふ。これらの者は社會の上層に立ち、その體面を維持し、大きな事を廻して行つてゐるのであるから、相當な產を必要としてゐる。さうでなければならぬ。殊に又、支那在來の習慣として、幾多の身寄り、食客を養つて行かねばならぬ。こは支

那社會に古くからある當然の習慣であつて、之が實行が出來なければ社會的地位を保つことは出來なくなる。その點は昔であらうと、今であらうと、又今日の滿洲國であらうと、同じ譯なのである。かくして支那の世相は之を二大別して、富豪階級と細民部落の二つに分類されることになる。

四十、下層民の生活相

支那の細民と云へば、到る處に充ち滿ちてゐて、その數は絶對多數を占め、一般の苦力階級は固より、街路に見る物賣り、茶椀つぎ、車夫、馬丁、人夫、水撒き、手品師、輕業師、と云つた部類の者からして兵隊、巡警（巡捕）あたりもその多くは之に包含せられる。水鄉に働く船頭などもそれに屬する者が多い。支那の社會では、これ等の細民階級に屬する者は、いくらその子供を學校にやらうとしても、その收入の點からゆとりがつかない。夫婦共稼ぎをしてゐる外に、子供にも駄果子を賣らせたり、煙草を賣らせたり、口過ぎをさせてゐる。それで家族全體の口をやつと糊することが出來てゐる。一里二里と先からお祭りの催しを見に來るに電車費すらも持たないと云つた

南支の下層民より山門に入りたる高僧
調頂に十二の灸點あり

手合である。質に鍋釜を入れるにしても、僅なめしの料にすらならない。これほどひどい細民は、支那全國に幾千萬ゐるか、又何億ゐるか、判らぬ。之が事實上支那人口の八九分通りを占めてゐると見てよい。その纔かに女房を持つて夫婦暮しをしてゐる者、また家內を田舍の鄉里に置き、自分は都に出で、車をひき、荷役を手傳ひ、胡弓賣りをしてゐるといつた者はまだよい方の部類である。女を持つことも出來ず、年老いて、つひに獨身で止むなく一生を終らなければならぬと云ふ者が、どの位あるか解らない。都の大道から路次の中へ這入ると、ゴミ溜めの蓋を開け、指で掻き廻しては何物かを摘まみ出し、口を動かしてゐる手合もゐるし、又ゴミ車を押して、その先端に線香など立て、念佛を唱へつゝ、朝早く路次から出て來る者もある。マードン（馬桶）の便器を集め、よい匂ひのする黃金の荷物を車に滿載し曳張つてゆく者もある。又その胡弓賣りと云ふは、胡弓を數多纏めて之を肩にかつぎ、右手に輕く操りつゝその淸き音を彈き出し、樂しみ且つ賣り步いてゐるといふ手合なのである。かう云つた貧者細民風情でも、その寢るところ、合宿所の門の扉には君子は貧を憂へずなんて何處までも富豪の向

北平城內往來を流してあらく理髮人

ふを張つた洒落た文字を掲げ、心にゆとりを示して、その大きく澄ましてゐるといふ先生も見られる。

四十一、細民生活の内容

支那の世相を財産の方面から見、貧富の兩者に分けて見て來ると、大略かやうな觀察が總括的にくだされる。しかも細民必ずしも精神的には、ひがんでも居らず、洒々落々として割りにゆつたりした氣分を持ち、雨は降り續き、饑餓に迫つてゐるやうなときでも、仲間同士で互に助け合ひ、どうにかしのいでやつてゐる。家に茶椀、箸の持ち合せのある者も少く、毎朝、眼が醒むれば路次の入口、お粥店に行つて銅錢を投げ腹を膨らしてゐる。中には竹の筒をガラン〳〵振つて、おみ籤やうのよい札を引き出し、一錢の銅貨でお粥の數杯を贏ち得るといふ果報者もある。又見たところ乞食姿をしてゐても、富豪たちから尊敬される神仙の如きものもあり、その中には全くの高僧なんかもゐたりする。細民か土豪か、土豪か細民かその別なく、渾然として一裸體の民國住民である。

注來で爭菜を值切るおかみさん（南支所見）

るのだと云ふ氣魄を示し、揚々として、我れは、現代、社會相の第一線に身を曝らしてゐるのだと云つた風にしてゐる處は、何れが强きか、何れが弱きか、判定に苦しましむるものがある。こは支那民族性の現代相から見た特別な土豪細民の觀察法である。

尙支那細民心理のうち特に日本のそれと異る點をこゝにつけ加へて置く。それは日本では、たとひその日の暮しに困つてゐる親達であつても、その子供の將來、教育と云ふことについては、國の勃興氣分を物語ると云ふか、現在の自分は之で朽ち果つるとも、せめて子供は偉い者にしてやりたいとて鍋釜賣つても子供につくす。そして、一にも學校、二にも學校、學校教育でなくては、子供は偉くなれないのだ、と一念に考へてゐるところがある。學校中毒にかゝつてゐるところもあるが全くさうなのである。

それ故日本は下層階級からも可なり人物が出る。又國家社會の方でも、その建前から、國民教育を公平に取扱ひ、父兄の氣分に添ふやう夫々の施設が出來てもゐる。又細民の子供自身にしても奮發努力をしてゐる。この三拍子がうまく揃つて今日の國家を隆盛ならしめてゐるのである。こゝに、國の産業、又軍國氣分、學問の進歩、交通の發達など云ふものが大成せられてゐるのである。

所が支那にあつてはその親しく下層民の部落生活を見、又その親達の心持を見てみるに、別段その現狀以上に高きを目指し、鍋釜賣つて迄と云ふ心掛けのものも見出されず、又貧民特殊學校と云つた

如きもあまり見出されない。それに又子供自身が自分で偉くならうと努めもせず、又さう考へてもゐない。その軍人、學者、實業方面に偉くなる者はおのづから、初手から別の世界の人であり、自分達とは、階級が違ふのだ、と運命論でも考へてゐるかの如く諦めさせられてゐる觀がある。稀に幾十萬、幾百萬の中から例外の出ることはあるにしても、大體の雰圍氣は、この運命觀が自ら社會相を二分してゐる。古の文學者は、王侯、將相、なんぞ胤あらんやなどと筆を走らせてゐたりするが、當人達自身はさう云つた野心向上氣分は持たない。

然らば、支那の大衆を形造るこれ等の下層民達は、全く努力をしてゐるものはないのか、と云ふと、日本の細民以上によく働き、根よく稼いでもゐる。日本の細民の下の下、以下のもつと甚だしい者もある。その乞食に近い食ひ方をしてゐる無數の手合は、支那何れの地方にもごろ〳〵してゐる。然しその細民の子弟達が、日常のする事、なす事を見てゐると

路傍にて客にニコニコ腹ごしらへ　南支所見

例へば驛に、又碼頭に、紳士連の捨てた吸ひ殻を集める仕事をしてゐる者などもゐる。火の未だついてゐるのを奪ひ取るやうにして互に拾ひ、自らその餘香を味はんとするのもゐるが、併し多くはさうでない。之を拾ひ溜めて、紙に包み、親方の所へ持つて行くのである。中にはスリーカツスルだのウエストミンスターだのいふ未だ美しい、新しい空箱を集め持つてゆく者もある。すると親方の方では之を買ひ取つてやつて、古新聞の上などに、幾山となく、その屑煙草の複雑な匂のするのを溜めてゐる。そして之を部下に仕事として與へるのである。手にしたの者は、小さく四角に切られた薄い紙を揃へ、爪で以てすらし、糊を塗り、一枚々々それを爪で剝がし取り、小さい豆匙で以て刻みの山から一杯つゞその紙片の上にのせる。指で細巻きに巻く。その邊の手際は如何にも巧みな者で之が糊づけされる。そばに用意せられた白の吸口を之に挿し込む。細巻が出來上つたのは十本づゝ夫々の箱に納められると云ふ順序。之が細民達のゐる路次の曲り角あたりに、露店の壁に沿ふて並べられてゐる格安の巻煙草なのである。規定の値段よりか滅法界に安く、三分の一又四分の一ぐらゐのところで商賣されてゐる。しかも尙ほ驚いたのは、煙草の箱の一偶が摘み切られ、細巻の一本が少し頭を出してゐる。こは一本賣りに便せられてゐるわけなのである。

かう云つた巻煙草作りの小景は、南支那の港邊りに注意せられる一場面であるが、これ程までにつましく考へられてゐる生活振りと云ふものは日本人などの到底考へもつかぬことであり、又人の棄て